

# 東岡山遺跡

－中世後半から近世に連続する集落遺跡の発掘調査報告－

2007年3月

岡山市教育委員会

題簽 水内昌康先生



211



215

# 東岡山遺跡

－中世後半から近世に連続する集落遺跡の発掘調査報告－

2007年3月

岡山市教育委員会

# 序

吉備とは、律令制下における備前国、備中国、美作国、備後国の4カ国の範囲を占める広大な地域です。しかも、大和に匹敵する勢力を持っていた地域ともされています。岡山市域は、この吉備の中心地の大半を占めています。そのため、全長が100mを越える大型古墳が10基もあり、最大規模の造山古墳は、全長が350mもあります。全国で最も大きな古墳を築いた大和や河内の 大王墓と比べても遜色ありません。また、古代寺院跡である賞田庵寺では、畿内中央でも宮殿や有力豪族の氏寺にしか使用されない凝灰岩の壇上積基壇が認められます。質・量ともに優れた遺跡が多数存在する、極めて文化的・歴史的に恵まれた地域的特色を有する市といえます。

東岡山遺跡は、市道建設に伴って発掘調査されました。調査の結果、弥生時代前期前半の遺構や遺物が見つかり、付近でも最古の部類に属する集落遺跡であることが明らかとなりました。また、県下ではあまり調査例のない中世後半から近世前半の集落の変化を連続的にとらえることができました。近世社会の成立を在地の視点から解明するための大変貴重な資料になるものと期待されます。

本報告書は、以上の調査成果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料として多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と、発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成19年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 山根 文男

## 例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化財課が平成16年9月21日から平成17年1月31日にかけて市道建築工事事業に伴う、岡山市下248-1の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その報告書は草原が担当した。
3. 遺物の実測およびトレースは、岡本東美、矢部桃子、山元尚子、和田かほりがおこなった。写真撮影は西田和浩（文化財保護主事）がおこなった。編集は草原がおこなった。
4. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
5. この報告書に用いている方位は真北である。
6. 図2は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「岡山北部」と「岡山南部」を複製し、「改訂 岡山県遺跡地図 第6分冊 岡山地区」の遺跡範囲および遺跡名を加筆・修正したものである。
7. 遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

# 目 次

卷頭図版

序

例言

目次

第Ⅰ章 位置と環境 ······ ······ ······ ······ ······ 1

第Ⅱ章 調査の経過 ······ ······ ······ ······ ······ 10

第Ⅲ章 遺構と遺物 ······ ······ ······ ······ ······ 13

I. I区 ······ ······ ······ ······ ······ 13

II. II区 ······ ······ ······ ······ ······ 30

III. III区 ······ ······ ······ ······ ······ 55

IV. 出土遺物観察表 ······ ······ ······ ······ ······ 71

第Ⅳ章 結語 ······ ······ ······ ······ ······ 78

I. 東岡山遺跡の構成 ······ ······ ······ ······ ······ 78

II. 中世から近世初頭にかけての集落変遷の画期点 ······ ······ 81

III. 弥生時代前期：P385・溝11出土土器の時期 ······ ······ 96

IV. 古墳時代前期：井戸1～3出土土器の時期 ······ ······ 101

図版

報告書抄録

## 挿入図目次

図1 東岡山遺跡の位置	1	図32 P 385 出土遺物 (1/4)	33
図2 周辺の遺跡	2	図33 P 368 (1/30)	32
図3 調査区域図 (1/2,500)	11	図34 P 368 出土遺物 (1/4)	32
図4 I区 西壁 断面 (1/80)	13	図35 溝9・溝11・P 385 (1/60)	33
図5 I区 中世前半(13世紀後半)遺構配置図 (1/160)	15/16	図36 溝11 出土遺物 (1/4)	34
図6 P 50 (1/60)	14	図37 II区 古墳時代 遺構配置図 (1/160)	35
図7 P 50 出土遺物 (1/4)	14	図38 堪穴住居1 (1/60)	34
図8 I区 中世後半(14世紀後半~16世紀) 遺構配置図 (1/160)	17/18	図39 堪穴住居1 出土遺物 (1/4)	34
図9 柱穴列1 (1/60)	19	図40 堪穴住居2 (1/60)	36
図10 柱穴列2 (1/60)	19	図41 P 460 (1/30)	36
図11 柱穴列3 (1/60)	19	図42 P 460 出土遺物 (1/4)	36
図12 柱穴列4 (1/60)	20	図43 P 369・P 370 (1/60)	37
図13 柱穴列5 (1/60)	20	図44 溝9 (1/60)	37
図14 柱穴列6 (1/60)	20	図45 溝9 出土遺物1 (1/4)	38
図15 溝1 (1/60)	21	図46 溝9 出土遺物2 (1/3)	38
図16 溝1 出土遺物 (1/4)	21	図47 溝25 (1/60)	39
図17 溝2 (1/60)	21	図48 II区 中世後期(15~16世紀) 遺構配置図 (1/160)	40
図18 溝2 出土遺物1 (1/4)	22	図49 溝7 (1/60)	39
図19 溝2 出土遺物2 (1/3・1/2)	21	図50 溝7 出土遺物1 (1/4)	41
図20 溝6 (1/60)	22	図51 溝7 出土遺物2 (1/4)	42
図21 溝6 出土遺物1 (1/4)	23	図52 溝7 出土遺物3 (1/4)	43
図22 溝6 出土遺物2 (1/4)	24	図53 溝7 出土遺物4 (1/3)	43
図23 溝6 出土遺物3 (1/4)	25	図54 溝8 (1/60)	44
図24 溝6 出土遺物4 (1/3)	25	図55 溝8 出土遺物 (1/4)	45
図25 I区 近世(17世紀前半)遺構配置図 (1/160)	27/28	図56 II区 中世遺構面 出土遺物 (1/4)	44
図26 溝3 (1/60)	26	図57 II区 近世初頭(17世紀前半) 遺構配置図 (1/160)	46
図27 溝3 出土遺物 (1/4)	29	図58 建物1 (1/60)	47
図28 I区 近世水田層 出土遺物 (1/4)	29	図59 建物2 (1/60)	47
図29 II区 西壁・東壁 断面 (1/80)	30	図60 建物3 (1/60)	48
図30 II区 弥生時代前期 遺構配置図 (1/160)	31	図61 建物4 (1/60)	48
図31 P 385 (1/30)	32	図62 柱穴列7 (1/60)	49
		図63 柱穴列8 (1/60)	49
		図64 柱穴列9 (1/60)	49

図65 柱穴列10 (1/60) .....	49	図92 建物5 (1/60) .....	62
図66 柱穴列11 (1/60) .....	50	図93 柱穴列12 (1/60) .....	64
図67 墓1 (1/30) .....	50	図94 柱穴列13 (1/60) .....	64
図68 墓2 (1/30) .....	51	図95 P443・溝12 (1/60) .....	64
図69 墓2 出土遺物 (1/6・1/4) .....	51	図96 P443 出土遺物 (1/4) .....	64
図70 墓3・4・5 (1/30) .....	52	図97 溝20 (1/60) .....	65
図71 墓3 出土遺物 (1/4) .....	52	図98 溝20 出土遺物1 (1/4) .....	65
図72 P354 (1/30) .....	53	図99 溝20 出土遺物2 (1/4) .....	66
図73 P354 出土遺物 (1/4) .....	53	図100 中世後期遺構面 出土遺物 (1/2) .....	66
図74 II区 近世遺構面 出土遺物 (1/4) .....	53	図101 III区 近世後期(18・19世紀)遺構配置図 (1/160) .....	67
図75 II区 近世後期(18・19世紀)遺構配置図 (1/160) .....	54	図102 P393・394・395・431 (1/60) .....	68
図76 P317 (1/60) .....	55	図103 P445 (1/60) .....	69
図77 III区 北壁 断面 (1/60) .....	55	図104 P445 出土遺物 (1/4) .....	69
図78 III区 弥生時代前期 遺構配置図 (1/160) .....	56	図105 P446 (1/60) .....	69
図79 P459 (1/30) .....	57	図106 P447 (1/60) .....	70
図80 P459 出土遺物 (1/4) .....	57	図107 P447 出土遺物 (1/4) .....	70
図81 III区 古墳時代 遺構配置図 (1/160) .....	58	図108 溝18 実測図 (1/60) .....	70
図82 井戸1 (1/30) .....	57	図109 東岡山遺跡の周辺微地形 (1/10,000) .....	78
図83 井戸1 出土遺物 (1/4) .....	57	図110 山手川用水の変遷 .....	79
図84 井戸2 (1/30) .....	59	図111 僧前焼変遷概略図 .....	85/86
図85 井戸2 出土遺物 (1/4) .....	59	図112 14世紀後半・15・16世紀の遺構変遷図 (1/1,000) .....	88
図86 井戸3 (1/30) .....	60	図113 東岡山遺跡周辺の水利系統図 (1/10,000) .....	89
図87 井戸3 出土遺物1 (1/4) .....	61	図114 17世紀前半の遺構配置図 (1/1,000) .....	92
図88 井戸3 出土遺物2 (1/3) .....	60	図115 弥生時代前期の土器の変遷 .....	97/98
図89 古墳時代 溝・南西部壁 断面 (1/60) .....	62	図116 古墳時代前期の土器の変遷 .....	103/104
図90 溝15・16・17 出土遺物 (1/4) .....	61		
図91 III区 中世後期(15・16世紀)遺構配置図 (1/160) .....	63		

# 第Ⅰ章 位置と環境

東岡山遺跡は岡山平野の中央部に位置する。そこは高梁川・吉井川とともに岡山三大河川の1つである旭川の東岸平野の中央になる。岡山平野の水田耕地は現在25000haであるが、そのうち20000haまでが近世を中心開発された干拓によって生み出されたものである。岡山市街地の南から児島湖にかけて広がる広大な水田地帯は、中世までは瀬戸内海へ続く内海で、古代には「吉備穴海」と呼ばれていた。今でこそ旭川両岸平野は、岡山平野北半のやや山寄りに近い印象を受けるが、近世以前はまさに岡山平野の中心であった。周囲の水田地割りには正方位の条里地割りが残り、古くから開発がおこなわれたことがうかがえるといわれてきた。東岡山遺跡のある岡山市下、長岡は、明治22年に、神下、四御神、乙多見、長利、土田、米田の7ヶ村が合併して財田村となり、昭和25年には財田町になった。そして、昭和29年に岡山市へ編入合併された。新幹線が開通した後までは、水田の方がかなり目立っていたが、旧国道2号線や東岡山駅に近いという地理的条件に後押しされ、現在は宅地化がすすみ、都市的な景観へと変貌をとげつつある。

中国地方を山陽と山陰の南北に分ける中国山地は標高1000~1100mの山々がそびえ、その南には標高300~600mの典型的な隆起準平原である吉備高原が沿岸部の平野まで続く。旭川は中国山地西南部に源を発する大河川で、吉備高原を削り、標高257mの吉備高原の南端である竜ノ口山と、標高499.5mの金山山塊の間から平野部へ流れ出る。支流である新庄川、備中川、宇甘川などを合わせての流域面積は約1600km<sup>2</sup>である。現在は岡山市江並で児島湾に流入しているが、かつては繩文海進により生じた内海である吉備穴海に注いでいた。繩文海進や沖積地の形成環境についての基礎データに関しては、岡山城三之曲輪の発掘調査（乗岡1990）では繩文海進期の汀線を示すカキ礁の形成された波蝕台

が確認され、岡山城二之丸跡や南方釜田遺跡の発掘調査では繩文海進期の浅海の海底にある生痕内で赤ホヤ火山灰（B.P. 6~6.54千年）や、さらにその下方で一次的な堆積とみられるA T火山灰（B.P. 2.1~2.23万年）が確認されている（肩崎1989）。

旭川の両岸に広がる平野は、東岸を旭東平野、西岸を旭西平野と呼称されている。旭東平野は北端の竜ノ口山から南端の操山までで、南北3km、東西4kmの範囲である。旭西平野は北端のダイミ山、西端の矢板山、南端の岡山市鹿田あたりの旧海岸線の南北5km、東西2.5kmの範囲である。両平野ともほぼ同じ広さではあるが、旭東平野の方が若干標高が高い傾向にあり、より扇状地的な地形を形成している。

旧石器時代の遺跡は少ないが、操山山塊からはナイフ形石器が採集されている（鎌木1962）。平野部で遺跡が

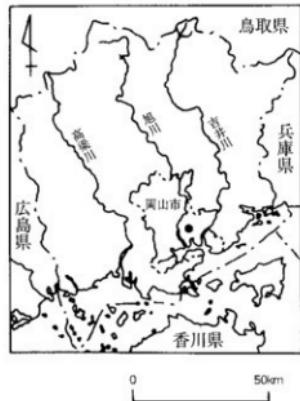


図1 東岡山遺跡の位置



- |            |           |              |             |             |
|------------|-----------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 東岡山遺跡   | 6. 南国長遺跡  | 11. 旗振台古墳    | 16. 輪多廃寺    | 21. 百間川米田遺跡 |
| 2. 百間川沢田遺跡 | 7. 片山古墳   | 12. 操山21号墳   | 17. 居都廃寺    | 22. 南古市場遺跡  |
| 3. 百間川兼基遺跡 | 8. 備前車塚古墳 | 13. 上の山古墳    | 18. 唐人塚古墳   | 23. ハガ遺跡    |
| 4. 乙多見遺跡   | 9. 山王山古墳  | 14. 百間川原尾島遺跡 | 19. 沢田大塚古墳  | 24. 雄町遺跡    |
| 5. 赤田東遺跡   | 10. 金蔵山古墳 | 15. 賞田廃寺     | 20. 備前國府推定地 |             |

図2 周辺の遺跡

確認されるのは縄紋時代後期からで、旭東平野にある百間川沢田遺跡では多くの土器とともに炉床や貯蔵穴が認められ（平井ほか1993）、旭西平野にある津島岡大遺跡（山本ほか1992）でも同じ様相である。また旭西平野の北端、まだ平野が形成される以前の遺跡であるが、朝夜鼻貝塚からは前期の頃のプラントオバールが検出され（富岡ほか1998）、コメ栽培の起源をめぐる新たな資料を提供している。ただ県南部の縄紋時代の遺跡の動向をみると、後期において遺跡数が増加する傾向があり、この点と生業活動との関係が注目される。かなり古くからコメ作りをおこなっていることを示す資料が提示されたことからも、コメ栽培の開始と水田稲作の開始は異なった歴史的意味があると考えられる。水田稲作は水田を開発し、維持することによって広域の集団関係を形成し、それが現代まで続く列島社会の基盤であることからも、縄紋時代のコメ栽培とは区別される。最も古い水田遺構は津島江道遺跡（神谷1988）で検出された微地形に即した小区画水田遺構である。出土した土器は突帯紋土器で、小型の石鍬も伴っている。水田耕作に石鍬が伴っている例としては、静岡県宮竹野遺跡（太田1984）の小区画水田から出土した例があり、県南部の沖積地の遺跡からも石鍬が出土した例がいくつもあることから、石鍬で水田を耕作していた可能性は高い。ただ突帯紋期の集落遺跡の様相が明確でなく、弥生時代前期初頭のような拠点集落が出現していたかどうかについては今のところ明らかではない。

弥生時代前期初頭には旭西平野では津島遺跡（正岡ほか2000）が、やや遅れて旭東平野では百間川沢田遺跡が形成される。津島遺跡は県下最古の拠点集落であり、出土した土器の成形技法から最古の遠賀川式土器とする見方もある（家根1987）。百間川沢田遺跡は東西85m、南北100mの環濠集落で内部には竪穴住居や木棺墓がある。環濠内縁部は遺構の認められない空白部分で、環濠埋土に内部から崩落した土層が認められることから、内側に土塁がめぐらていたことも推測される。やや時期は降る前期中葉から後葉の環濠集落が矢掛町清水谷遺跡（藤江ほか2002）で明らかになっている。この環濠集落の内側では竪穴住居と小溝や柱穴が検出されているが、墓や土塁は認められない。完全にめぐらぬものの横列等の遮断施設はあったようである。今のところ県下では前期の環濠集落は2例だけであるが、両遺跡とも環濠集落といった範疇では共通するものの、その構造や時期はかなり個性があることがうかがわれる。前期の水田は、古くから指摘されていた津島遺跡の河道の肩部分に形成された溼田タイプと、微高地縁辺あるいは微高地低位部の乾田・半乾田タイプの二者がある。現況では後者の水田例が多く、當時も主体であったと考えられる。津島江道遺跡の水田も後者の水田である。

弥生時代中期になると、旭西平野の中央には南方遺跡群（出宮ほか1971）が形成される。前期の遺構や遺物が検出されていることから、前期の段階でも集落域であったが、中期中葉になると爆発的に遺構・遺物が認められるようになり、しかも径1～1.5kmの範囲の複数の微高地が同じ様相となる。集落景観は各微高地を全面調査した例がなく細部にわたっては明確にできないが、断片的な調査例から、1つの微高地は居住域と墓域で構成されており、しかも微高地間には格差が認められないことから、構造的には微高地を1つの単位とする等質的な集落が集合していたという様相であったと考えられる。このような集落構造が、当地の中期における拠点集落の大まかな景観であったと推測される。南方遺跡の発掘調査では大量の土器や石器とともに極めて精巧な木製品が多数出土しており、当時の木工技術の高さをうかがい知ることができる（扇崎2005）。旭東平野でも百間川兼基遺跡（高畠ほか1982）から大形掘立柱建物群、隣接する乙多見遺跡（正岡1989）からは河内産の土器が出土し、赤田東遺跡（草原2005）からもまとまった遺構が検出されている。旭西平野と同様に拠点集落が形成されていた可能性が高い。

中期末になると、南方遺跡群は一部に遺構が認められる微高地があるものの、総体的には遺構や遺物が認められなくなる。一方、津島遺跡や鹿田遺跡（山本ほか1988）など周辺に新たな集落が形成される。中期末には南方遺跡群は解体したと考えられる。旭東平野についても赤田遺跡などの新たな集落が認められることから、集落域などに変化があった可能性が高い。

弥生時代後期は、大小の遺跡が各所に認められる。岡山市域西端の足守川流域では特定集団墓・特定個人墓である墳丘墓の発達が顕著で、供獻に用いた壺・器台が大形化した特殊器台・壺を伴っているものもある。特殊器台・壺は出雲地域の首長墓からも出土しており、地域を越えた首長間の政治的交流に用いられている。ただし山間の集団墓からも出土する例もあり、それ自体が序列を明示していたわけではなさそうである。旭西平野でも墳長が約20m×19mの都月坂2号墓（近藤1986）があるものの、後の古墳時代前期初頭の前方後円（方）墳の数からすると少ない印象が強い。平野部の遺跡である備前国府推定地（南国長）遺跡（河田1998）からは特殊器台・壺が出土した土壙（墓？）が検出されており、墳丘墓自体も平野部に存在していた可能性もあると思われる。時期は異なるが、備前国府推定地（南国長）遺跡の南側の平野部から、墳丘を削平された古墳群（桑田1994）も調査されている。

後期末になると広範囲で洪水砂に埋もれた水田が検出される。当時の水田システムをそのまま保存した極めて良好な遺構であるが、当時としては生産域の大半を失う社会的には壊滅的大打撃であったと推測される。しかし、直後の古墳時代前期初頭には周囲の山塊に数多くの古墳が築かれており、この洪水との関係を指摘する考え（下澤2000）もある。

古墳、とりわけ前期の前方後円（方）墳の築成の特徴を検討する上で、旭東・旭西平野は極めて良好な資料を提供している。平野を囲む山塊に古墳が位置していることから、それら古墳の築造母体が両平野部であり、1つの単位地域のなかの古墳と仮定できる。具体的な築成状況を見てみると、旭西平野では特殊器台形埴輪を伴うか、もしくは伴う時期である可能性のある前期初頭の前方後円墳は5基あり、それらの分布から3つのグループに分けられる。Aグループは墳長55mの前方後円墳の片山古墳である。Bグループは墳長45mの前方後方墳の七つ块1号墳、墳長25mの前方後方墳の七つ块5号墳（近藤1987）、墳長33mの前方後方墳の都月坂1号墳（近藤1986）の3基である。Cグループは墳長33mの前方後方墳の津倉古墳である。旭東平野では2つのグループに分けられる。Dグループは墳長48mの前方後方墳の備前車塚古墳（近藤1986）、Eグループは墳長92mの前方後円墳の網ノ浜茶臼山古墳（宇垣1988）、墳長74mの前方後円墳の操山109号墳（宇垣1988）、墳長34mの操山103号墳（草原2002）である。

その後、A・Cグループは継続する前方後円（方）墳ではなく、Dグループも墳長68.5mの山王山古墳以降は見当たらない。山王山古墳は測量調査の結果、前期初頭の前方後円墳の1つである前方部が撥形に広い形態とされているが、採集されている埴輪は受口状の特徴はあるものの、文様が喪失した普通円筒埴輪や壺形埴輪である（宇垣1988）。当地では、撥形の前方部は少し時期幅があることを示している。したがって、埴輪が採取されていないか、もしくは伴っていない可能性のある操山103号墳、津倉古墳、七つ块5号墳、片山古墳などは若干時期が降る可能性もある。いずれにせよ、A・C・Dグループは前期初頭前後には前方後円（方）墳の築成はなくなる。Bグループには前期中葉になると墳長約150mの前方後円墳の神宮寺山古墳（鎌本1962）、Eグループには墳長約120mの前方後円墳の渕茶臼山古墳（近藤1986）が築かれる。旭川两岸の複数のグループがそれぞれBとEのグループに集約され、全長100mを越える大形古墳が出現したと考えられる。その後、前期後葉になると、

Bグループには前方後円墳はなくなり、Eグループのみが墳長165mの金蔵山古墳（鎌木1959）を築く。ただし、中期初頭になるとどのグループも前方後円墳を築かない。つまり、前方後円（方）墳の系譜が途切れるのである。

参考までに、奈良県の大和盆地における古墳の築成状況を見てみたい。前期の前方後円（方）墳だけに限っても、数が膨大であり、詳細を把握するのは不可能に近いほど困難であるため、墳長200m前後を越える巨大古墳についてのみ見てみたい。大和盆地ではA～Eの5グループが認められる。Aグループは盆地南東部で箸墓古墳→西殿塚古墳→行燈山古墳→渋谷向山古墳で、前期初頭から後葉まで繼起的に築かれる。Bグループは盆地南部で、桜井茶臼山古墳→メスリ山古墳が前期初頭から中葉まで築かれる。Cグループは前期中葉から盆地北部で五社神古墳→宝来山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Dグループは前期後葉に盆地南部の巣山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Eグループは前期後葉に盆地南西部の鳥ノ山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Aグループには墳長が100mを越える古墳がいくつもあり、渋谷向山古墳以降に位置づけられる古墳もあるかもしれないが、墳長200mを越える巨大墳の系譜は途切れたといえる。以上のように、それぞれのグループの古墳の築成動向はまちまちであり、基本的には各グループの集団関係を反映させていると考えられる。これは古墳の規模は異なるが、旭西・旭東平野の状況と共通すると考えられる。古墳の築成について、畿内中央からの規制が及んだという意見（小野山1975）や、築成状況の変動が列島規模で共通するといった意見（都出1991）もあるが、旭西・旭東平野と大和盆地だけを見ても、個別で不安定な築成をしていることが看取される。それは前期から中期にかけての古墳の築成をみる限り、規模などの量以上の差が、後の畿内中央と呼ばれる地域と地方との間にあったとは思われないのである。いずれにせよ旭西・旭東平野は古墳時代を考えるための良好なフィールドといえる。

中期後半になると、旭西平野では墳長65mの前方後円墳の一本松古墳（近藤1986）、塚の本（おつか様）古墳（近藤1988）が築かれる。旭東平野では前方後円墳は築かれないが、一辺27mの旗振台古墳（鎌木1962年）に代表されるように、比較的大きな方墳が築かれる。また金蔵山古墳の谷を挟んだ西側尾根上にある径20mほどの円墳である操山21号墳からは、川西編年（川西1978）IV期と推定される埴輪片（草原2004）が採集されている。旭東平野北側の山裾部でも、もう少し小規模である上の山古墳（出宮ほか1974）などがある。おそらく中期初頭以降、20m前後規模の方墳や円墳が旭東平野における首長墓として複数築かれているのだと思われる。一方こういった山塊上に築かれた古墳のほかに、平野部でも古墳群が形成されている。それは中井・南三反田遺跡で一辺、もしくは径12m前後の小墳が10基以上まとめて築かれている（桑田1994）。墳丘は削平されており周溝のみが残るが、埴輪は出土していない。古墳群の全貌は明らかではないが、山塊上の古墳に比べると規模も小さいものが主体で、埴輪も持っていないことから、平野部の古墳はより下位クラスの古墳であった可能性が高い。

古墳時代の集落は旭西平野では津島江道遺跡（草原1998）、津島遺跡（正岡ほか2000）、鹿田遺跡（山本ほか1988）、旭東平野では百間川原尾島遺跡（宇垣ほか1999）、同沢田遺跡（平井ほか1993）、同兼基遺跡（高畑ほか1982）、赤田東遺跡などがある。いずれの集落遺跡も6世紀末までは竪穴住居が主体であるが、百間川兼基遺跡では5世紀の時期で、しかも規模の大きな縦柱建物が棟方向を合わせて並んで検出された。竪穴住居もあるが、それらは縦柱建物と重複しているものもあることから、竪穴住居と縦柱建物は時期的に分離できる可能性が高い。そうすると縦柱建物は倉庫群として独立して存

在していたといえる。該期の規模の大きな倉庫群は大阪府法円坂遺跡や、和歌山県鳴滝遺跡などの例があり、百間川兼基遺跡の倉庫群は、以上の2遺跡ほどの規模はないものの、それらに準ずるものといえる。付近に首長層の居宅があるのか、もしくは屯倉の前身となるような遺跡であるのかもしれない。原尾島遺跡では滑石製玉類の未製品が出土しており、5世紀後半から末に当地の集落の中には玉作りをおこなっているものがあったことを示している。また製鉄遺跡にしても、一本松古墳から鉄槌や鉄錐などが副葬されていることから、中期段階でも存在していた可能性が高いが、今のところ集落遺跡からは検出されていない。おそらく中期は一本松古墳クラスの首長に直接的に掌握されていたと思われる。6世紀後半になると製鉄関連の遺物や、構造が認められる集落が多くなる。津島江道遺跡では鍛冶炉や鉄滓、鉄製品が出土している。遺跡背後にあるダイミ山を北へ越えた笹ヶ瀬川流域の小単位平野周辺の丘陵には、多数の後期古墳がある。大規模な製鍊遺跡（乗岡1991）もみつかっており、付近の丘陵部では鉄滓も散布している。まだまだ多くの製鍊遺跡が埋没している可能性が高い。一方、笹ヶ瀬川流域の平野は面積も狭く、発掘調査によっても安定した平野とは言い難い（伊藤ほか1999）。数多くの後期古墳の母体となる平野とは考えにくいのである。おそらく旭西平野の墓域でもあったと考える方が妥当であろう。そして、鉄生産についても、笹ヶ瀬川流域で製鍊をおこない、旭西平野で鍛冶をおこなうといった地域的な分業システムも想定される。赤田東遺跡では6世紀後半～9世紀まで継続する集落が調査されており、堅穴住居から掘立柱建物へ6世紀末～7世紀初頭に変わることが確認された。県下では百間川原尾島遺跡、倉敷市矢部遺跡（江見ほか1995）で7世紀初頭の掘立柱建物で構成される集落が検出されており、少なくとも県南部における集落の一般的な様相であった可能性が高い。

飛鳥・奈良時代になると、旭東平野には賞田庵寺（出宮ほか1995、高橋ほか2005）、幡多庵寺（出宮ほか1975）、居都庵寺・網ノ浜庵寺などの古代寺院が集中する。一方、旭西平野には古代寺院は認められない。わずかに旭西平野に北接する笹ヶ瀬川流域で津高北庵寺（伊藤1986）がある。笹ヶ瀬川流域は古代の津高郡で、旭西平野が三野郡であり郡域が異なっている。しかし「津高郷買賣券」（774～777年）に津高郡の小領として、三野臣の名がみえることや、津高を冠した氏名の氏族が検出できないことから、三野郡と津高郡は旭西平野を基盤とした古代豪族である三野氏の領域と考えられている（吉田1990）。したがって津高北庵寺も旭西平野の古代寺院といえる。とはいって、旭東平野の寺院数と比べると劣勢は否めない。このような差は古墳時代後期から認められる。いわゆる巨石を用いた大形石室を構築している巨石墳は唐人塚古墳（草原2001）や、沢田大塚古墳（岡山理科大学学友会考古学部1970）など、旭東平野には認められるが、旭西平野ではなく、操山山塊や竜ノ口山塊には群集墳が形成されているものの、笹ヶ瀬川流域を含めた旭西平野でも群集墳まで古墳を集中して築いた古墳群は認められない。

奈良時代になると、旭東平野を基盤とする古代豪族である上道氏が朝臣を下賜され、しかも上道朝臣斐太都のように中央政界で官人化していくのは、そういう基盤が以前から形成されていたことを示している。三野氏は朝臣も下賜されていない。備前国府も旭東平野に想定されており、それも両平野を基盤とする勢力の状況を反映させているものと思われる。官衙遺跡は、旭西平野では津島江道遺跡で、奈良時代の総柱建物がまとまって検出されており、御野郡衙に伴う倉院である可能性も推測されている（岡田1992）。しかし、隣接する発掘調査区の成果と整合させてみても、それほど大規模ではない（草原1998）。延暦一四年（795）に規定された郷倉に相当することも考えられる。旭東平野で

は「市」を墨書きした土器が出土したり、総柱建物がまとまって検出された米田遺跡（物部2002）が備前国府の国府津に推定され、雄町遺跡は方八町域の備前国府の南限に推測されている（高橋1969）。ハガ遺跡では、備前国府中枢部の一端が明らかとなつた（草原2004）。南古市場遺跡では、河道と掘立柱建物が検出され、河道からは杯・皿などの土師器食膳具が多量に出土し、なかには越州窯産青磁の輪花皿も含まれており、賞田庵寺所用の軒平瓦も出土した。備前国府に関連する遺跡と考えられる（1）。このほか綠釉陶器や灰釉陶器は出土した遺跡もあるが、いずれも一般的な集落から出土しており、断片的な発掘では官衙であるかどうかを決めるることは難しい。

平安時代以降も数多くの遺跡が旭西・旭東平野には形成されている。百間川米田遺跡（物部2002）などは橋梁遺構、鹿田遺跡（山本ほか1988）や新道遺跡（草原2002）では殿下渡領である鹿田庄関連の遺構や遺物が発掘調査されている。

戦国時代になると大・小の山城が築かれており、東岡山遺跡の近辺でも戦国末期の当地における戦の1つである「明禅寺崩れ」といわれる合戦がおこなわれた。これは備前国を掌握しつつあった宇喜多直家と、備中国と美作国の西部を掌握し、備前国の児島までを勢力下に治めた三村氏との直接対決で、永禄十年（1567）におこなわれた。この戦いに勝利した後、宇喜多直家は備前国の戦国大名として確立していくのである。ところで旭東平野北半では「明禅寺崩れ」の戦死者を弔った首塚がかつては数十ヶ所も存在していたといわれている（水藤1937）。現在、ほとんどが開墾により削平されてしまっている。また、付近の中心的城郭は、竜ノ口山塊西端にある竜ノ口山城で、城主は織田元常である。この城は永禄四年（1561）に宇喜多直家の謀略によって落城した。出丸を伴う連郭式山城で土塁や堀切が残っている。

近世は旭川西岸に岡山城を中心とした城下町が形成され、岡山城及び岡山城下に関する発掘調査もおこなわれておらず、多くの成果が上がっている（出宮・乗國1997、乗國1998・2002）。しかしながら、集落に関する調査例は少なく、今回の調査は該期の在地社会を解明するための貴重な資料になるものである。

## 註

- (1) 高島公民館建設に伴って岡山市教育委員会による発掘調査がおこなわれた。

## 引用文献

- 伊藤 晃「富原北庵寺・富原遺跡」『岡山県史』考古資料 1986  
 伊藤 晃ほか「田益田中（簾ヶ瀬川調節池）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140 1999  
 宇垣匡雅「吉備の前期古墳II－宍戸山王山古墳の測量調査－」『古代吉備』第10集 1988  
 宇垣匡雅ほか「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 1999  
 江見正己ほか「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995  
 扇崎 由「岡山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 1989  
 扇崎 由ほか「上伊福・南方（済生会）遺跡 南方蓮田調査区I」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1994（平成6）年度 1996  
 扇崎 由ほか「上伊福・南方（済生会）遺跡 南方蓮田調査区II」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1995（平成7）年度 1997

- 扇崎 由ほか「上伊福・南方（済生会）遺跡 上伊福立花Ⅲ調査区」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1996（平成8）年度 1998
- 扇崎 由『南方（済生会）遺跡』岡山市教育委員会 2005
- 太田好治『宮竹野際遺跡』2 浜松市文化協会 1994
- 岡田 博「官衙」「吉備の考古学的研究」（下）山陽新聞社 1992
- 岡山理科大学学友会考古学部「沢田大塚古墳」「サヌカイト」第2号 1970
- 小野山節「古墳と王朝の歩み」「古代史発掘⑥ 古墳と国家の成り立ち」講談社 1975
- 鎌木義昌ほか「金藏山古墳」「倉敷市考古館研究報告」第一冊 1959
- 鎌木義昌「第1編 原始時代」「岡山市史」古代編 岡山市役所 1962
- 鎌木義昌「神宮寺山古墳」「岡山市史」古代編 岡山市役所 1962
- 鎌木義昌「旗振台古墳」「岡山市史」古代編 岡山市役所 1962
- 神谷正義「津島江道遺跡」「日本における稻作農耕の起源と展開」日本考古学協会 1988
- 河田健司「備前国府推定地（南国長）遺跡」「岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要」1996（平成8）年度 1998
- 川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 1978
- 草原孝典「津島江道遺跡」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1996（平成8）年度 1998
- 草原孝典「唐人塚古墳石室の測量調査」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1999（平成11）年度 2001
- 草原孝典「新道遺跡」岡山市教育委員会 2002
- 草原孝典「ハガ遺跡」岡山市教育委員会 2004
- 草原孝典ほか「赤東遺跡」岡山市教育委員会 2005
- 桑田俊明「中井・三反田遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」92 1994
- 河本 清ほか「岡山城二の丸跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」78 1991
- 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」「岡山県史」考古資料 1986
- 近藤義郎「都月坂一号墳」「岡山県史」考古資料 1986
- 近藤義郎「備前車塚古墳」「岡山県史」考古資料 1986
- 近藤義郎「湊茶臼山古墳」「岡山県史」考古資料 1986
- 近藤義郎「一本松古墳」「岡山県史」考古資料 1986
- 近藤義郎ほか「岡山市七つ块古墳群」岡山市七つ块古墳群調査団 1987
- 近藤義郎「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」「古代吉備」第10集 1988
- 下澤公明「弥生時代後期末の吉備南部の社会について」「古文化談叢」第45集 2000
- 高橋 譲ほか「堆町遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」 1969
- 高橋伸二ほか「史跡賞田廢寺跡」岡山市教育委員会 2005
- 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱」「日本史研究」343 1991
- 富岡直人ほか「岡山市津島東3丁目朝寝鼻貝塚発掘調査概報」「加計学園埋蔵文化財発掘調査報告書」2 1998
- 高畠知功ほか「百間川兼基遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」56 1982
- 出宮徳尚ほか「賞田廢寺発掘調査報告」賞田廢寺発掘調査団 1971
- 出宮徳尚ほか「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会 1971
- 出宮徳尚ほか「岡山市四御神上の山一号墳発掘調査報告」岡山市教育委員会 1974

- 出宮徳尚ほか『幡多廬寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団 1975
- 出宮徳尚・乗岡 実『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997
- 出宮徳尚ほか『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1981
- 内藤善史『絵図・南方遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110 1996
- 乗岡 実『岡山市域における最近の発掘調査成果』『古代吉備』第12集 1990
- 乗岡 実『岡山市域における最近の発掘調査』『古代吉備』第13集 1991
- 乗岡 実『岡山城内掘』岡山市教育委員会 1998年
- 乗岡 実『岡山城三之曲輪跡－表町1丁目地区内車開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会 2002
- 平井 勝ほか『百間川沢田遺跡』3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 1993
- 藤江 望ほか『清水谷遺跡（一本木地区）』『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』1 2001
- 正岡陸夫『岡山市乙多見における改修工事に伴う発掘調査』『岡山県埋蔵文化財報告』3 1989
- 正岡陸夫ほか『津島遺跡』2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 2000
- 松本和男ほか『岡山城二の丸跡』中国電力内山変電所建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会 1998
- 水藤千代造『高島村史』吉備高島聖蹟顕彰會 1937
- 物部茂樹ほか『百間川米田遺跡』4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164 2002
- 柳瀬昭彦ほか『南方遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40 1981
- 柳瀬昭彦ほか『田益田中（国立岡山病院）遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 1999
- 家根祥多「弥生時代のはじまり」『季刊考古学』第19号 1987
- 山本悦世ほか『鹿田遺跡』『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988
- 山本悦世ほか『津島岡大遺跡』3『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第5冊 1992
- 吉田 晶「吉備と律令体制の確立」『岡山県史』古代Ⅱ 1990

## 第Ⅱ章 調査の経過

東岡山遺跡は、旭川東岸平野の中央に位置し、北には備前国府推定地、西側には白鳳期創建の幡多磨寺などがあり、南の操山山塊には大小の古墳が無数にある。まさに吉備中枢地にある遺跡といえる。また、近世山陽道にも近く、近世における交通の要衝にも位置した集落といえる。

岡山市下・長岡に東岡山駅前から旧国道2号線(現)までを南北に結ぶ市道が設定された。敷地の南側は東岡山遺跡に含まれているため、文化財課職員の立会に基づいて試掘調査をおこなった。その結果、いずれの試掘坑からも中世に属すると推測される包含層や基盤層及び遺構が認められた。そのため、文化財課は当該地が埋蔵文化財包蔵地であり、文化財保護法の適用を受け、記録保存による事前の行政的措置の必要な旨の試掘調査に関する結果を直接担当課である岡山市都市整備局土木部道路建設課に通知し、その実施に対する両者の連絡・協議を要請した。文化財課と、道路建設課で協議を重ねた結果、平成16年度中に記録保存をおこなうことで合意に達した。発掘調査は平成16年9月21日に行着手し、平成17年1月31日に終了した。着手後岡山市教育委員会教育長から、岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第58条2第1項に基づく、「埋蔵文化財調査の報告」が提出された。調査面積は1500m<sup>2</sup>である。

その後、平成17年1月22日(土)には発掘調査現地説明会をおこなった。

### 発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 玉光源爾

発掘調査対策委員  
稲田孝司(岡山大学教授)  
亀田修一(岡山理科大学教授)  
西川 宏(前岡山理科大学講師)  
間壁忠彦(倉敷考古館館長)  
水内昌康(日本考古学协会会员・前岡山市文化財保護審議会会长)

発掘調査担当者 出宮徳尚(岡山市教育委員会文化財課長)  
根木 修(岡山市教育委員会埋蔵文化財センター所長)  
神谷正義(岡山市教育委員会文化財課副専門監)  
扇崎 由(岡山市教育委員会文化財課主任)  
(調査員) 草原孝典(岡山市教育委員会文化財課主任)  
(経理員) 福永みどり(岡山市教育委員会文化財課主任)

発掘調査現場作業員 井上辰巳 片山久美子 小林純一郎 佐々木龍彦 田中常子 中山政太郎  
中嶋哲三 那須鉄雄 畑谷豊志 松本友彦 吉村順次

発掘調査現場事務員 前田裕子

出土物整理事務員 矢部桃子 和田かほり

調査にあたり、対策委員会の先生方には多大なるご指導・ご助言を頂いた。

#### 経過と概要

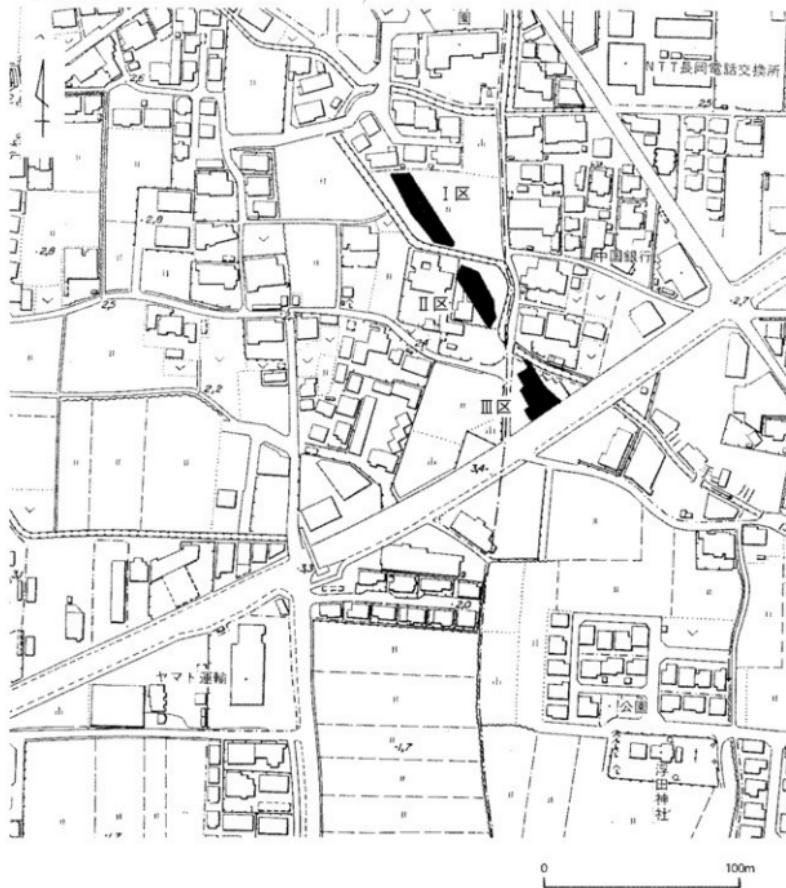


図3 調査区域図 (1/2,500)

調査は、現代水田の耕土及び、造成土層や砂利敷きについては、重機によって除去し、以下は手掘りによっておこなった。調査範囲中には用水路と道路があるため、それらの影響から調査区を北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と設定した。調査はⅠ区からおこない、次にⅡ区、最後にⅢ区をおこなった。

まずⅠ区は、13世紀前半、15・16世紀、17世紀前半の3面の遺構面が存在した。しかし、この地点に明確な集落を形成したのは15・16世紀だけである。基盤層は脆弱な砂質土層であり、13世紀前半の直前か、もしくは極めて近い時期に洪水によって形成された新しい微高地であり、古い時期に形成されたⅡ区やⅢ区の微高地とは異なっている。15・16世紀の集落の形成と同時に幅が4m前後の溝6が掘削されている。溝6は現在も調査区付近に流れているこの辺りの幹線水路である山手川用水と同一と考えられる。17世紀前半になると、溝6は流路を若干北へ変更しており、その際に集落も移動している。

Ⅱ区は、弥生時代前期、古墳時代、15・16世紀、17世紀前半、18世紀の5面の遺構面が存在した。弥生時代前期は土壌と溝が検出され、地形的にも西から伸びる微高地の東側に相当する。ただ土壌の中には貯蔵穴があり、しかも前期前半まで遡る。古墳時代の遺構は時期的には二時期に分けられる。前期と後期である。前期は堅穴住居が2軒あり、集落地の一角であることがうかがえる。後期は主に溝で、比較的の遺物が出土しており、微高地縁辺の斜面堆積状の部分に相当すると考えられる。15・16世紀はⅠ区の溝6の続きと考えられる溝が調査区の南端で検出され、それに派生する溝も検出された。柱穴等は派生する溝の西側で検出されており、集落の本体は調査区外の西側に広がっているものと考えられる。17世紀前半は、極めて多くの柱穴が集中的に検出され、墓域も伴っている。Ⅰ区と同様に、溝はこの期に付け替えられており、微視的にはこの溝の付け替えはⅡ区の集落域の拡大がその要因の一つであったことをうかがわせる。18世紀については、柱穴等は検出されなかったが、ゴミ穴が調査区の西側から検出された。この地点が集落として使用されていることが裏付けられる。

Ⅲ区は近代の用水路の付け替えなどの削平によって、遺構面の残存状況は極めてよくなかったが、断片的な所見からⅡ区に近い様相といえる。ただし、北側に向かって微高地が低くなってしまい、巨視的には同一微高地の中に含まれるのかもしれないが、Ⅱ区とⅢ区の集落は別のものである可能性が高い。さらに17世紀前半には遺構の形成が認められず、これはⅠ区と共通する。

#### 発掘日誌（抄）

平成16年 9月21日	発掘調査開始
9月29日	台風襲来、Ⅰ区水没
10月20日	台風襲来、現場への直接的な被害なし
11月15日	Ⅰ区終了、Ⅱ区へ作業を移動
11月29日	Ⅱ区終了、Ⅲ区へ作業を移動
12月 9日	発掘調査対策委員会開催
平成17年 1月21日	発掘調査対策委員会開催
1月22日	現地説明会開催
1月31日	発掘調査終了

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

各調査区ごとに出土した遺物や遺構の概要を説明する。

### I I 区

I区は最も北側に位置する調査区である。現在水田の高度化には近世水田層(②層)が調査区全体に広がっている。近世水田層以下からは、水田層は認められない。各遺構面の基盤層は③層だが20cm弱ほどの厚さであり、その下層は河道内堆積と考えられる砂質の強い土層が互層に堆積している。3層上面で検出された遺構で最も古いのは中世前半の土壤であり、遺物についてもそれ以前の遺物は極めて少ない。おそらく中世前半直前か、もしくは前後に形成された比較的新しい微高地と考えられる。I区の南側にあるII区は、かなり古くからの強固な微高地基盤層が認められることから、II区はその微高地の縁辺が河道堆積によって拡幅したことであるのかもしれない。

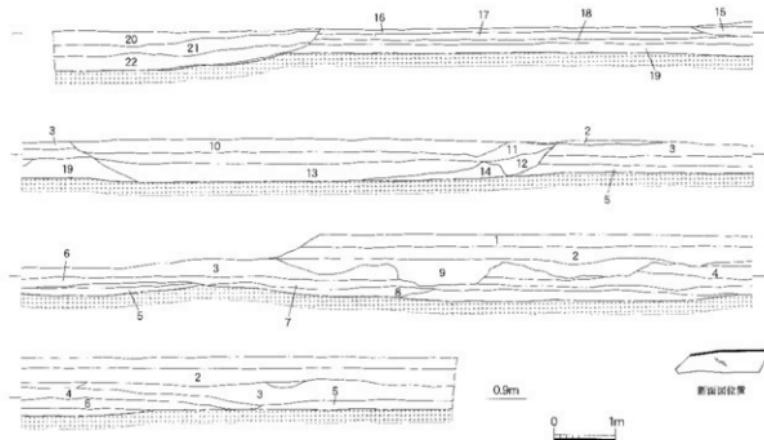
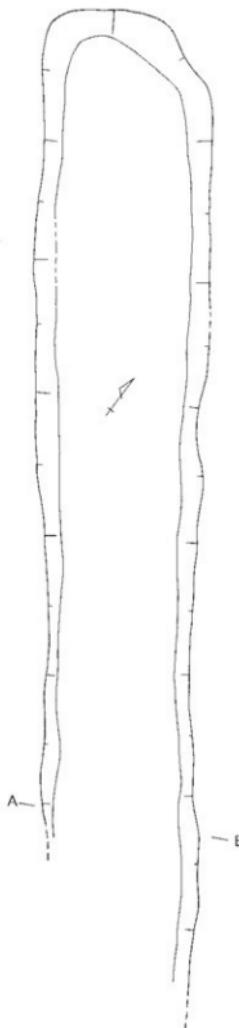


図4 I区西壁断面(1/80)

## (1) 中世前半(13世紀後半) (図5)



## P50 (図6・7)

調査区中央付近で検出された長方形の平面形を呈する土壙である。遺構検出面は1.0m付近で断面形は逆台形を呈し、底部は平坦である。最深部の深さは、検出面から0.3mである。南端は溝6によって削平されているが、幅2.0m、長さ11.0m以上の規模で、途切れていますが溝状の遺構である可能性が高い。埋土は3層あり、最下層の③層は滲水をうかがわせる粘質土層で、埋土の大半を占める②層は粗砂層であり、人為的に埋められた可能性が示唆される。

出土遺物は土器の小片がかなり含まれていたが、図化できたものは土師質土器碗(1・2)と同皿(3)だけであった。それから13世紀後半の時期が考えられる。

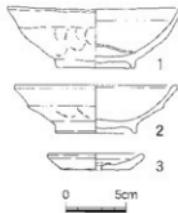


図7 P50 出土遺物 (1/4)

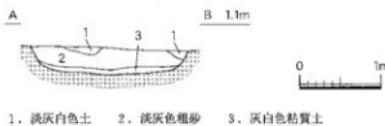


図6 P50 (1/60)

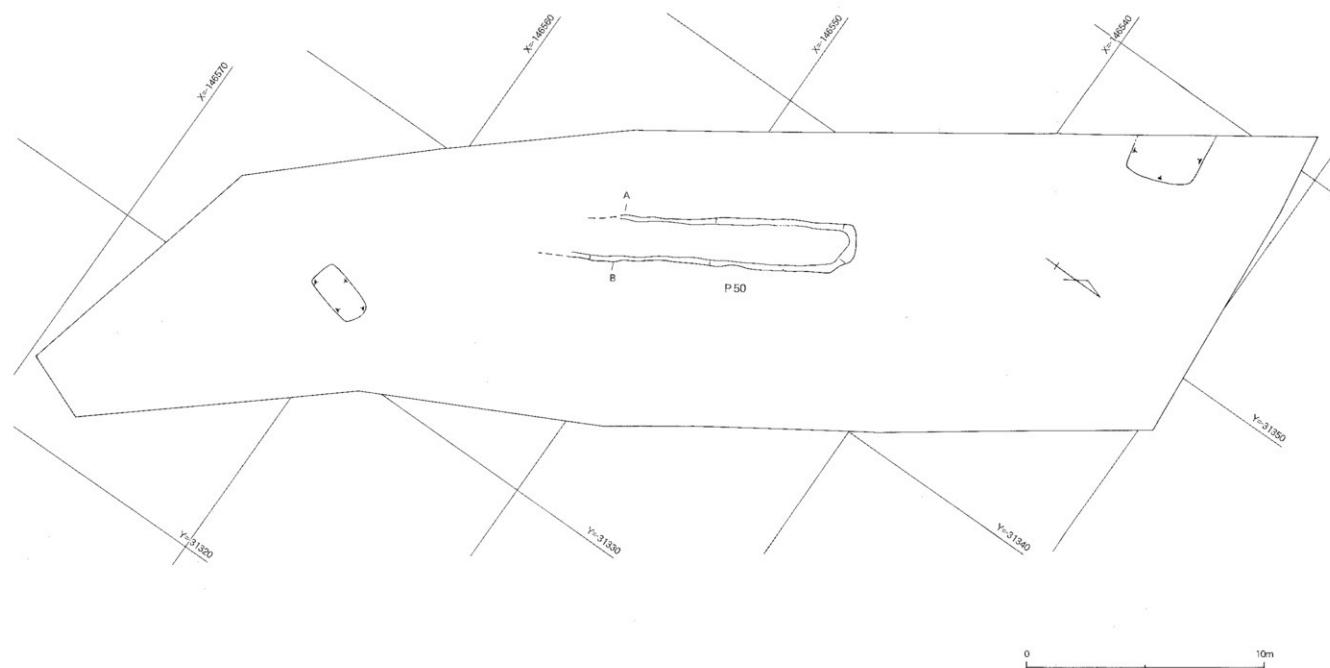


図5 I区 中世前半（13世紀後半）遺構配置図（1/160）

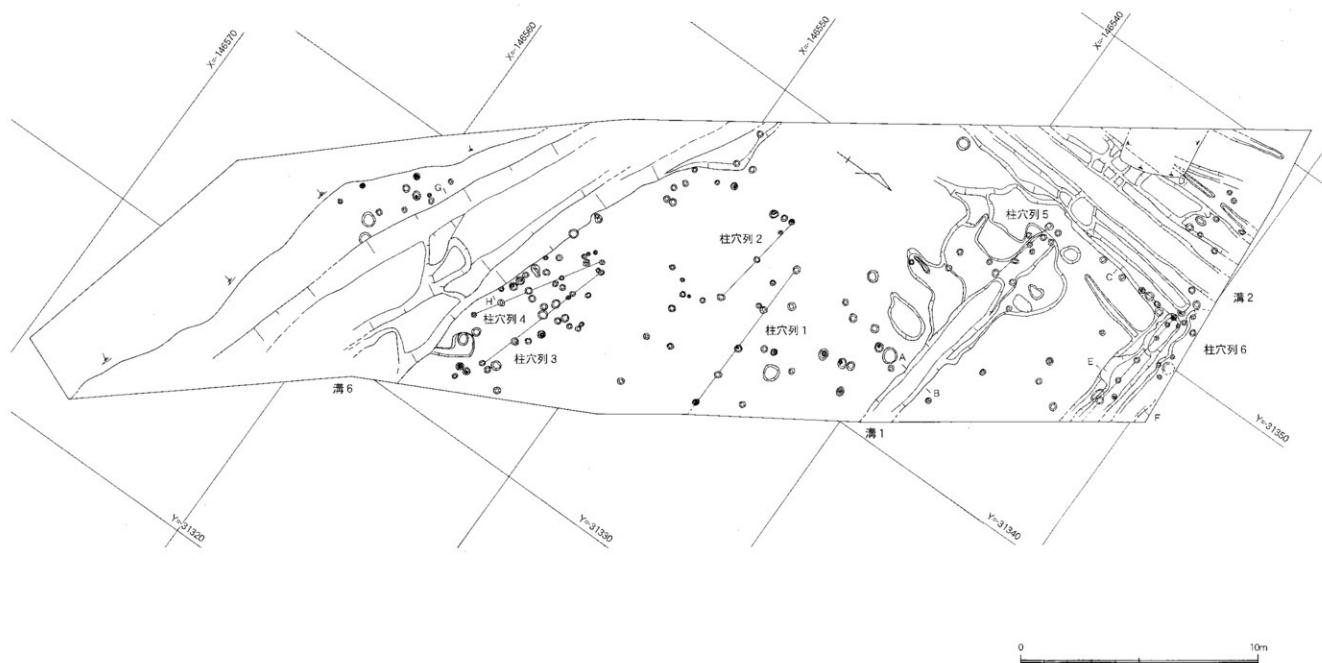


図8 I区 中世後半（14世紀後半～16世紀）造構配置図（1/160）

## (2) 中世後半(14世紀後半~16世紀) (図8)

## 柱穴列1 (図9)

調査区の中央付近で検出した柱穴列で、ほぼ東西方向に並ぶ。遺構検出面は1.0m付近で、柱間距離は1.4~2.0mである。柱痕跡のある柱穴から、柱の大きさは径5~7cmと推測される。

出土遺物は極めて小片の土師器と備前焼が出土したのみであった。

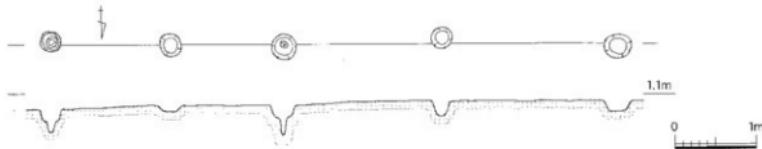


図9 柱穴列1 (1/60)

## 柱穴列2 (図10)

調査区の中央付近で検出した柱穴列で、ほぼ東西方向に並ぶ。遺構検出面は1.0m付近で、柱間距離は2.0~3.0mである。柱穴の掘り方は円形で、径0.2~0.3m、最も深い柱穴の底レベルは0.65mである。

出土遺物は極めて小片の土師器と備前焼が出土したのみであった。

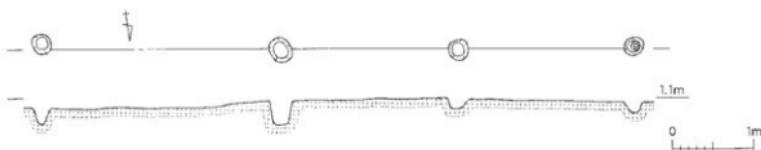


図10 柱穴列2 (1/60)

## 柱穴列3 (図11)

調査区中央やや南よりで検出された柱穴列で、W-13°-Nの方向に並ぶ。遺構検出面は1.0m付近で、柱間距離は1.5m前後である。柱穴の掘り方は円形で、径0.2~0.3m、最も深い柱穴の底レベルは0.8mである。

出土遺物は極めて小片の土師器が出土したのみであった。

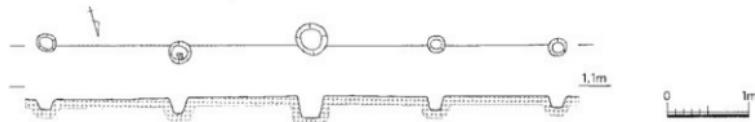


図11 柱穴列3 (1/60)

**柱穴列 4 (図12)**

調査区中央やや南よりで検出された柱穴列で、W-28°-Nの方向に並ぶ。遺構検出面は1.0m付近で、柱間距離は1.5m前後である。柱穴の掘り方は円形で、径0.2~0.3m、最も深い柱穴の底レベルは0.8mである。

出土遺物は極めて小片の土師器と備前焼が出土したのみであった。

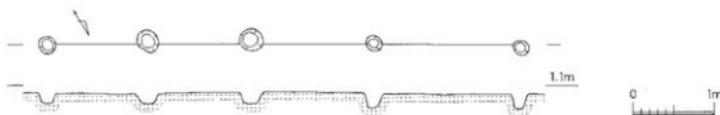


図12 柱穴列 4 (1/60)

**柱穴列 5 (図13)**

調査区北側で検出された柱穴列で、W-10°-Nの方向に並ぶ。遺構検出面は1.1m付近で、柱間距離は0.9~1.2m前後である。柱穴の掘り方は円形で、径0.2~0.3m、最も深い柱穴の底レベルは0.9mである。

出土遺物は極めて小片の土師器が出土したのみであった。

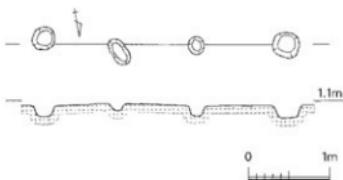


図13 柱穴列 5 (1/60)

**柱穴列 6 (図14)**

調査区の北端で検出された柱穴列で、溝2とは重なる。溝2がI区で検出された集落の南限になると推測されることから、この柱穴列も集落の南限を画する性格のものであったと推測される。溝2との関係は、少なくとも溝2が埋没した後に柱穴を掘り下げるということはなく、柱穴列6を

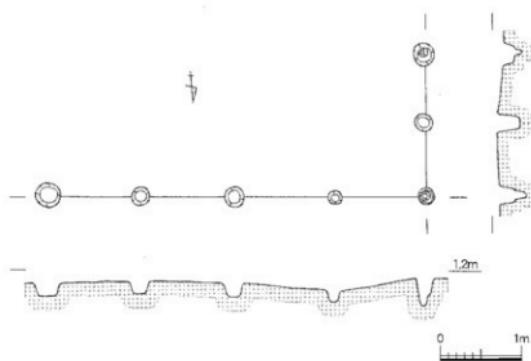


図14 柱穴列 6 (1/60)

掘り下げた後に溝2を掘り下げたか、もしくは同時存在であったと考えられる。ただし、溝2の底部と柱穴の底部の比高差は10cm前後であることから、前者の可能性の方が高いように思われる。遺構検出面は1.1m付近で、柱間距離は0.9~1.1m前後である。柱穴の掘り方は円形で、径0.2m前後、最も深い柱穴の底レベルは0.8mである。出土遺物は極めて小片の土師器が出土したのみであった。

## 溝 1 (図 8・15・16)

調査区の北側で検出された溝で、ほぼ東西方向である。遺構検出面は1.1m付近で、断面形は台形を呈する。最深部は検出面から0.3mで、幅は1.0m前後である。西側は柱穴列5の手前で途切れることが、方向性が一致することから溝1と柱穴列5は一体のものと考えてよい。溝1の途切れる部分は、集落の北側からの入り口であった可能性などが推測される。溝の西端周囲には凹凸が検出されたが、それらは明確な遺構にならないことから、溝6の溢水などが流入した痕跡と考えられる。

出土遺物は土器の小片ばかりで、図化できたのは備前焼壺(4)、備前焼擂鉢(6)、白磁碗(5)のみである。

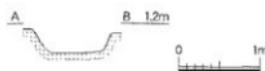


図15 溝1 (1/60)

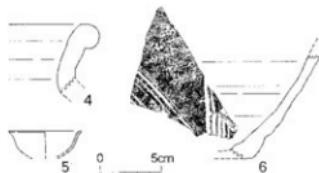


図16 溝1 出土遺物 (1/4)

## 溝 2 (図 8・17~19)

調査区北端で検出された溝で、結果的には溝群の様相を呈する。検出時には幅4m前後の溝が、L字形に調査区の北西コーナー付近を中心として存在しているとの認識で、調査区西側の壁面を検討しながら面的に掘り下げた。底面の断面形は複数の溝が並列しているような凹凸があるものの、埋土的には異ならず、切り合ひ関係も認められないことや、個々の凹凸が部分的に連結していることが平面的に確認されたことから1つの遺構としてとらえられると考えた。幅1m前後の溝が2ないし3本平行して存在しているものと考えられる。遺構検出面は1.2m前後で、断面形は台形で、最深部のレベル高は0.85mである。ただし北側については断面形も傾斜の緩やかな皿状を呈し、最深部のレベル高も1.1mと浅い。途中で途切れる溝1と平行ないし直交する関係になると、北側の部分は東側の溝と接する部分で完結していることから、水路などよりも溝6との間に柱穴から想定される集落、もしくは屋敷地を区画する用途が想定される。

出土遺物は、備前焼擂鉢(7~10)、瓦質鉢(11)、土師質土器皿(12)、土師質土器鍋(13)、鐵釘(M1)、石鑿(S1)である。いずれも破片であり、全体の出土量もそれほど多くなかった。

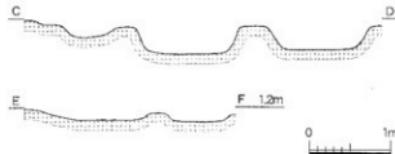
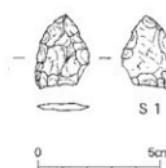
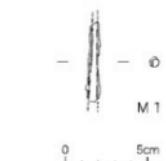


図17 溝2 (1/60)

図19 溝2 出土遺物 2  
(1/3・1/2)

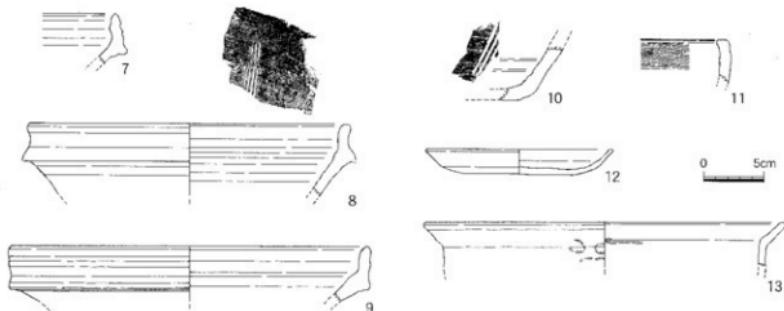


図18 溝2 出土遺物1 (1/4)

## 溝6 (図8・20~25)

調査区南側で検出された溝で、北西部から南東部にかけての斜方向に調査区を横切るような平面形を呈する。遺構検出面は1.0m付近で、断面形はかなり壁面の傾斜角度の急な台形である。底面の形状は平坦ではなく、かなり凹凸が認められる。これは自然地形によって形成されたのではなく、明らかに人工的な掘削によるものであり、当初は溝2と組合わさって堀になる可能性も考えたほどであった。しかしながら、溝6の延長部分がⅡ区やⅢ区で検出されたことと、その方向性が調査区に接して流れている現況の用水路と一致していることから、現況の水路の旧流路といえる。埋土は6層確認されたが、①層と②層の間にはかなり硬質な鉄分層が形成されており、土質的にも両層の間にはかなり隔たりがある。①層にはほとんど遺物は含まれていないが、溝6が埋没した、あるいは埋められた後も若干の窪地として存在していた期間に堆積したものと推測される。遺物がほとんど含まれないのは、その時点では周囲が集落としてあまり利用されていなかったことに起因するといえる。②~⑥層には遺物が比較的多く含まれていたが、⑥層にやや大きな破片が偏る傾向がみられた。

出土遺物の多くは備前焼で、壺(14~17・19)、甕(18・21)、大平鉢(20)、擂鉢(22~47)である。ほかに土師質土器鉗(48・49)、土師質土器皿(57)、青磁(51・53)、白磁(52・54・55)、中国製染付(56)、弥生時代前期の壺形土器(50)、砥石(S2)、鉄製鋤先(M2)、鉄製鎌(M3)、下駄(W1)、建築部材(W2)などがある。

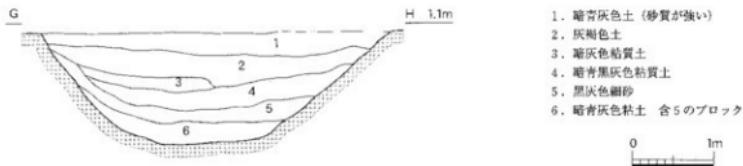


図20 溝6 (1/60)

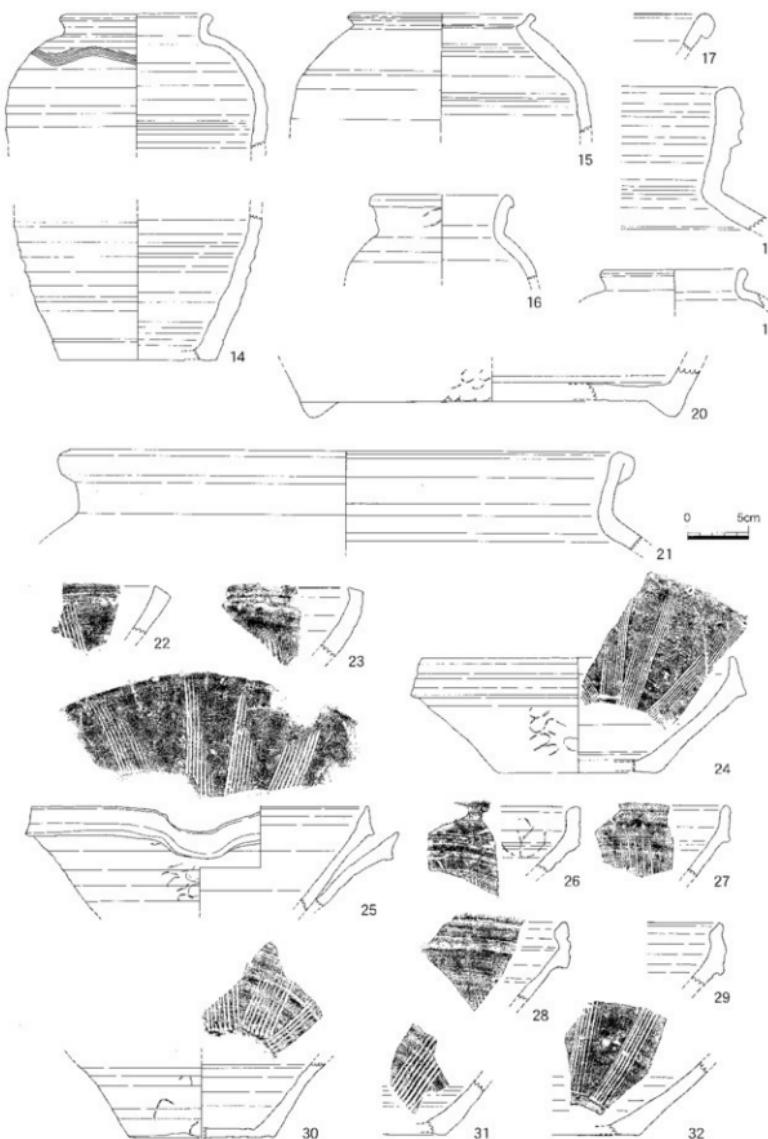


図21 溝6 出土遺物1 (1/4)

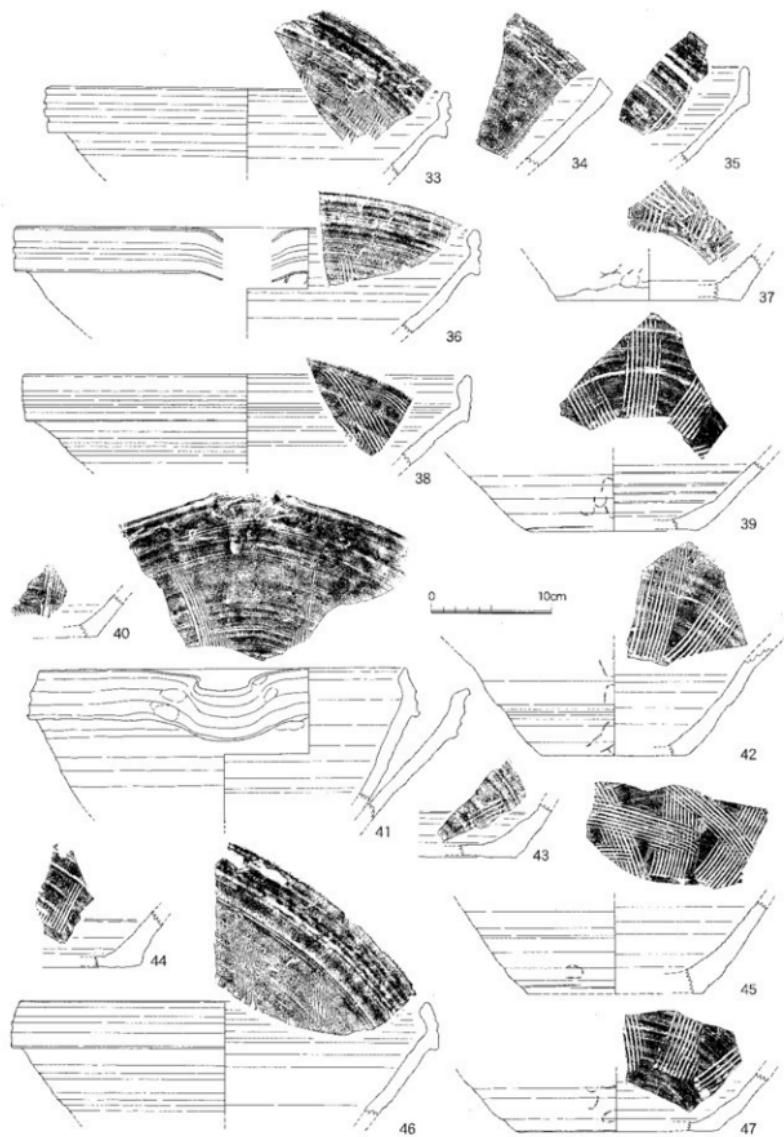


図22 溝6 出土遺物2 (1/4)

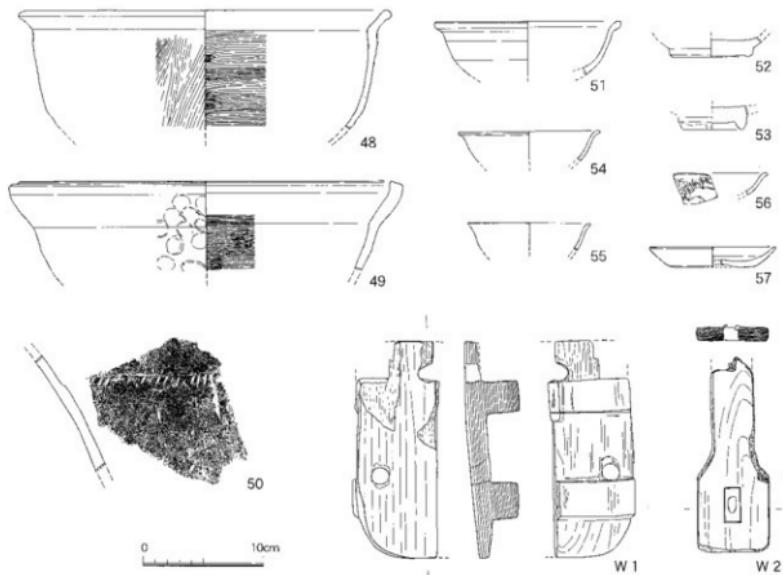


図23 满6 出土遺物3 (1/4)

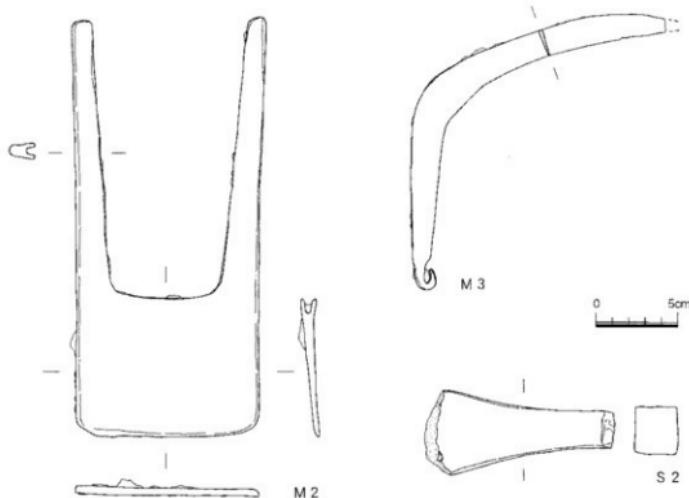


図24 满6 出土遺物4 (1/3)

## (3) 近世（17世紀前半）（図25）

溝3（図26・27）

調査区の南端で検出された溝で、大半は調査区外の南側になるものといえる。同位置には現況でも用水路が流れしており、これは溝6が若干位置を変更したものであると考えられる。ここで検出された溝3は、その用水路の若干の振幅によって生じたものである。含まれる遺物の時期が17世紀前半までに限定されることから、溝6の位置が若干変更された後それほど時期差のない段階で埋没した部分といえる。つまり現況の用水路の振幅に属する部分といえる。遺構検出面は1.0m付近で、北岸のみの検出である。検出した溝の中央やや西側で、長さが20cmほどの角礫を積み上げた壠状の遺構が検出された。それは北岸の岸部から約2mほどの地点に若干円弧状に角礫を置き、その部分と岸部の間に角礫と盛り土で舌状の突堤を築き、約1mの間隔をあけて幅1.7mの堤状の土手を角礫で築いている。

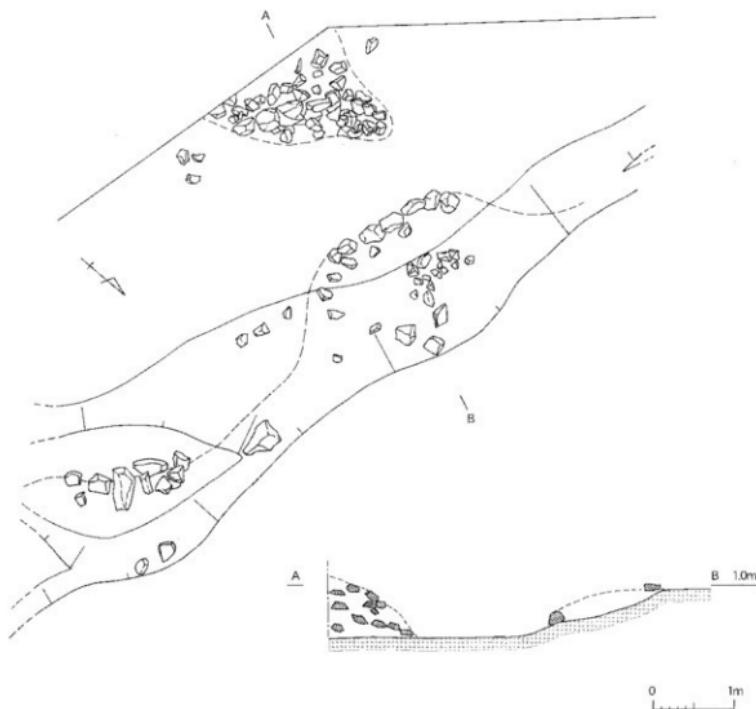


図26 溝3（1/60）

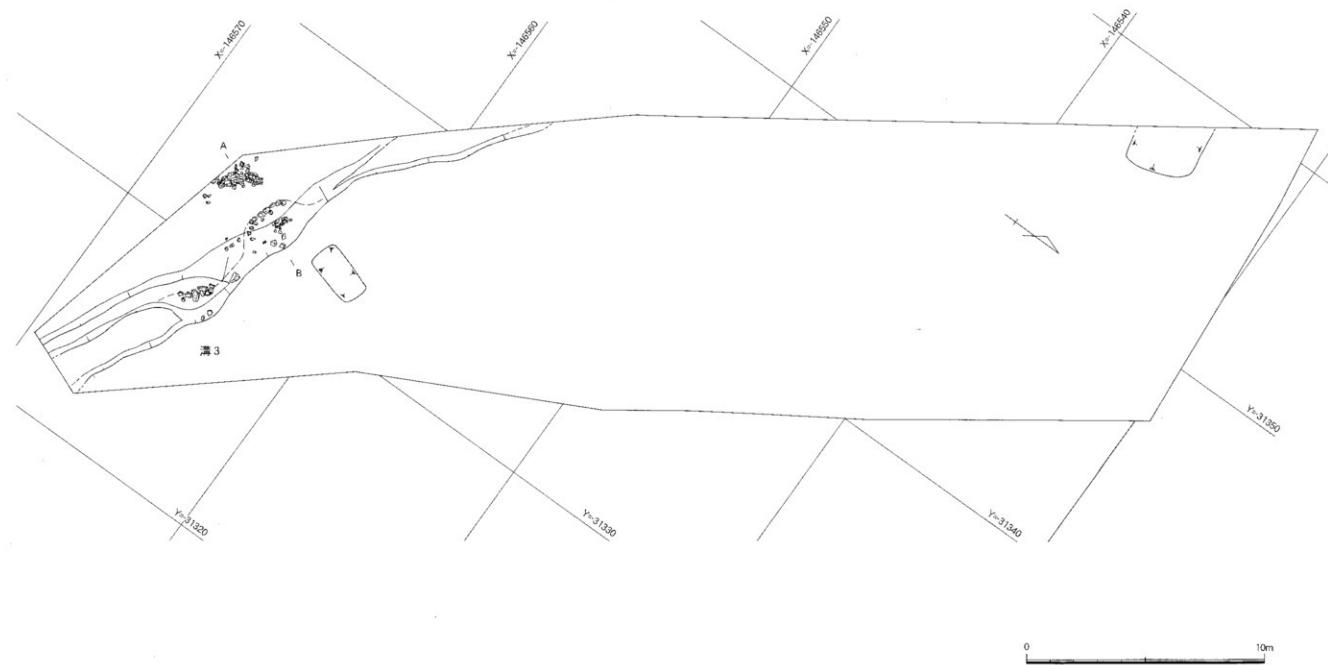


図25 I区 近世（17世紀前半）遺構配置図（1/160）

構造である。突堤と土手の間を塞ぐことによって北側に水を溜めるか、もしくは別の水路に水を流すと考えられる。ただし、現況の用水路はこの南側で大きく西側へ方向を曲げていることから、ここで検出された遺構もそのための措置である可能性もある。それは流路の曲がる部分の外側は、常に流水の浸食を受けることから、岸部の崩落を防ぐために突堤を設けていたということである。北岸部の南側にはかなり乱雑ではあるが、長さが50cmほど大きな角礫を並べて護岸状にしており、北側の突堤とセットになる措置ともいえる。いずれの施設であったのかは、現況の調査部分が狭かったため明らかにすることはできないが、両方の機能を備えていたということは十分考えられよう。

出土した遺物はそれほど多くなく、唐津焼(58~61)、青磁(62)、備前焼皿(63)、備前焼擂鉢(65・66)、土師質土器皿(64)である。いずれも突堤の周囲から出土した。

#### 近世水田層（図28）

溝3の上面には近世の水田層（図4-②層）があり、II区全体に分布している。溝3が埋没した後は、現代の景観と同様に水田として利用されたといえる。

遺物はほとんど含まれていなかったが、調査区の南側から備前焼擂鉢(67~69)がまとめて出土した。精査したが、土壤などの遺構に含まれるといったことはなかった。

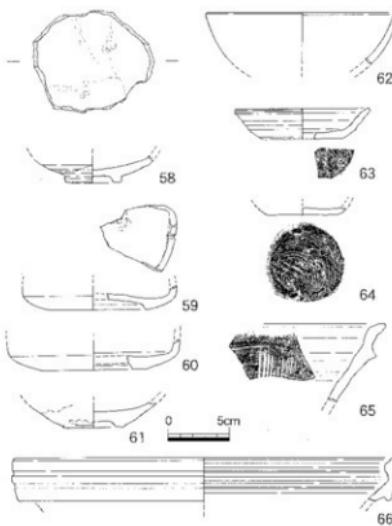


図27 溝3 出土遺物 (1/4)

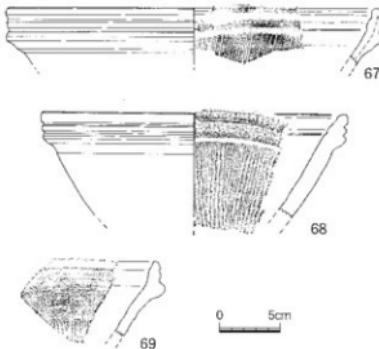


図28 I区 近世水田層 出土遺物 (1/4)

## II II 区

II区は現況の用水路（山手川用水）を挟んでI区の南側に位置する。今回の調査以前は宅地であり、江戸時代以来の旧集落の一部でもあったことから、かなり造成土が厚かった。造成土を重機によって除去したが、I区のように水田層は認められず、近世以前の集落域に関する造成層や包含層が広がっていた。近世の造成層は調査区の南側で顕著であり、これはI区で検出された溝6がII区の南側を横切って（溝7）いるためである。この部分は微高地自体もレベル高が低くなっていることから、溝が埋められた後もかなりの期間傾斜地もしくは低地として存在していたらしい。東壁断面（図29）の③～⑦層までは近世の造成層である。また、近世初頭の遺構面の上面にも18・19世紀の造成層（東壁-①・②層、西壁-①～③層）がある。II区はI区とは異なり、かなり強固な微高地基盤層（東壁-⑫層、西壁-⑨層）が存在する。弥生時代前期の遺構も検出されていることから、古くから形成されていた微高地といえる。ただし、古墳時代から弥生時代の遺構には微高地の地形に即したと思われる溝がいくつも検出されていることから、調査地点は微高地の端部に相当するといえる。

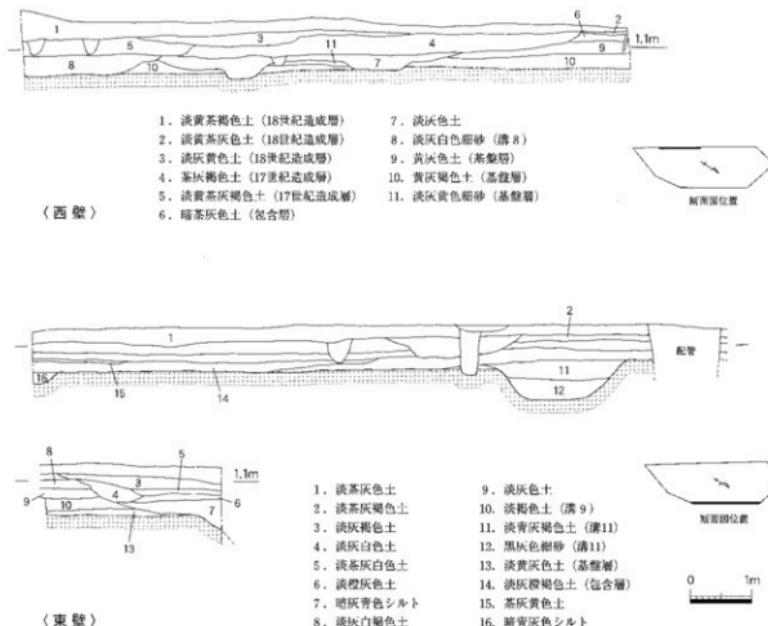


図29 II区 西壁・東壁 断面 (1/80)

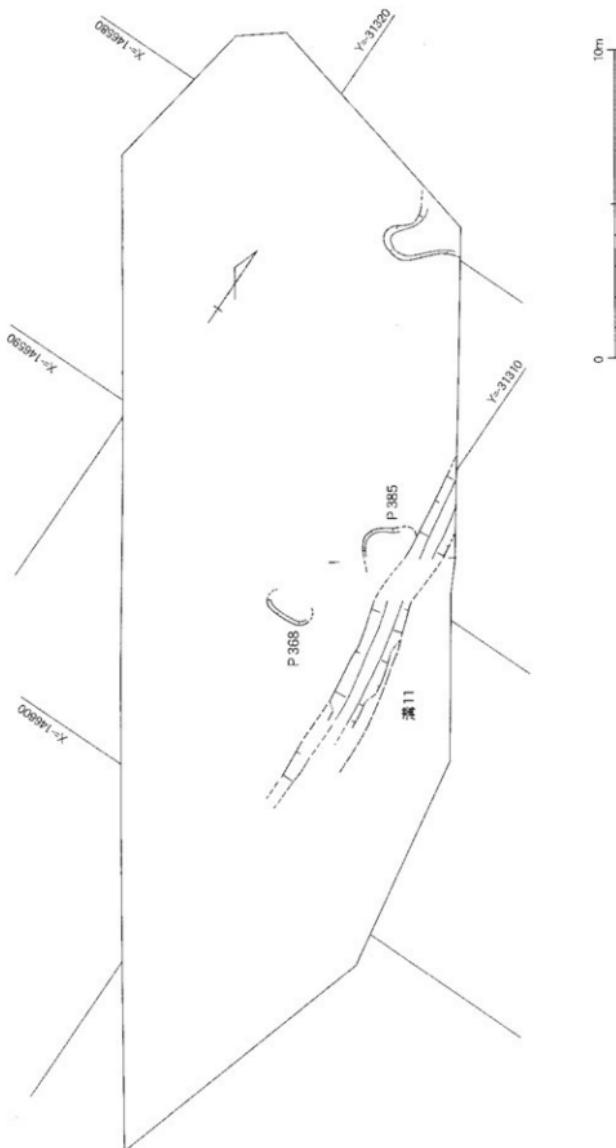


図30 II区 弥生時代前期 遺構配置図 (1/160)

## (1) 弥生時代前期 (図30)

## P 385 (図31・32)

調査区の中央やや東側付近で検出された土壌で、断面形が箱形、もしくは袋状である部分も認められることから、いわゆる貯蔵穴と考えられる。遺構検出面は0.9m付近で、最深部は検出面から0.4mである。埋土は7層で、全体としてブロック状の堆積状況であることや、③層のように炭が比較的多く含まれている土層も認められることから、人為的に埋められた可能性が高い。遺構の東側は溝11によって削平されており、南側は現代の配管によって削平されている。したがって遺構の全形は明確でないが、一辺1.5m以上前後の隅丸方形、もしくは椿円形の平面形が推測される。遺物は埋土の最下層である⑦層からまとめて出土した。しかも遺構中央付近から東側にかけて分布する傾向がみられた。完形品はなく、廃棄されたものと推測される。

出土遺物は、壺形土器(70~78)、壺形土器(79~82)、底部(83~86)で、壺形土器には段と削り出し突帯が認められる。

## P 368 (図33・34)

調査区の中央付近で検出された土壤である。遺構検出面は1.2m付近で、最深部は検出面から0.1mである。断面形は傾斜の比較的緩やかな台形を呈し、底面は平坦である。平面形は、長さが1.6m、幅が0.8m前後の長楕円形を呈する。墓壙の可能性も考えたが、人骨等は検出されなかった。遺物は遺構の東端付近にまとめており、いずれも遺構底面から若干高い位置から出土した。

出土した遺物は、壺形土器(87)、底部(88・89)である。

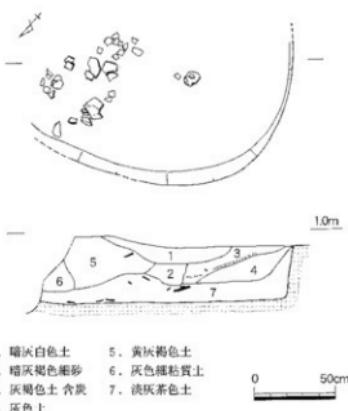


図31 P 385 (1/30)

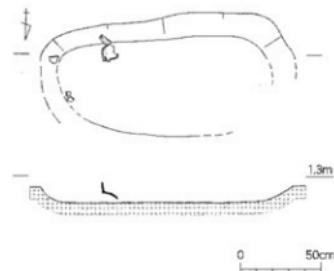


図33 P 368 (1/30)

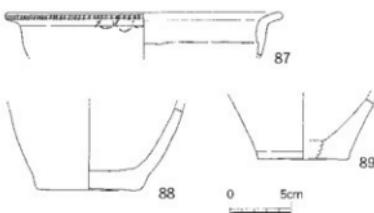


図34 P 368 出土遺物 (1/4)

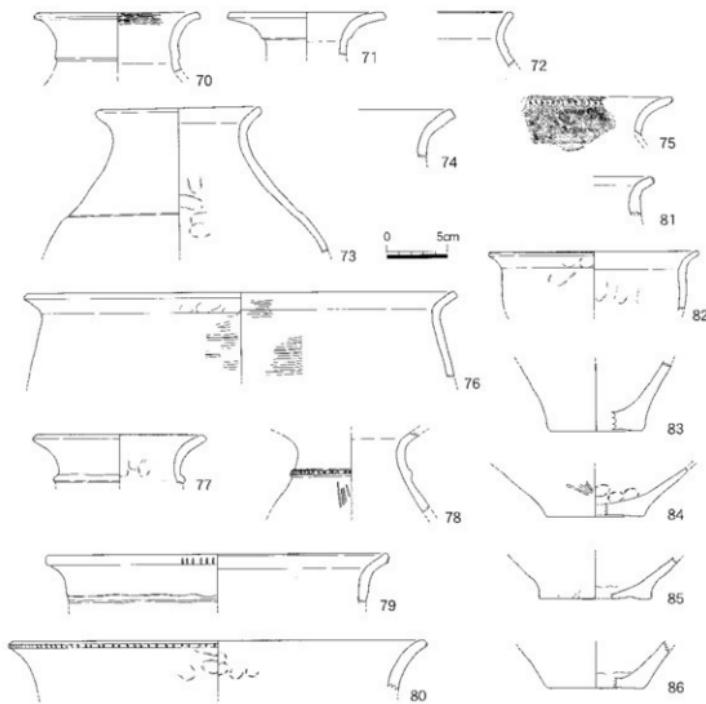


図32 P385 出土遺物 (1/4)

## 溝11 (図35)

調査区の中央東端から南側へ直線的にのびる溝である。幅約1.5mで、各所で後の遺構により削平されていることから確實とはいえないが、ほぼこの幅前後で一定しているものと推測される。遺構検出面は0.9m付近で、断面形は台形である。深さは遺構検出面から0.4mである。遺物は埋土中に若干含まれていたが、最も多いのはP385を削平した部分付近である。おそらくP385の遺物が混入しているものといえる。図化で

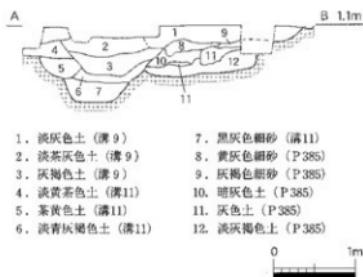


図35 溝9・溝11・P385 (1/60)

きたものはP385との接点部分から出土したものばかりで、いずれもP385から流れ込んだ状態で出土しており、おそらく本来はP385に含まれるものと考えられる。

出土した遺物は、甕形土器（90～92）、壺形土器（94～97）、底部（93）である。

#### （2）古墳時代（図37）

##### 竪穴住居1（図38・39）

調査区の中央西端で検出された。西側半分は調査区外へ出るため全形は不明である。一辺3.2m前後の方形の平面形が推測される。遺構検出面は1.1m付近で、床面までの深さは検出面から5cmほどである。柱穴は3つ検出されているが、北東コーナー付近の柱穴については、床面からの深さが3cmほどと浅いことからこの住居に伴う柱穴ではないと判断された。柱穴は径0.2m前後で、南側の柱穴には径5cmの柱痕跡が認められる。柱穴の深さは床面から0.2m前後である。周囲には壁体溝がめぐっているが、北側は幅が0.4m、南側は幅が0.24mであることから、均一な幅の壁帶溝ではないといえる。

出土遺物は、甕（98～100）、鉢（101）で、いずれも床面から出土した。

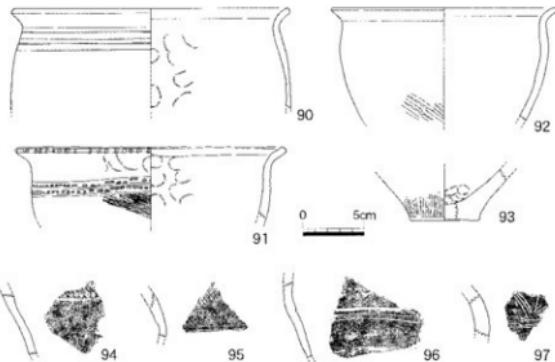


図36 満11出土遺物（1/4）

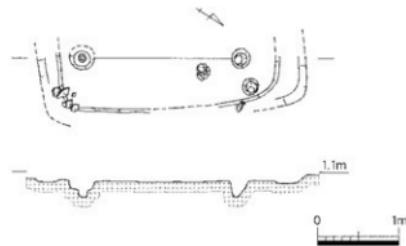


図38 竪穴住居1（1/60）

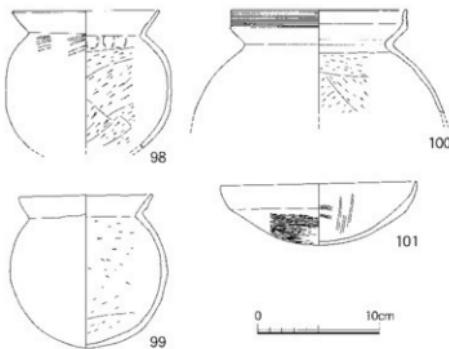


図39 竪穴住居1出土遺物（1/4）

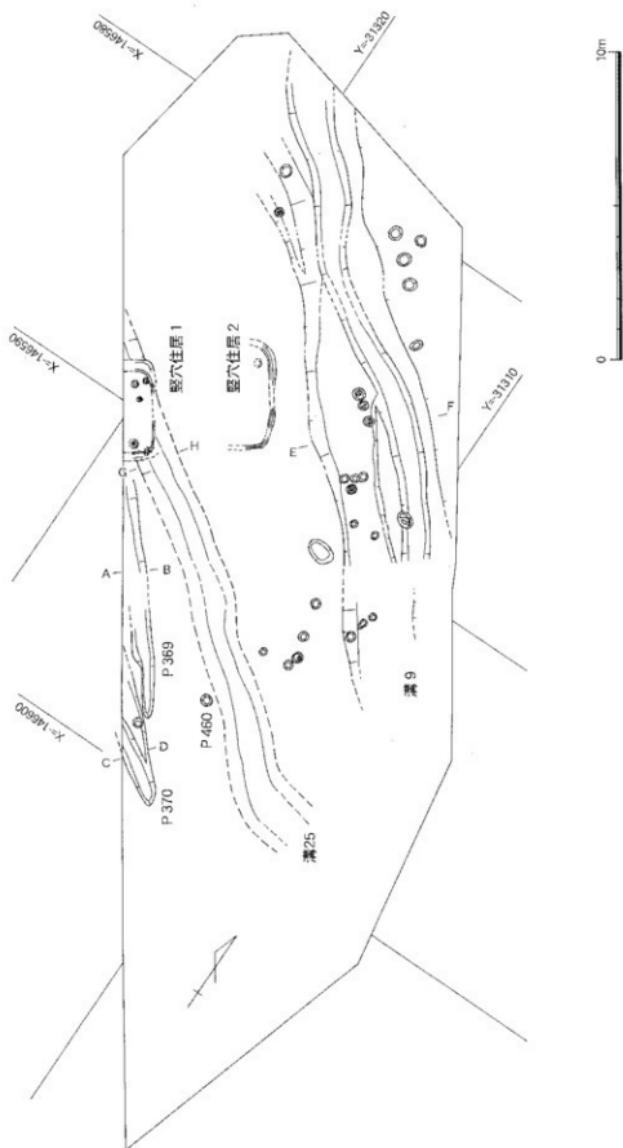


図37 II区古墳時代遺構配置図 (1/160)

## 豊穴住居 2 (図40)

調査区の中央付近で検出された。ほとんどが溝 8 によって削平されていることから、検出できたのは東端部の一部だけである。一辺3.2m前後の方形の平面形が推測される。規模的には、西側にある豊穴住居 1 とはほぼ等しい。遺構検出面は1.2m付近で、壁帶溝と柱穴を1つ検出しただけであった。壁体溝は幅0.1m前後で、深さは検出面から4cmである。柱穴は径が0.24mで、深さは検出面から0.2mである。

出土遺物は土器の極微細な破片が出土しただけである。古墳時代前期に属する壺の胴部の破片と推測される。

## P 460 (図41・42)

調査区の中央南側で検出された柱穴状のピットである。遺構検出面は溝 8 の底面で検出されたということから、かなり低く0.8m前後である。径0.3mの円形の平面形を呈する。深さは検出面から約0.3mである。埋土は4層あり、全体としてブロック的な堆積状況であることから、人為的に埋められたものと考えられる。底面中央には須恵器の杯身が正置されており、埋土の状況からも柱を抜き取った後に須恵器の杯身を置いて埋めたという可能性が高い。

出土した須恵器の杯身(102)は完形である。

## P 369・370 (図43)

調査区の中央西側で検出された。調査区の端部であることから不明な点が多いが、溝である可能性も多い。P369は幅が0.6m前後、長さは8m前後まで検出した。遺構検出面は1.0m付近で、断面形は皿状である。深さは検出面から6cmほどである。P370は幅が0.8m前後で、長さは4m前後まで検出した。遺構検出面は1.0m付近で、断面形はU字状である。深さは検出面から0.2mである。

両遺構とも埋土に含まれている遺物は少なく、土器の小片が僅かに出土しただけであった。それらは、弥生時代後期から古墳時代前期の時期幅の中におさまるものである。

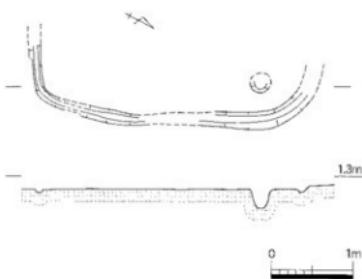
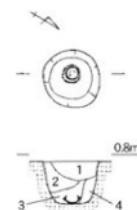


図40 豊穴住居 2 (1/60)



1. 灰褐色土
2. 淡黄灰色土
3. 灰色土
4. 2合1のブロック

0 50cm

図41 P 460 (1/30)

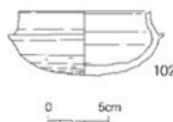


図42 P 460 出土遺物 (1/4)

## 溝9（図37・44～46）

調査区の東端で調査区の南北方向の側面に沿って検出された溝である。緩やかではあるが蛇行しており、全体の方向性も微高地縁辺の地形に規定されたものであると思われる。また、段状になっている部分も認められ、掘り直しや複数の溝が重複していることを示している。遺構検出面は1.2m前後である。西側には幅2m前後の浅い部分があり、その東側には幅0.8m前後の深い部分がある。浅い部分の断面形は皿状で、深い部分は箱形である。浅い部分は検出面から0.2m、深い部分は0.6mである。遺物は上面および上層からほとんど出土した。小片となっているものが多かったが、東南端部からは完形に近い瓶などがまとまって出土した。しかしながら、全体としては西側の微高地高部からの斜面堆積状の出土状況であった。

出土遺物のうち固化できたのは、須恵器杯（103～107）、須恵器壺（108・109）、土師器壺（110）、土師器甌（111）、土師器瓶（112・113）、獸形土製品（C 1）、石錘（S 3）、鉄製品（M 4）、手づくりね（114）である。5世紀末から6世紀中頃の時期幅の中におさまる。

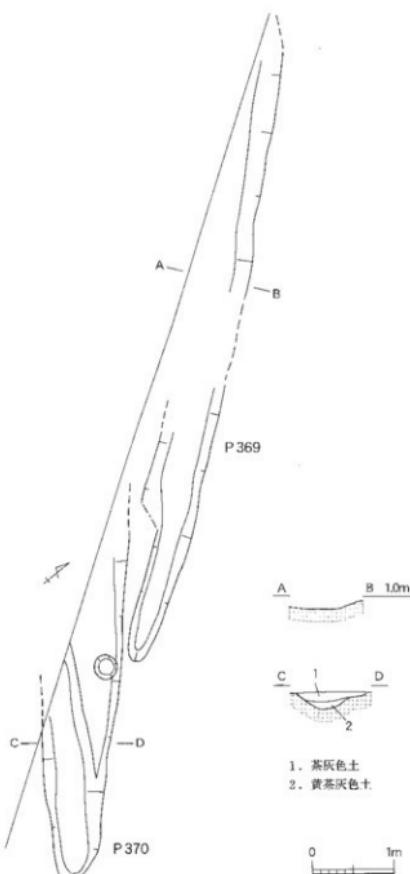


図43 P 369・P 370 (1/60)



図44 溝9 (1/60)

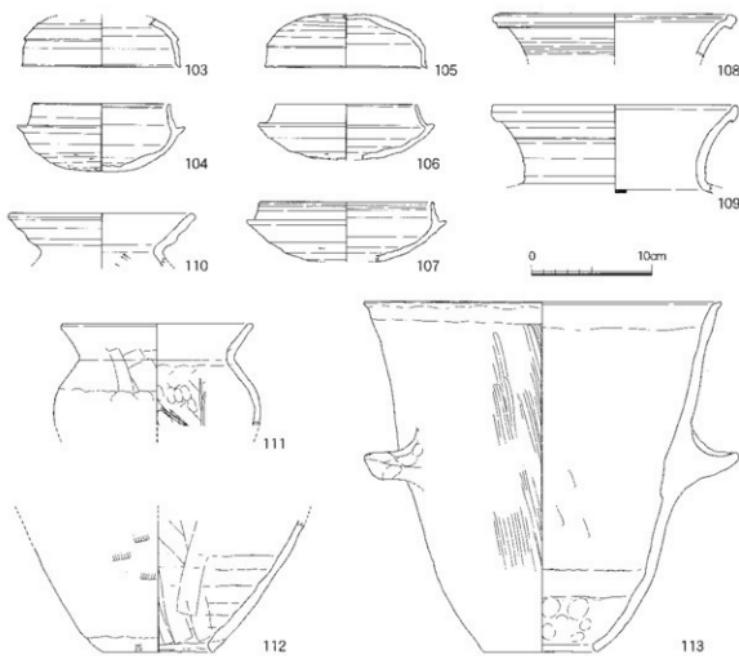


図45 溝9 出土遺物1 (1/4)

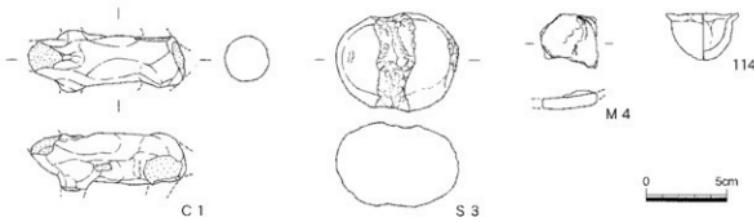


図46 溝9 出土遺物2 (1/3)

## 溝25（図37・47）

調査区の西側で検出された溝で、堅穴住居によって削平されている。大半が後の遺構によって削平されているため全形はよくわからないが、調査区の北西部から南東部への直線的な方向性を有しているといえる。遺構検出面は1.1m付近で、断面形は傾斜の急な台形を呈する。深さは検出面から0.6mである。出土した遺物は極めて少なく、土器の小片が若干であった。それらは弥生時代後期から古墳時代前期の時期幅と考えられる。

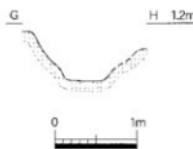


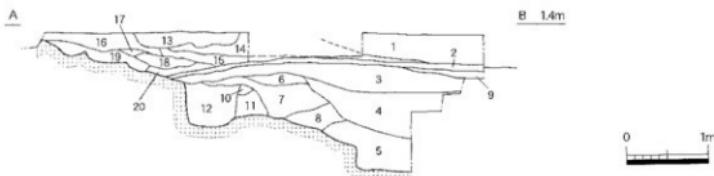
図47 溝25（1/60）

## （3）中世（図48）

## 溝7（図49～53）

調査区の南東隅で検出された溝である。I区で検出された溝6の南側の延長部分といえる。溝6はII区の東側で大きく流路方向を西側に変え、その西岸部を調査区内で検出したものといえる。溝7の遺構検出面は1.4m前後である。埋土は20層が確認され、②層より上面とそれ以下で分離することができる。②層より上面を上層、以下を下層とすると、下層は15・16世紀の遺物が主体で、上層についてはあまり遺物が含まれない。この点は溝6と共通する。上層の土層は比較的細かな単位となっており、しかもブロック状にもみられることから、極めて人為的な埋没が認められる。このような土層の堆積状況は近世の遺構面となった溝7の上面にも連続的に認められる。おそらくこの位置は、溝7が埋没した以降も周辺よりもレベル高の低い低位部であったために近世においても何度か造成がおこなわれたのであろう。

出土遺物は、備前焼窯（115～119）、備前焼壺ほか（120～135・142）、備前焼徳利（136）、備前小壺（137・138）、備前焼鉢（139～141・143～155）、青磁碗（156～158）、土師質土器鍋（159～161）、土師質土器碗（162・163）、土師質土器皿（164～166）、土器壺（167）、下駄（W3）、建築部材（W4）、サスカイト製スクレイパー（S4）、砥石（S5）である。



- |            |           |                   |           |
|------------|-----------|-------------------|-----------|
| 1. 淡黃灰色繊維  | 6. 黒灰色土   | 11. 灰青白色シルト       | 16. 黄茶灰色土 |
| 2. 淡褐色繊維   | 7. 灰黒色シルト | 12. 黒灰色繊維         | 17. 灰色土   |
| 3. 暗褐色土    | 8. 暗灰白色繊維 | 13. 淡茶灰色土         | 18. 黄灰褐色土 |
| 4. 暗青灰色シルト | 9. 淡褐色繊維  | 14. 淡灰色土 合13のブロック | 19. 暗茶灰色土 |
| 5. 暗褐色繊維   | 10. 灰青色土  | 15. 墓褐色土          | 20. 黄灰色土  |

図49 溝7（1/60）

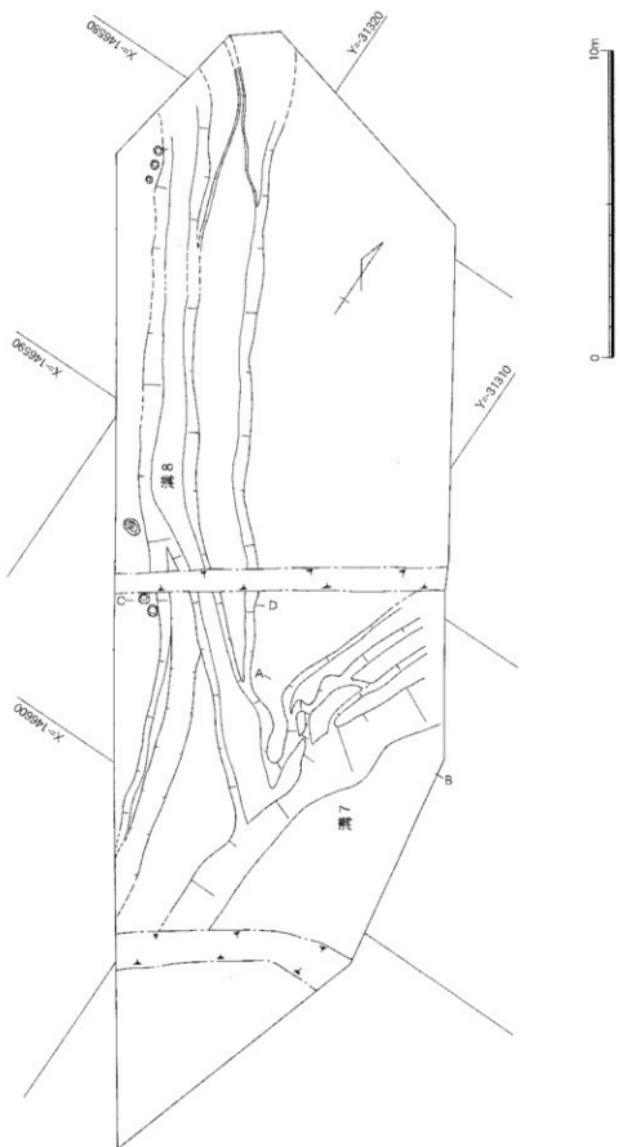


図48 II区 中世後期（15~16世紀）遺構配置図（1/160）

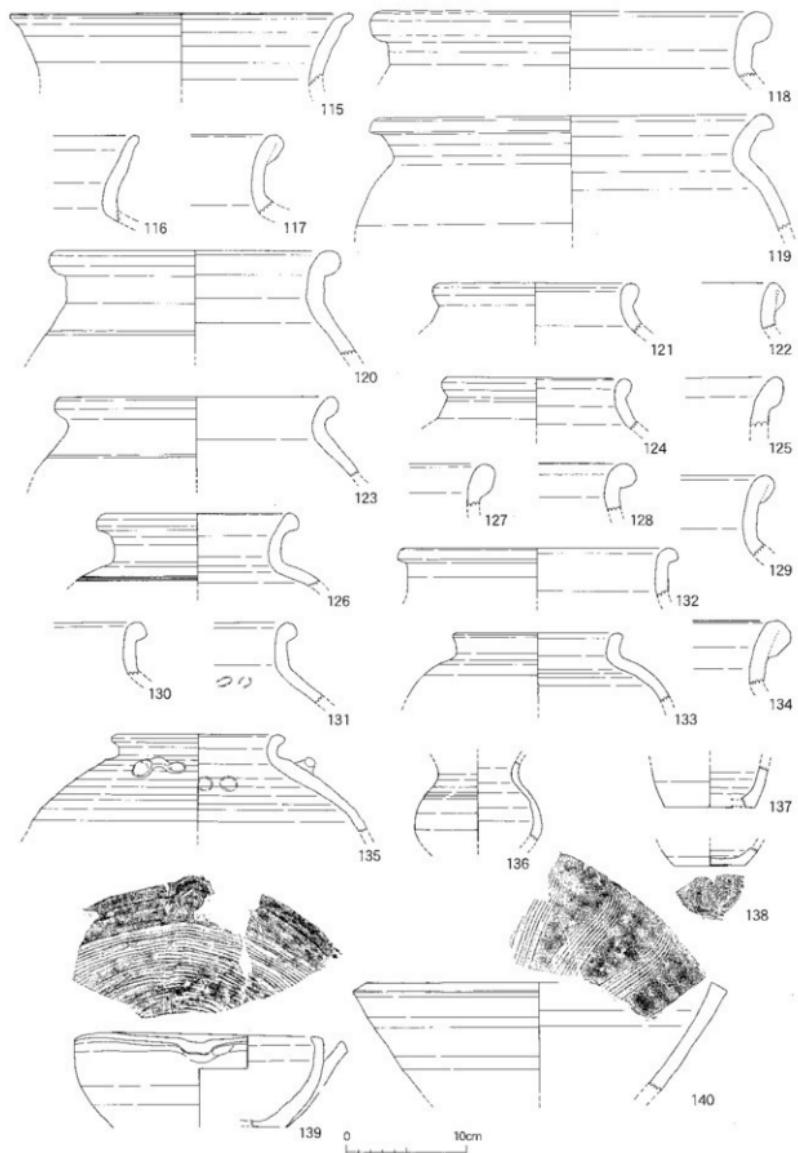


図50 溝7 出土遺物1 (1/4)

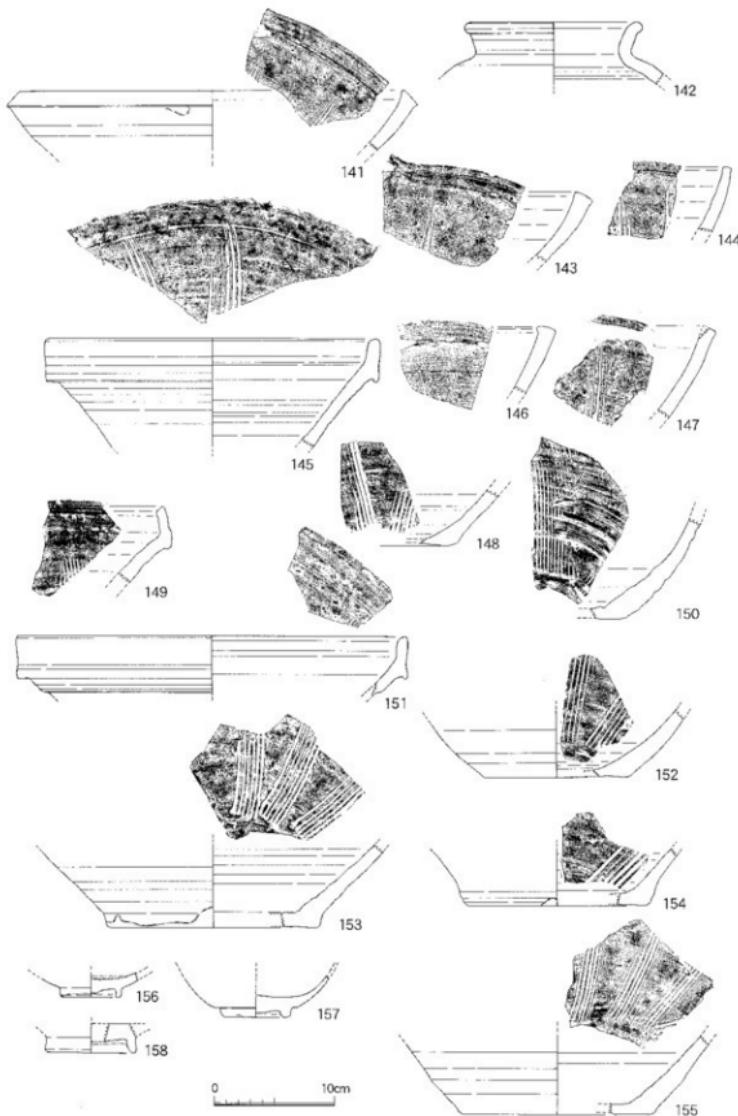


図51 溝7 出土遺物2 (1/4)

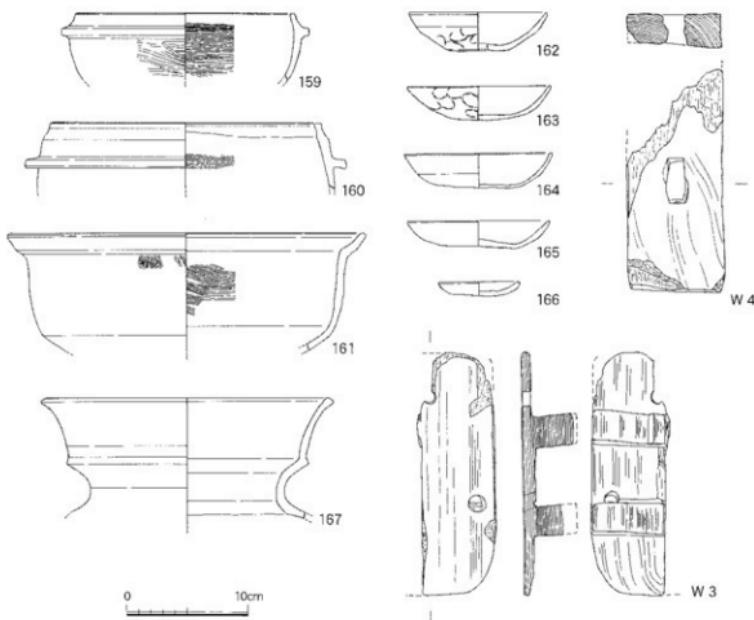


図52 溝7 出土遺物3 (1/4)

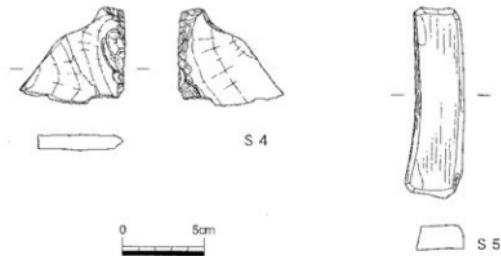


図53 溝7 出土遺物4 (1/3)

## 溝 8 (図48・54・55)

調査区の西側で、調査区に沿って検出された溝である。北端部では西側で急に方向を変えている。南端部でも西側へ方向を変えている可能性が高く、I区で検出された溝2のように屋敷地を囲繞する溝という性格も十分考えられる。ただし南側では溝7と接続しており、深さも南側へ低くなっていることから、溝8の排水は溝7へおこなわれていたといえる。遺構検出面は1.3m付近で、断面形は基本的にはU字形であるが、中央付近は幅0.8mほど若干低くなっている。複数の溝が重複しているか、もしくは掘り直しの痕跡である可能性がある。出土した遺物についてもやや時期幅が認められることから、ある程度存続幅のある溝の可能性がある。底面は若干凹凸があるが、全体としては幅が3.5mほどである。

出土した遺物は、備前焼壺ほか(168・170～186)、備前焼甕(169)、備前焼擂鉢(187～191)、土師質土器鍋(192～194)、土師質土器椀(195・196・198・199)、土師質土器皿(197)、緑釉陶器(200)、青磁(201・203)、灰釉陶器(202)である。

## 中世遺構精査時出土遺物(図56)

中世遺構を精査した際多くの遺物が出土した。大半は備前焼や土師質土器であったが、青磁(204・205・207・208)、白磁(206)、緑釉陶器(209)も認められた。

## (4) 近世初頭(17世紀前半)(図57)

## 建物1(図58)

調査区の北端で検出された総柱の掘立柱建物である。柱間は2間×2間で、棟方向はほぼ南北方向である。ただし南西コーナー部の柱穴は、近現代の土管によって削平をうけて残存していなかった。遺構検出面は1.3m付近で、深さは検出面から0.1～0.6mである。柱穴掘り方は径0.2～0.4mである。建物1と一部重複する建物2は主軸方向も一致することから、おそらく同一建物の建て替えの可能性が推測される。そして、これらの建物の周囲には柱穴列が付属しており、屋敷地の主屋的な建物であったことがうかがわれる。建物1の床面積は13.8m<sup>2</sup>である。出土遺物は微細な土師器片と備前焼の小片だけであった。

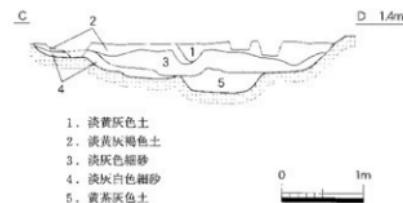


図54 溝8 (1/60)

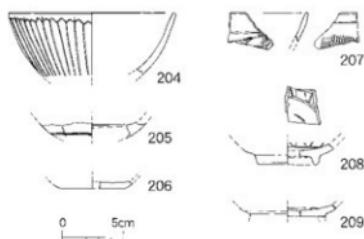


図56 II区 中世遺構面 出土遺物 (1/4)

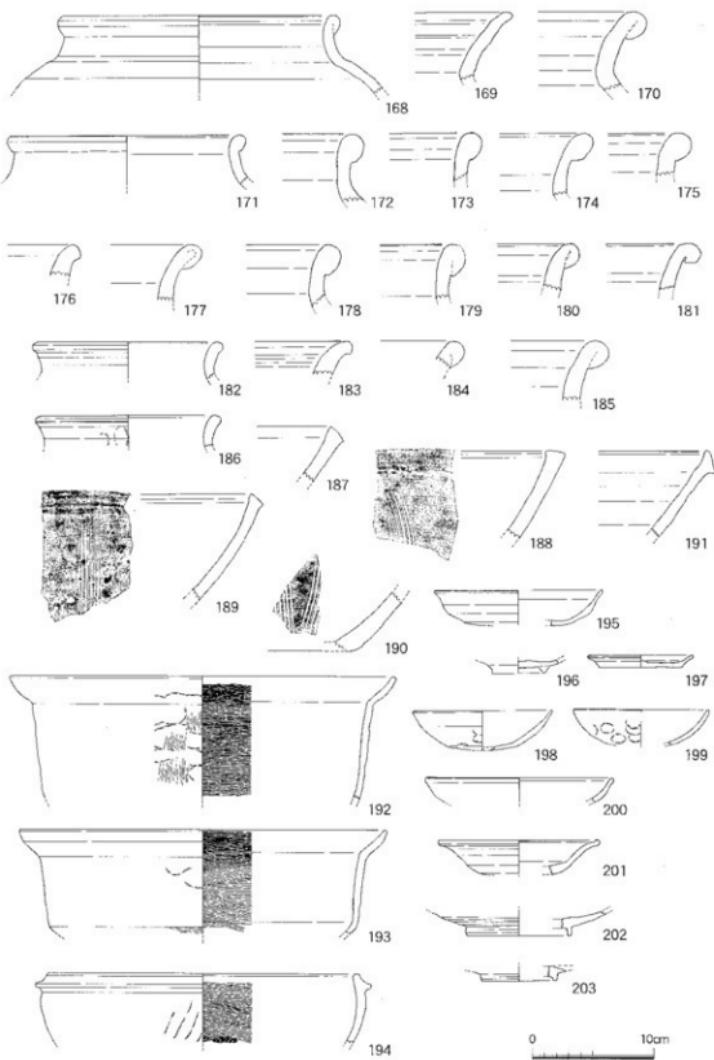


図55 溝8 出土遺物 (1/4)

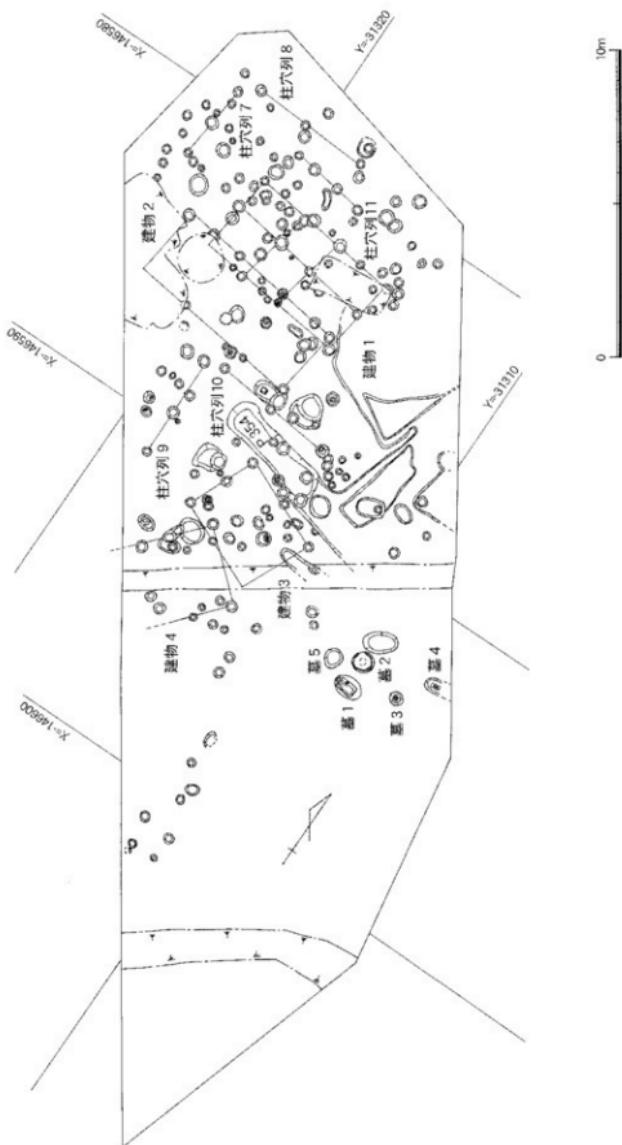


図57 Ⅱ区 近世初頭（17世紀前半）遺構配置図（1/160）

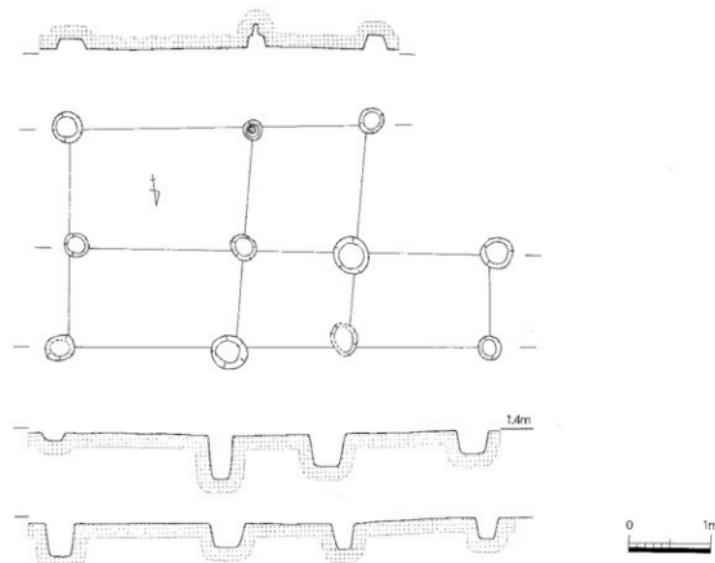


図58 建物1 (1/60)

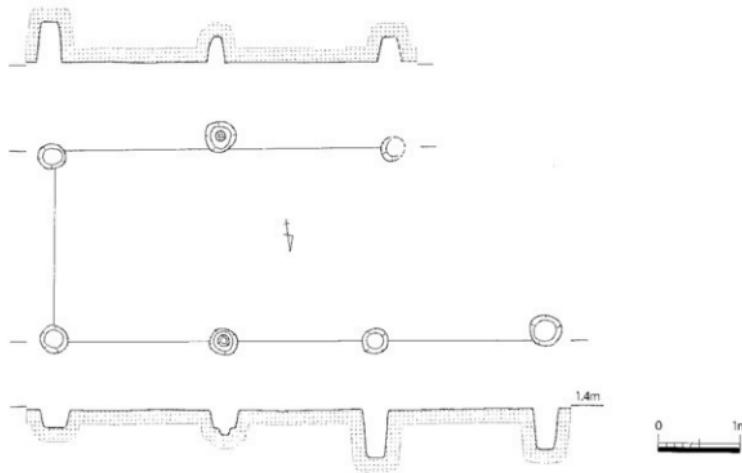


図59 建物2 (1/60)

### 建物 2 (図59)

調査区の北端で検出された掘立柱建物である。柱間は1間×3間以上で、棟方向はほぼ南北方向である。ただし南西コーナー付近は、近現代のゴミ穴によって大きく削平をうけているため明確ではない。しかし、北側の隅柱の西側延長部の対応する位置に柱穴が認められないことから、1間×3間の柱間の側柱建物である可能性が高い。遺構検出面は1.3m付近で、深さは0.2~0.4mである。柱穴掘り方は径0.2~0.4mである。建物2

と一部重複する建物1は主軸方向も一致することから、おそらく同一建物の建て替えの可能性が推測される。そして、これらの建物の周間に柱穴列が付属しており、屋敷地の主屋的な建物であったことがうかがわれる。建物2の床面積は想定される柱間であるとすると、14.4m<sup>2</sup>である。出土遺物は微細な土師器片と備前焼の小片だけであった。

### 建物 3 (図60)

調査区の中央付近で検出された掘立柱建物で、一部配管によって削平されている。柱間は2間×2間の小規模なもので、棟方向はN-60°-Wである。遺構検出面は1.3m前後で、深さは0.2~0.4mである。柱穴掘り方は0.3m前後である。床面積は7.7m<sup>2</sup>ほどと推測される。出土遺物は微細な土師器片が若干出土した。

### 建物 4 (図61)

調査区中央の西端で検出された掘立柱建物であるが、断片的であることや、調査区の端部に位置することから詳細については不明で、建物でない可能性もある。一応建物とすると、1間×2間以上の柱間で、床面積は6m<sup>2</sup>以上となる。出土遺物は微細な土師器片が若干出土した。

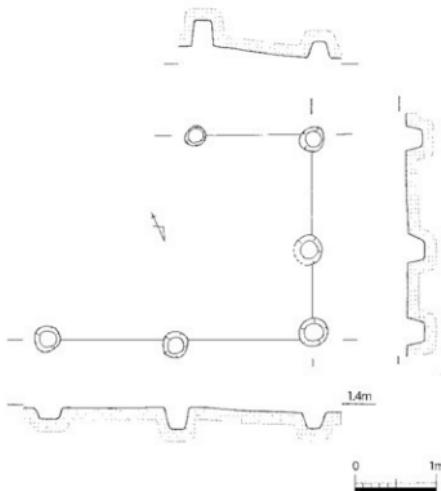


図60 建物3 (1/60)

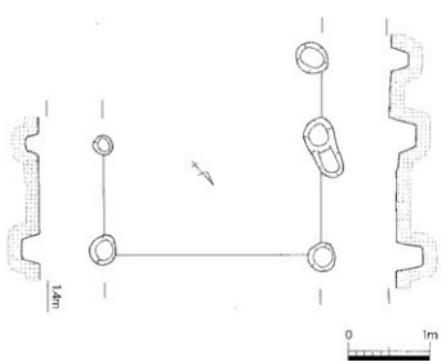


図61 建物4 (1/60)

**柱穴列7 (図62)**

調査区の北西コーナー付近で検出された柱穴列である。造構検出面は1.3m付近で、深さは検出面から0.4~0.6mである。柱穴掘り方は径0.3~0.4mである。ほぼ南北方向に軸方向を合わせており、建物1に伴うものと考えられる。出土遺物は微細な土師器片が若干出土した。

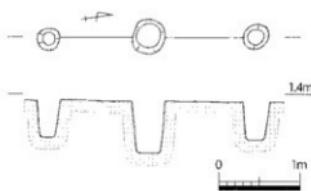


図62 柱穴列7 (1/60)

**柱穴列8 (図63)**

調査区の北西コーナー付近で検出された柱穴列である。造構検出面は1.3m付近で、深さは検出面から0.2m前後である。柱穴掘り方は径0.3~0.4mである。ほぼ東西方向に軸方向を合わせており、建物1に伴うものと考えられる。出土遺物は微細な土師器片が若干出土した。

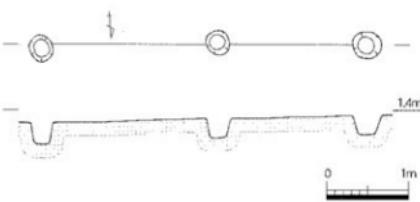


図63 柱穴列8 (1/60)

**柱穴列9 (図64)**

調査区の中央西端付近で検出された柱穴列である。造構検出面は1.4m付近で、深さは検出面から0.2~0.4m前後である。柱穴掘り方は径0.3~0.4mである。ほぼ南北方向に軸方向を合わせており、建物1もしくは建物2に伴うものと考えられる。出土遺物は微細な土師器片が若干出土した。

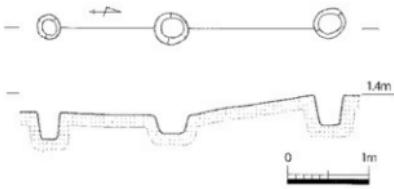


図64 柱穴列9 (1/60)

**柱穴列10 (図65)**

調査区の北西コーナー付近で検出された柱穴列である。造構検出面は1.3m付近で、深さは検出面から0.2m前後である。柱穴掘り方は径0.4~0.7mである。ほぼ東西方向に軸方向を合わせており、建物1もしくは建物2に伴うものと考えられる。出土遺物は微細な土師器片が若干出土した。

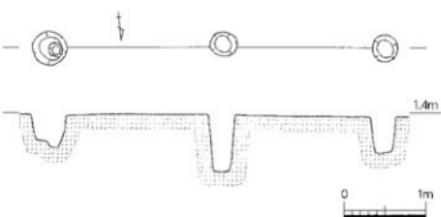


図65 柱穴列10 (1/60)

## 柱穴列11（図66）

調査区の北西コーナー付近で検出された柱穴列である。遺構検出面は1.3m付近で、深さは検出面から0.2m前後である。柱穴掘り方は径0.3~0.4mである。ほぼ東西方向に軸方向を合わせており、建物1に伴うものと考えられる。出土遺物は微細な土器器片が若干出土した。

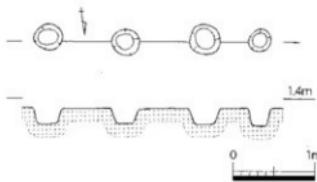


図66 柱穴列11 (1/60)

## 墓1（図67）

調査区南東部で検出された。中世段階では溝であった部分であり、溝埋没後さらに造成をおこなって墓地を形成している。屋敷地の一部にもなることから、いわゆる屋敷墓であると考えられる。墓1は木棺墓で、長さ0.7m、幅0.4m、検出時の高さ0.17mの箱形の木棺を用いている。釘は出土していない。まず長さ1.1m、幅0.65mの長辺円形の浅い土壇を掘り、さらに木棺と全く同じ大きさの掘り方を深さ約0.2m掘り下げている。木棺の板材の端々が腐朽しているためやや不明確ではあるが、まず底板を置いて、その上の四周に側板を置き、蓋板を被せているといえる。蓋の上面からは角礫が検出されており、蓋の上面に置かれたのかもしれない。木棺内には人骨が一部遺存していた。また副葬品と考えられる針金も認められたが、針金は塊となっており、細工物のような何らかの形に成形されて副葬されていた可能性がある。軸方向は、建物1や建物2と同様にほぼ東西方向を指向している。

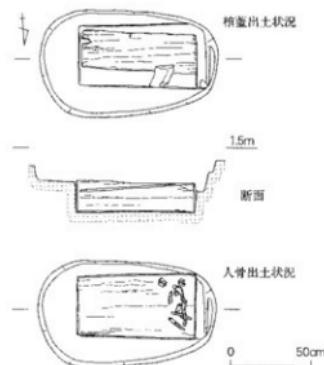


図67 墓1 (1/30)

## 墓2（図68・69）

墓1の北側に並ぶような位置関係にある土器棺墓である。径0.6mの円形の掘り方に備前焼の甕(210)を据えている。墓1の木棺と同様に、掘り方は棺とほぼ同じサイズである。遺構検出面は1.4m付近で、深さは0.5mである。掘り方は円柱状であり、そのため下部になると掘り方と甕の間には空間が生じるが、そこに備前焼擂鉢(212・213)、瓦質甕(214)、伊万里焼大皿(211)の破片を入れ込んでいる。備前焼擂鉢の破片は小片に近いが、伊万里焼の大皿は完形に接合はできないが比較的大きな破片ばかりであることから、埋葬時に割って掘り方やその周辺に入れた可能性がある。甕内部からは人骨の一部と副葬品である伊万里焼のぐい呑み(215)、木片などが出土した。木片については、甕の口縁部に関する破片が全く出土しなかったことから、甕上半部を欠いた甕に木蓋をして棺に用いたことを示している。伊万里焼のぐい呑みは、棺中央の底部から若干浮いた位置で出土しており、人骨に包まれるような状態であったことから、手に持たされたかあるいは身体の上に置かれて副葬されたと考えられる。

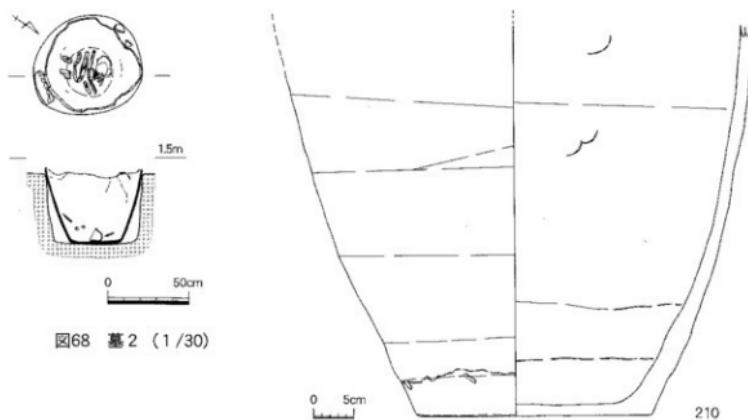


図68 墓2 (1/30)

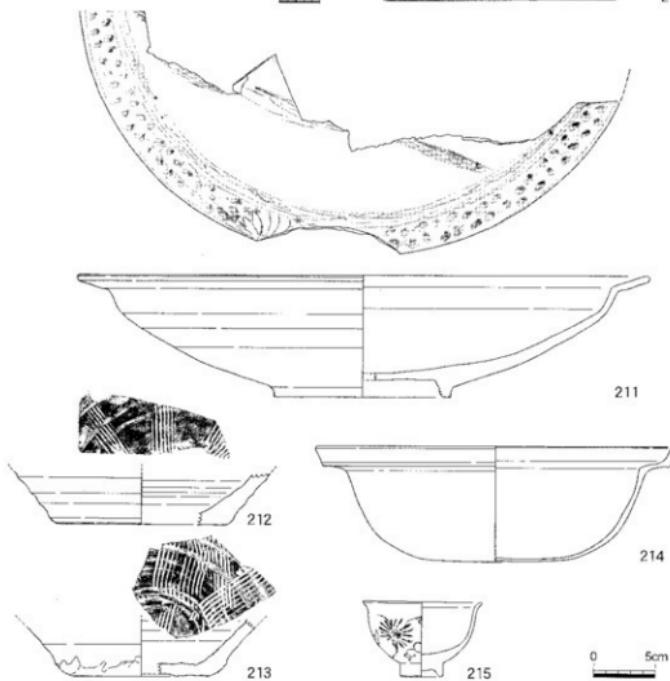


図69 墓2 出土遺物 (1/6・1/4)

## 墓3（図70・71）

墓2の南側で検出された骨蔵器である。径0.4mの円形の掘り方の中央に骨蔵器である羽釜形の土師質土器（216）を置いている。遺構検出面は1.4m付近で、深さは検出面から0.1mである。

## 墓4（図70）

墓3の東側で、調査区の端部で検出された土壙簿である。遺構検出面は1.4m付近で、深さは検出面から0.1mである。長さ0.6m以上、幅0.45mの方形の平面形を呈する。検出面には角礫が4つ並んでおり、意識的に配置されたこともうかがわれる。遺構底面には人骨が一部残存していたが、副葬品等は出土しなかった。

## 墓5（図70）

墓1の西側で検出された。一応土壙墓であるが、木片も出土しており、土壙の形状も円筒形であることから、桶状の棺を据えていた可能性が高い。遺構検出面は1.4m付近で、深さは検出面から0.5mである。平面形は径約0.55mの円形で、西側が若干突出する。中央には長さ0.25mの大きな角礫が検出面から0.3m下がった位置で検出されている。これは埋葬後棺の上面に置かれ、棺の腐朽とともに下に落ちたものと推測される。人骨は一部残存しており、それらは全て角礫の下で検出された。副葬品等は出土しなかった。

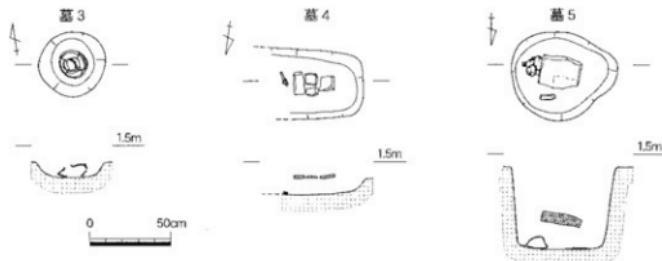


図70 墓3・4・5 (1/30)

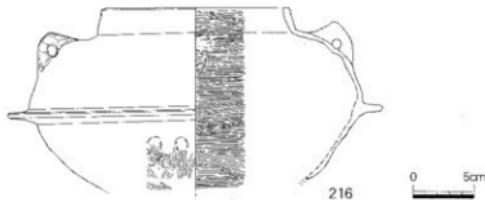


図71 墓3 出土遺物 (1/4)

## P354 (図72・73)

調査区の中央付近で検出された長楕円形の平面形を呈する土壌で、長軸方向がほぼ南北方向であることや、建物1・建物2に付属すると考えられる柱穴列10とほぼ並んでいることから、両建物との関連性が推測される。遺構検出面は1.4m付近で、深さは検出面から0.1mである。皿状の断面形を呈する。長さ1.8m、幅0.6mの規模である。遺構底面からは長さが5cm前後の角礫が比較的多く出土したが、規則性をうかがわせるような状況ではなかった。

出土遺物は備前焼壺(217)、瓦質鉢(218)、備前焼碗(219)であるが、いずれも遺構底面で、しかも溝8と重複している部分から出土しており、中世遺構からの混入の可能性が高い。

## 近世初頭遺構精査時出土遺物(図74)

遺構精査時にも遺物が出土したが、大半は備前焼と土師質土器であったが、瀬戸焼天目碗(220)、唐津焼皿(221)、伊万里焼(222・223)、土師質土器皿(224)も出土し、それらから近世初頭遺構面の時期幅が16世紀末から17世紀前半であることがうかがわれる。

## (5) 近世後期(18・19世紀)(図75)

## P317(図76)

調査区の南側で検出した不定形の土壌で、ゴミ穴と考えられる。調査区の南側は溝7の影響もあって、近世に入ってからも低位部に近い環境であつたらしく、何度か造成をおこなっている。最終的には18世紀後半から19世紀にかけてまで、P317はその後に掘削されている。長さ8.2m、幅1mの長方形の平面形の北端部や中央部を部分的に方形気味に拡幅し、全体として不整形となっている。遺構検出面は1.4m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形は台形である。

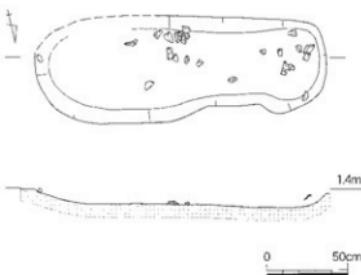


図72 P354 (1/30)

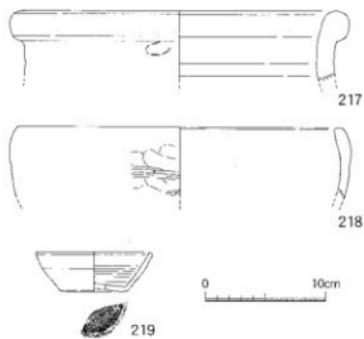


図73 P354 出土遺物 (1/4)

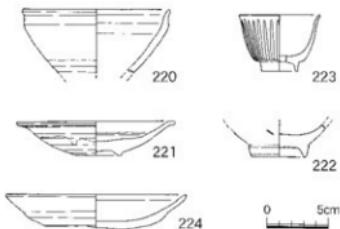


図74 II区 近世遺構面 出土遺物 (1/4)

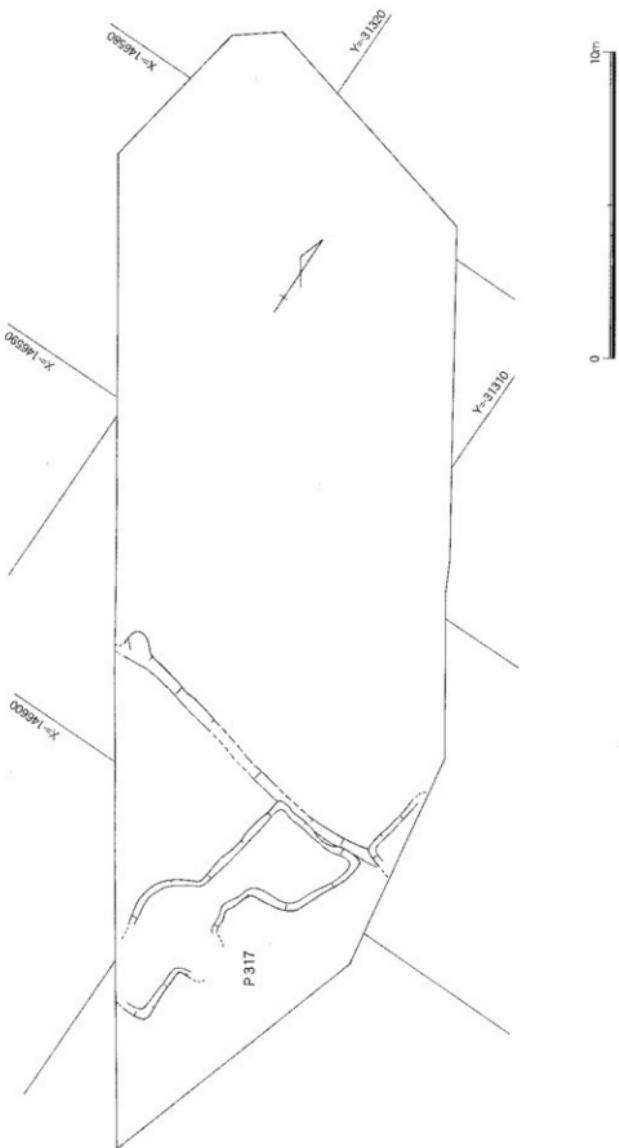


図75 II区 近世後期(18・19世紀) 遺構配置図(1/160)

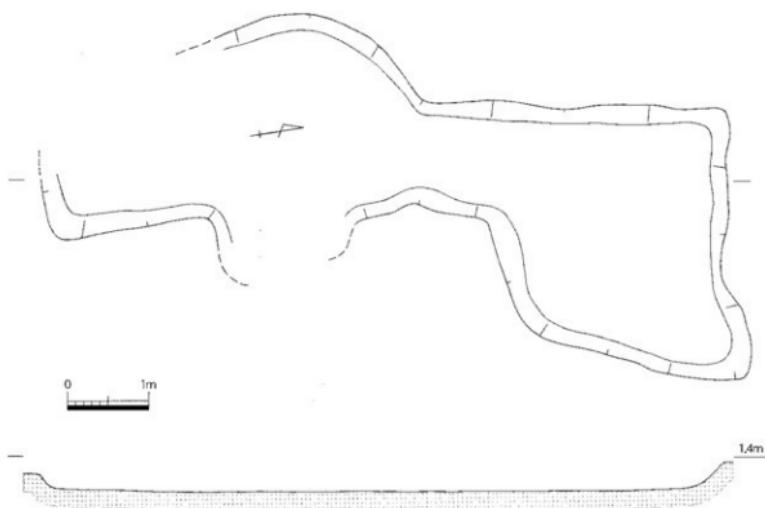


図76 P317 (1/60)

### III III区

調査区の中央には山手川用水が通り、また西側については同用水の改修工事のための仮設用水によって削平されている。調査はそれらの削平から免れた部分をおこなったが、実質は半分以下の面積しかおこなえなかった。さて発掘調査の結果、調査区の北半は近世以前は山手川用水の振幅幅のなかにおさまるが、用水掘削以前も微高地基盤は存在せず、低位部であった（図77-⑦・⑧層）。南半には微高地基盤が存在することから、III区は東岡山遺跡の東限付近に位置することになるといえる。そのため古墳時代の遺構は微高地縁辺の溝が主体であった。ただ、中世に関する遺構面については若干複雑である。おそらく微地形にはIII区と同じ微高地に位置すると考えられるが、山手川用水（溝20）がII区とIII区の間を大きく抉るように西側へ蛇行しており、さらにIII区の北側では微高地のレベル高が低くなってしまっており、II区との間にたわみ状の地形が存在しているようであることから、II区とは別の単位の集落と考えられる。近世になると、南半は集落域でありゴミ穴が顕著である。

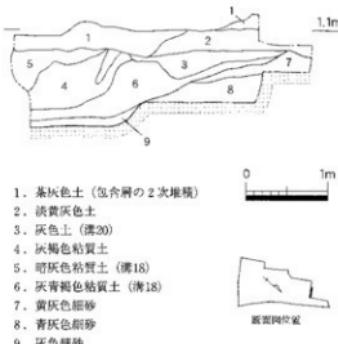


図77 III区 北壁 断面 (1/60)

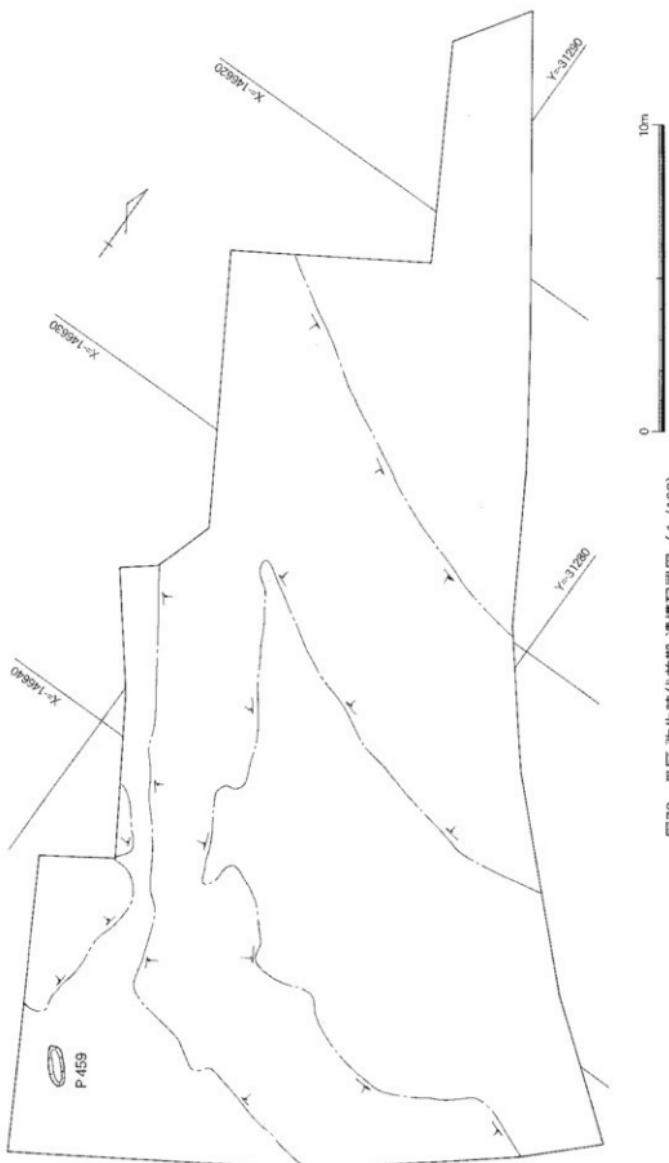


図78 Ⅲ区 弥生時代前期 遺構配置図 (1/160)

## (1) 弥生時代前期 (図78)

P459 (図79・80)

調査区の南西コーナー付近で検出された長楕円形の土壤である。調査区内に限ると、微高地の最も高い部分に位置する。ただし、上面は溝16によって削平されている。遺構検出面は1.0m付近で、最深部の深さは検出面から0.1m前後である。断面形は、台形である。長径1.4m、短径0.5mの長楕円形の平面形を呈する。遺物は全て底面よりも若干浮いた位置から出土した。遺構の形状から土壤墓の可能性も想定されるが、人骨等は検出されなかった。

出土遺物は壺形土器 (225)、底部 (226)

だけであった。

## (2) 古墳時代前期 (図81)

井戸1 (図82・83)

調査区の中央西端で検出された井戸である。東側の端部の一部は削平をうけているが、平面形は径0.7mの円形を呈すると考えられる。遺構検出面は2.0m付近で、最深部の深さは検出面から0.64mである。断面形はやや底面に向かってすぼみ気味の形状を呈する。埋土は3層で、土質的には顕著な特徴を有するわけではないが、上層的にはブロック状であることから、人為的に埋められたことがうかがわれる。遺物は遺構底面からまとまって出土した。

出土遺物は、半截された壺形土器上半部 (227)と底部付近 (228) の破片で、両者には接合面はないものの、同一個体と考えられる。

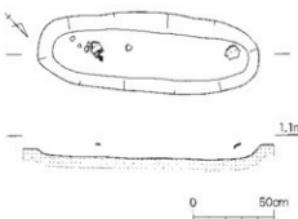


図79 P459 (1/30)

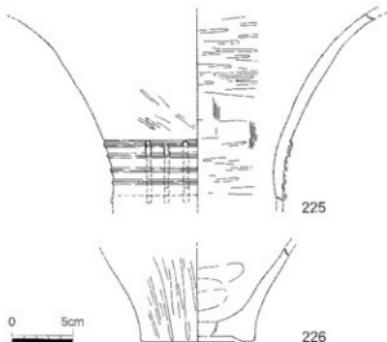


図80 P459 出土遺物 (1/4)

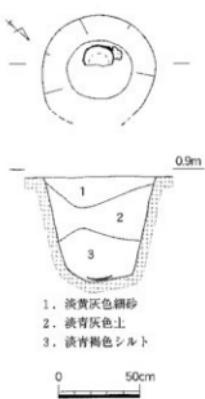


図82 井戸1 (1/30)

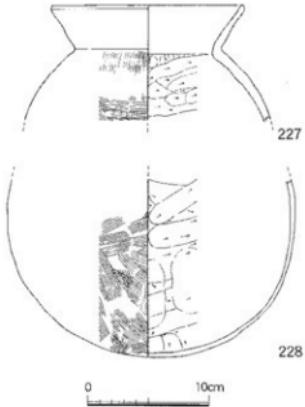


図83 井戸1 出土遺物 (1/4)

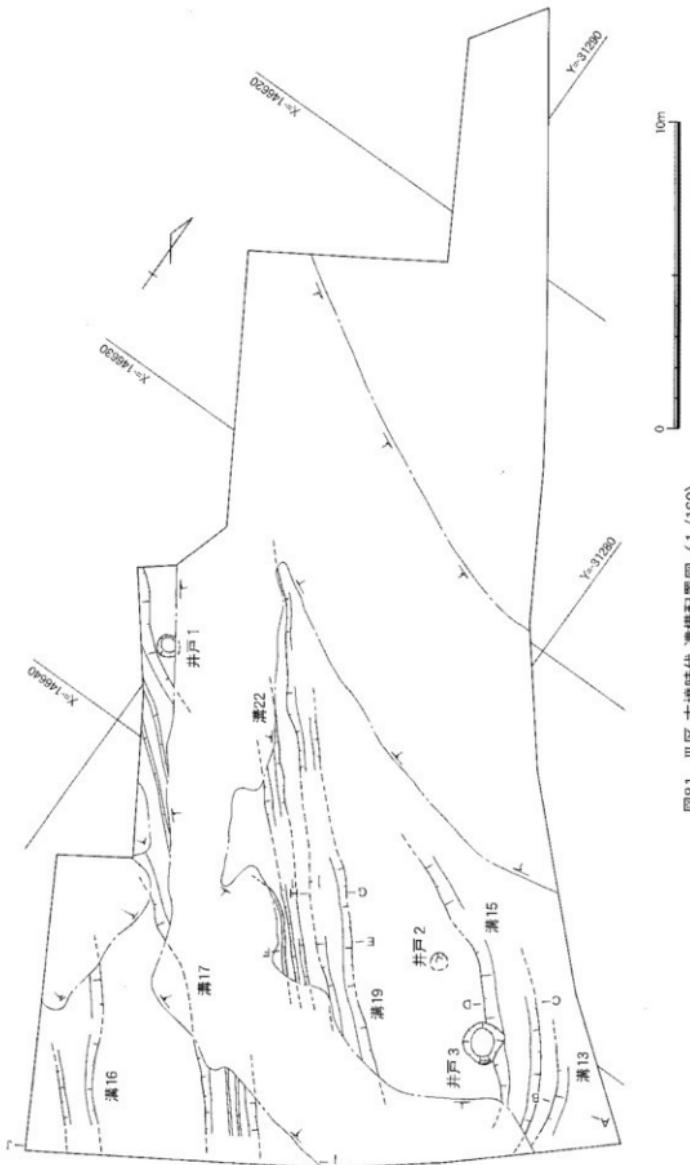


図81 Ⅲ区古墳時代遺構配置図 (1/160)

## 井戸 2 (図84・85)

調査区中央やや南よりで検出された井戸である。東側は近世の遺構であるP393によって削平されている。ただしその削平は遺構底面にまではおよんでいない。遺構検出面は0.8m付近で、最深部の深さは検出面から1.5mである。断面形は南側のやや上半で広がるもの全体としては筒形である。径0.6~0.7mの楕円形の平面形を呈するが、底面になるとやや不整形となる傾向がある。埋土は7層で、⑤層には多量の炭が入り、④層は人為的に埋没させられたことを明確にうかがわせる。①~⑥層には全く遺物が含まれていなかった。おそらくかなり短期間の間に埋められたのであろう。遺物は最下層である⑦層からのみ出土し、それも完形の土師器甕だけであった。

出土した遺物は土師器甕(229~231)が3個体で、いずれも口縁部の形状や調整に個体差が認められる。

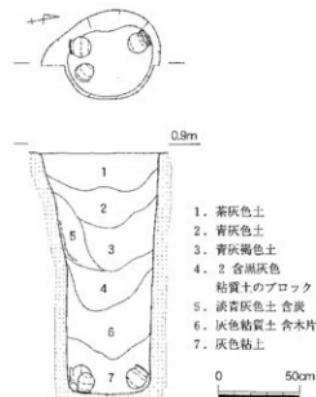


図84 井戸 2 (1/30)

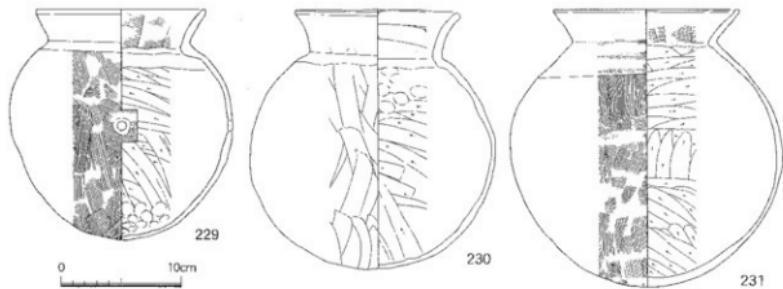


図85 井戸 2 出土遺物 (1/4)

## 井戸 3 (図86~88)

調査区南東コーナー付近で検出された井戸である。遺構検出面は0.9m付近で、最深部までの深さは検出面から1.4mである。上方で隅丸方形の平面形に外開きになるが、基本的には筒状の形態の断面形で、平面的には径0.9mの円形である。上面では一辺1.1~1.2mの隅丸方形気味の平面形を呈し、埋土を若干掘り下げた時点で土師器甕、土師器高杯の破片が出土した。土層的には②層に対応する。井戸を埋没させた最終段階にできた窪みに土器を投棄したのであろう。井戸底面から浮いた位置から完形の土師器甕が3個体出土したが、これらと⑤層から出土した土器の投棄は一連の行為のなかでおこなわれたと推測される。ただし、⑤層の土器は完形で、②層の土器は破片であることから、②層の土器は破碎されて投棄されたことも十分考えられる。

出土した遺物は、②層からは土師器壺の口縁部（235～237）、頸部以下（238）、土師器高杯の杯部と脚部（240～244）、鹿角を鉛筆のキャップ状に先細りの形態に加工しつつある未製品（B 1）が出土し、⑤層からはほぼ完形の土師器壺（232～234）、土師器壺（239）が出土した。そのうち（232）は胴部中程に径 2 cm ほどの焼成後穿孔をおこなっている。注口の機能でも付加したのであろうか。

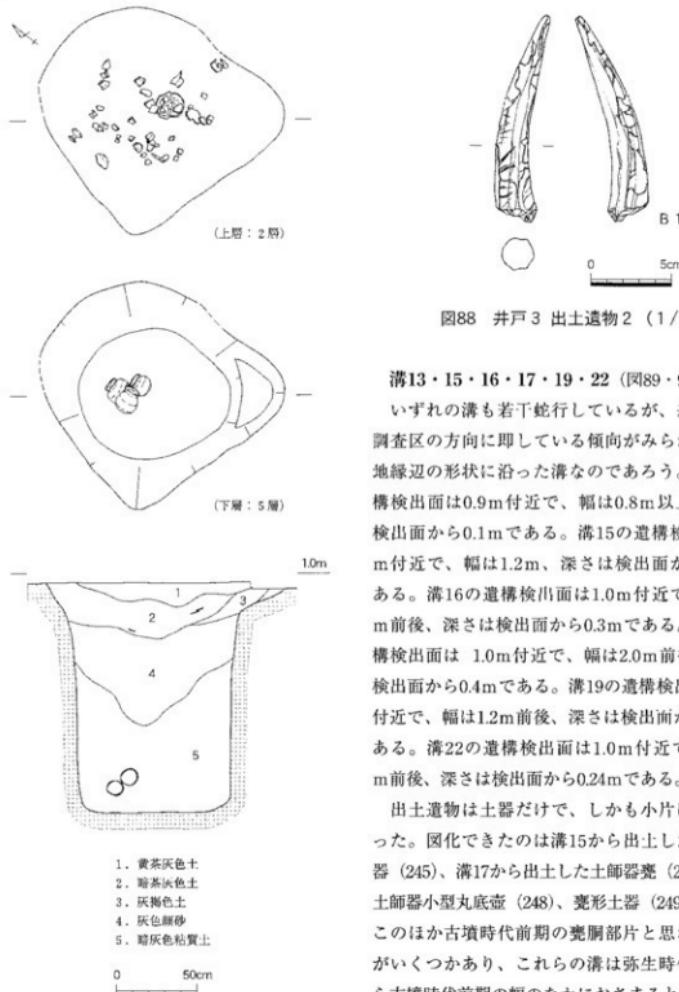


図86 井戸 3 (1/30)

図88 井戸 3 出土遺物 2 (1/3)

## 溝13・15・16・17・19・22 (図89・90)

いずれの溝も若干蛇行しているが、基本的には調査区の方向に即している傾向がみられる。微高地緑辺の形状に沿った溝なのであろう。溝13の遺構検出面は 0.9 m 付近で、幅は 0.8 m 以上、深さは検出面から 0.1 m である。溝15の遺構検出面は 1.1 m 付近で、幅は 1.2 m、深さは検出面から 0.2 m である。溝16の遺構検出面は 1.0 m 付近で、幅は 1.0 m 前後、深さは検出面から 0.3 m である。溝17の遺構検出面は 1.0 m 付近で、幅は 2.0 m 前後、深さは検出面から 0.4 m である。溝19の遺構検出面は 1.0 m 付近で、幅は 1.2 m 前後、深さは検出面から 0.4 m である。溝22の遺構検出面は 1.0 m 付近で、幅は 0.4 m 前後、深さは検出面から 0.24 m である。

出土遺物は土器だけで、しかも小片ばかりであった。図化できたのは溝15から出土した高杯形土器（245）、溝17から出土した土師器壺（247・250）、土師器小型丸底壺（248）、壺形土器（249）だけで、このほか古墳時代前期の壺胴部片と思われるものがいくつかあり、これらの溝は弥生時代後期末から古墳時代前期の幅のなかにおさまるといえる。

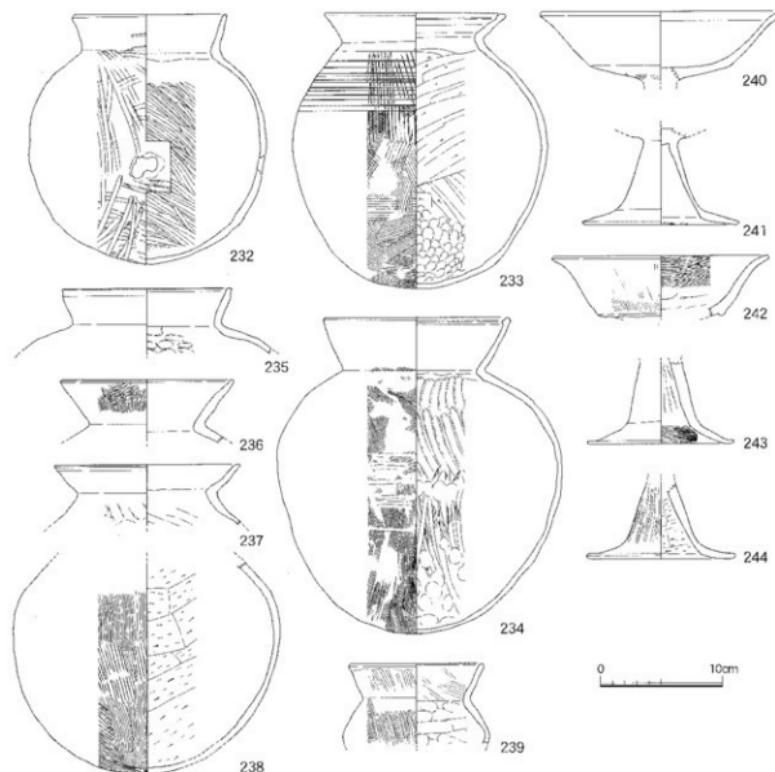


図87 井戸3 出土遺物1 (1/4)

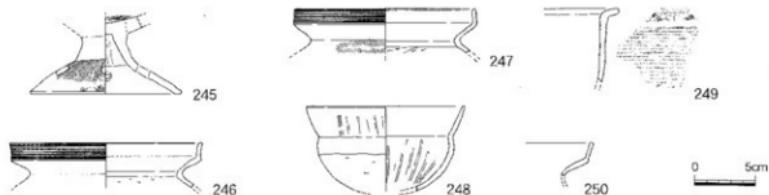


図90 溝15・16・17 出土遺物 (1/4)

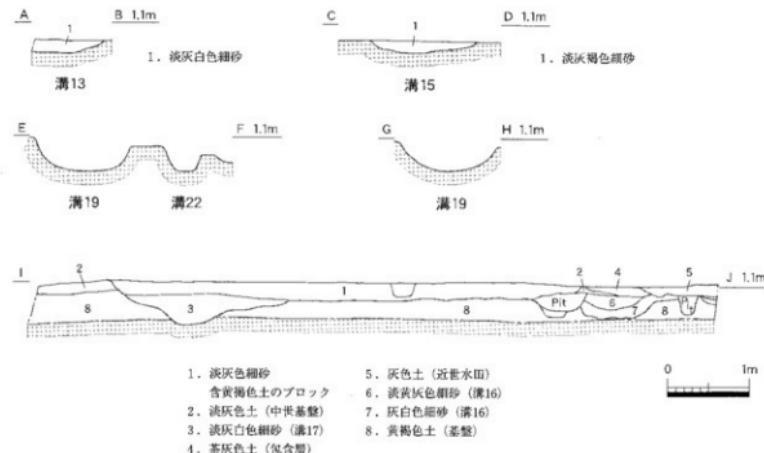


図89 古墳時代 溝・南西部壁断面 (1/60)

## (3) 中世後期 (15・16世紀) (図91)

## 建物5 (図92)

調査区の南西部で検出された掘立柱建物で、棟方向はほぼ南北方向である。西側は現代のゴミ穴によって大きく削平されていることから全形は不明だが、1間以上×3間の柱間が想定される。このほかに検出された柱穴列も南北方向であることから、Ⅲ区の屋敷地は正方位、すなわち条里方向に規定されているといえる。建物5の遺構検出面は1.1m付近、柱穴の深さは検出面から0.1~0.4m前後である。柱穴は径0.2m前後の円形である。出土遺物は微細な土師質土器の小片が若干出土したのみである。

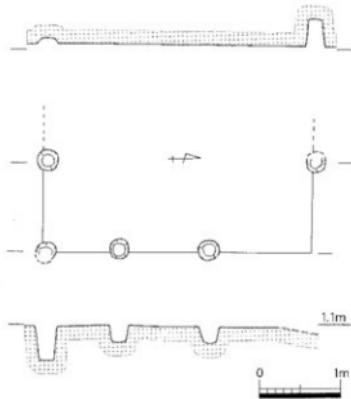


図92 建物5 (1/60)

## 柱穴列12 (図93)

調査区の中央付近で検出された柱穴列で、軸方向はほぼ南北方向である。南側は大きく削平されているため明確でないが、本来はもう少し南へ延びる柱穴列であった可能性がある。遺構検出面は1.1m付近で、柱穴の深さは検出面から0.2~0.4m前後である。柱穴は径0.2m前後の円形である。出土遺物は微細な土師質土器の小片が若干出土したのみである。

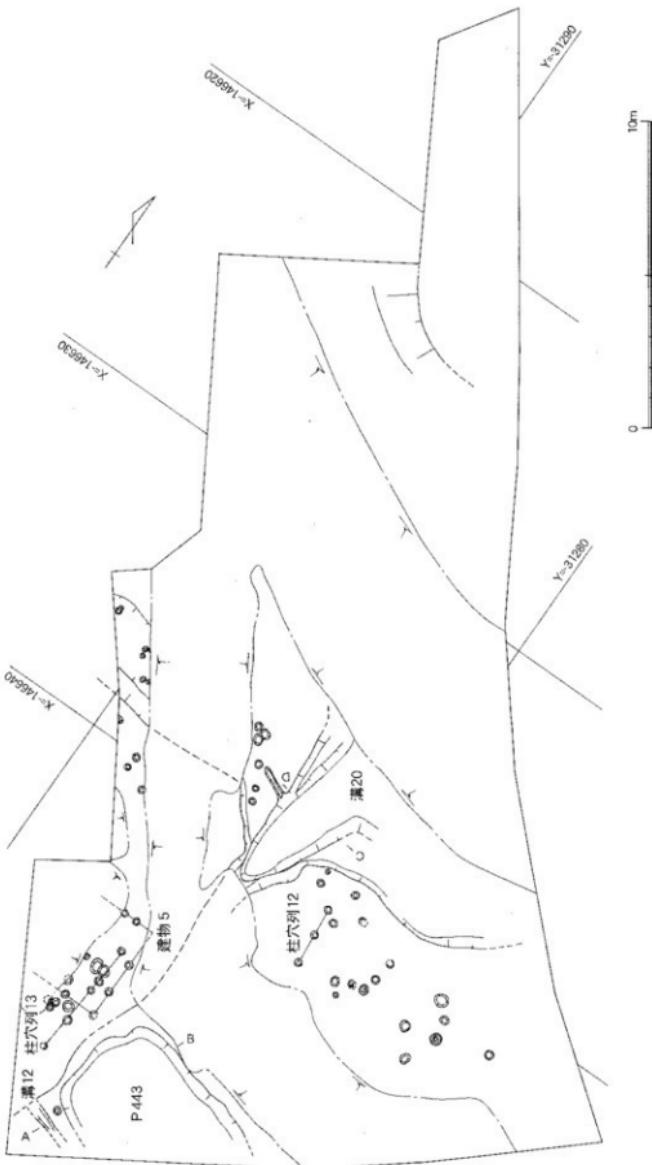


図91 III区 中世後期（15・16世紀）遺構配置図（1/160）

## 柱穴列13（図94）

建物5と重複する位置で検出された柱穴列である。軸方向はほぼ南北方向である。遺構検出面は1.1m付近で、柱穴の深さは検出面から0.2~0.4m前後である。柱穴は径0.2m前後の円形である。出土遺物は微細な土師質土器の小片が若干出土したのみである。

## P443・溝12（図95・96）

調査区の南西コーナー付近で検出された土壌とそれに平行する溝である。P443は南北方向で約4m、東西方向で5m以上の隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は0.8m付近で、最深部の深さは検出面から0.2m前後である。底面は平坦である。P443の南側に平行して検出されたのが溝12である。幅は0.4m前後で、深さは検出面から5cm前後である。

出土遺物は、P443から備前焼鉢（251・252）、溝12からは微細な土師質土器片が出土した。

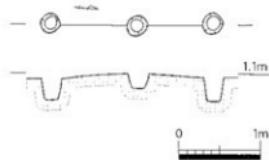


図93 柱穴列12（1/60）

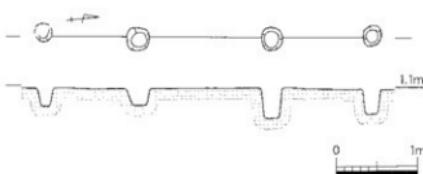


図94 柱穴列13（1/60）



図96 P443 出土遺物（1/4）

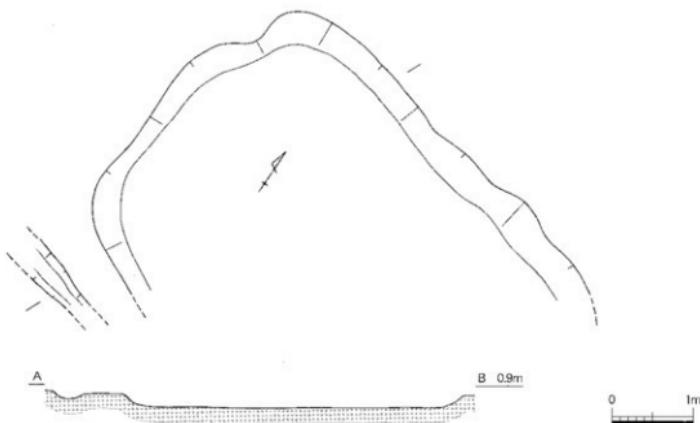


図95 P443・溝12（1/60）

## 溝20（図97～99）

調査区中央付近を大きく東側へ曲がる溝で、I区の溝6、II区の溝7の延長に相当する溝である。ただし、大半が現山手川用水によって削平されており、端々の部分を検出できただけであった。そのなかで調査区中央付近で検出された溝20から南側へ派生する支流状の部分は、P443と接続していた可能性があり、建物5の東側を画する機能を有していたことも考えられる。この部分での遺構検出面は0.9m付近で、深さは0.4m前後であるが、溝20の方に低くなっていく傾向が顕著である。支流状部分の両側は段状に低くなっているが、断片的で明確でない点が多いが、調査区の北西コーナー付近でそれに対応する傾斜が確認されることから、溝20の支流状と段状部分は建物5の位置する屋敷地の北東コーナー部分である可能性が想定される。溝20の埋土には多くの角礫が含まれており、人為的に埋められたことが考えられる。

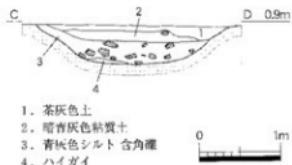


図97 溝20 (1/60)

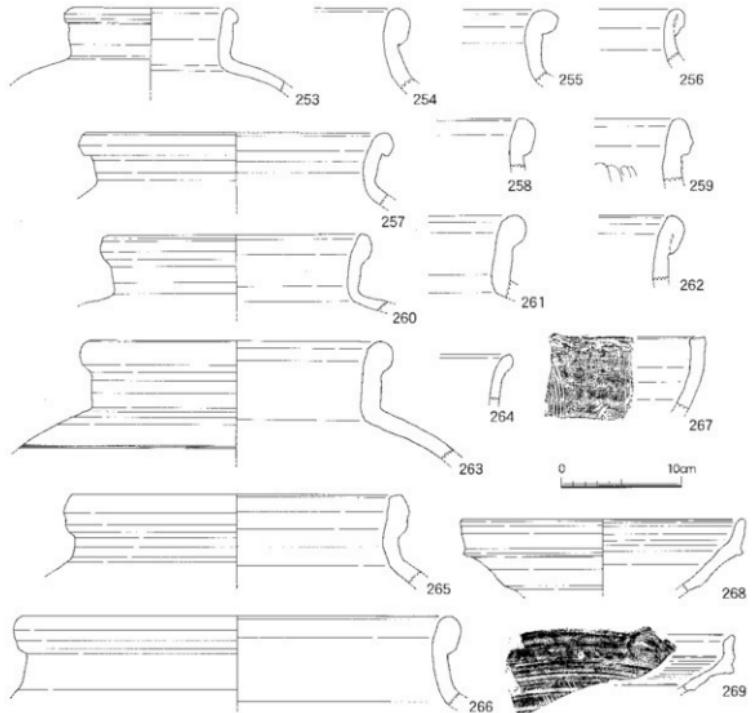


図98 溝20 出土遺物1 (1/4)

出土遺物は備前焼壺ほか(253~264)、備前焼甕(265・266)、備前焼擂鉢(267~276)、土師質土器鍋(277)、土師質土器皿(278)、青磁(279)、石鍋(S 6)である。

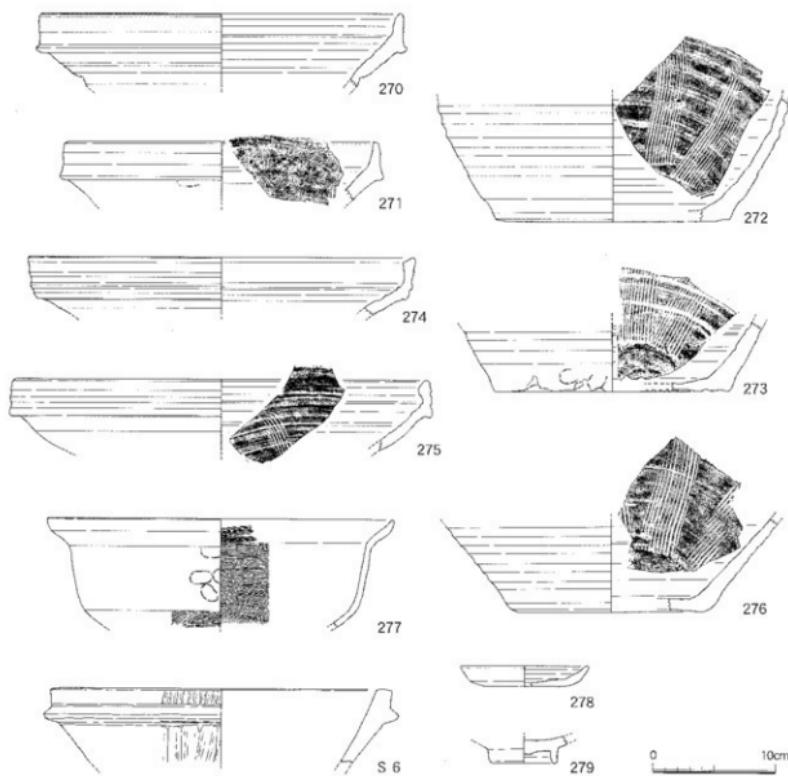


図99 溝20 出土遺物2 (1/4)

中世後期遺構面精査時出土遺物(図100)  
中世後期遺構を精査した際にも備前焼など  
の遺物が若干出土したが、銅錢も2枚(M5  
・M6)が出土した。(M5)は模鋳錢で、(M  
6)はビタ錢である。

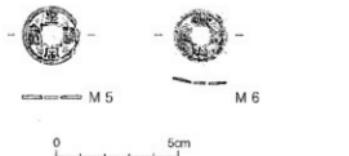


図100 中世後期遺構面 出土遺物(1/2)

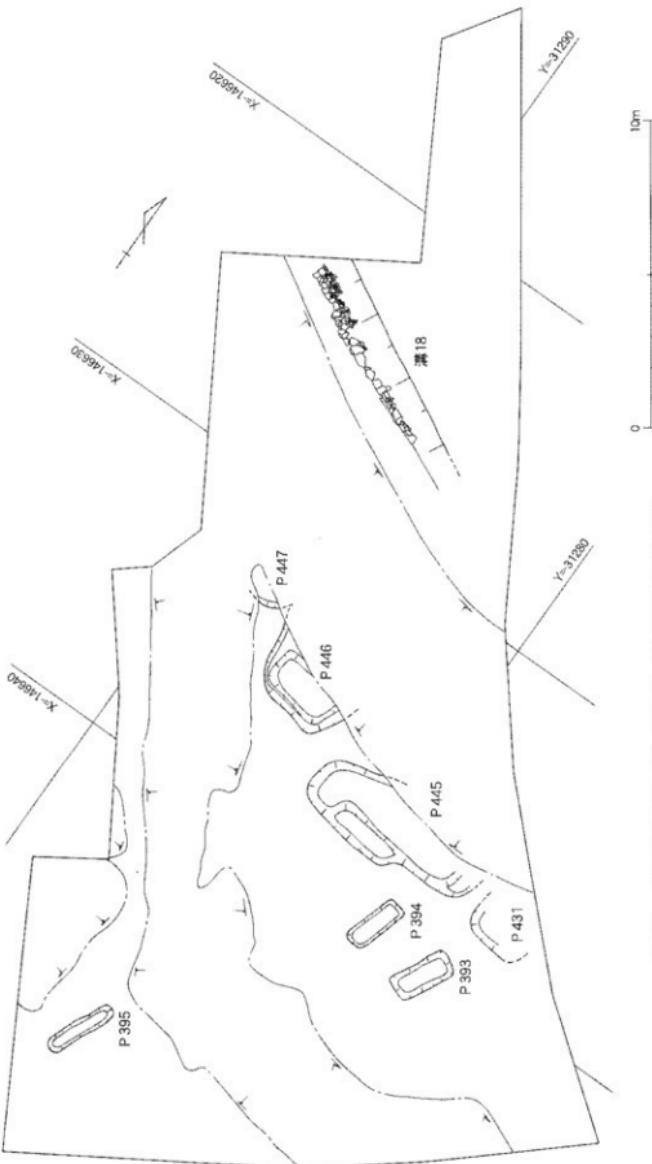


図101 Ⅲ区 近世後期(18・19世紀) 遺構配置図(1/160)

## (4) 近世後期(18・19世紀) (図101)

P393 (図102)

調査区の中央やや東側で検出された土壌で、長さ2.0m、幅0.9mの長方形を呈する平面形である。遺構検出面は1.0m付近で、深さは検出面から1.2mである。断面形はかなり壁面の傾斜が急となる台形である。遺物は陶磁器の小片が若干出土した。遺物が少ないとや、埋土にも有機物の痕跡がうかがわれないことから、いわゆるゴミ穴とは異なる性格が推測される。

P394 (図102)

調査区の中央やや東側で検出された土壌で、長さ2.0m、幅0.8mの長方形を呈する平面形である。遺構検出面は1.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形は台形である。遺物は陶磁器の小片が若干出土した。遺物が少ないとや、埋土にも有機物の痕跡がうかがわれることから、いわゆるゴミ穴とは異なる性格が推測される。

P395 (図102)

調査区の南西コーナー付近で検出された土壌で、長さ2.4m、幅0.5mの長楕円形を呈する平面形である。遺構検出面は1.1m付近で、深さは検出面から0.4mである。断面形は台形である。遺物は陶磁器の小片が若干出土した。遺物が少ないとや、埋土にも有機物の痕跡がうかがわれることから、いわゆるゴミ穴とは異なる性格が推測される。

P431 (図102)

調査区の南東部付近で検出された土壌であるが、大半を山手川用水によって削平されている。一辺が2.0mほどの隅丸方形の平面形が推定される。遺構検出面は0.9m付近で、最深部の深さは検出面から0.5m前後である。埋土の大半は細砂であることから、洪水等の砂を廃棄した可能性が推測される。遺物は陶磁器の小片が若干出土した。

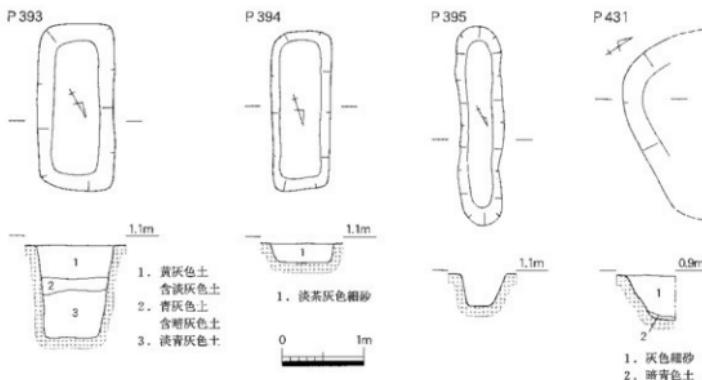


図102 P393・394・395・431 (1/60)

## P445 (図103・104)

調査区の中央で検出されたゴミ穴である。東側は若干山手川によって削平されている。長さ6.2m、幅2.2m前後の長方形の平面形で、部分的に段状となっている。遺構検出面は0.9m付近で、遺構最深部は検出面から1.4mである。底面は平坦である。埋土からは多くの陶磁器片、木片、瓦片が出土した。出土遺物は備前焼サヤ形鉢(280)、備前焼灯明皿(281・282)、土師器椀(283)である。

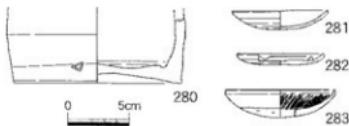


図104 P 445 出土遺物 (1 / 4)

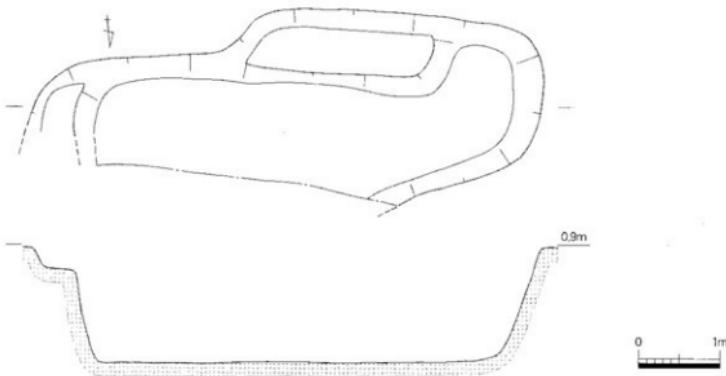


図103 P 445 (1 / 60)

## P446 (図105)

調査区の中央で検出されたゴミ穴である。東側は若干山手川用水によって削平されている。長さ3.0m、幅1.6m前後の長方形の平面形で、外周部は部分的に段状となっている。遺構検出面は0.9m付近で、遺構最深部は検出面から0.8mである。底面は平坦である。埋土からは多くの陶磁器片、木片、瓦片が出土した。

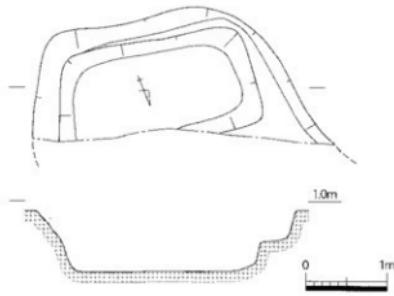


図105 P 446 (1 / 60)

## P 447 (図106・107)

調査区の中央やや西側で検出されたゴミ穴であるが、山手川や仮設溝によってほとんど削平されており、部分的に検出できただけである。遺構検出面は0.9m付近で、最深部は検出面から0.4mである。埋土からは瓦片や木片が出土した。出土遺物は備前焼灯明皿（284）が出土した。

## 溝18 (図108)

山手川用水の18・19世紀段階の流路である。Ⅲ区のなかで山手川は異なる時期の流路が錯綜しており、溝18もその1つである。溝18には単に石を置いただけの極めて簡略化した石垣が部分的に施されている。Ⅲ区の東隣には近世まで遡る民家があることから、検出された石垣はそれに関係する可能性が高い。石垣は東側には長さが0.4m前後の花崗岩の切石を用い、西側には長さが0.1m前後のこぶりの角礫を用いている。平面的にみても切石部分と角礫部分との間には不整合が認められるが、これは補修などの痕跡などではなく一連の石垣と考えられる。溝の掘り方と石垣の間には角礫を裏込めとしているが、切石部分は顯著でない。溝18の検出面は0.9m付近である。深さは検出面から0.8mである。

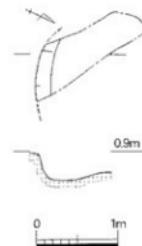


図106 P 447  
(1 / 60)

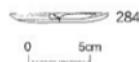


図107 P 447  
出土遺物 (1 / 4)

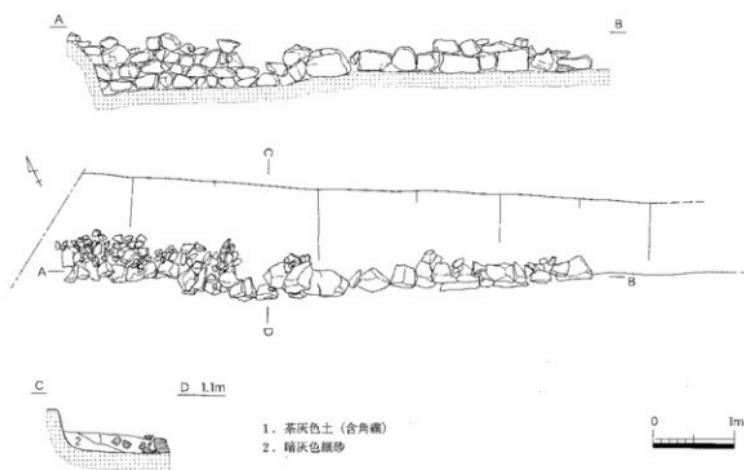


図108 溝18 実測図 (1 / 60)

## IV 出土遺物観察表

## 土 器

通 載 番 号	出 し 地 区	遺 槽	器 種	形 異 (cm)			形 異・調 整 手 法 の 特 徴	胎 土	色 調
				口 径	底 径	高			
1	I 区	P50	土師質土器純	14.4	6.2	4.8	口縁部外面ヨコナデ、外面ユビナデ、内面平滑ナデ、内面に蓋痕残あり	含長石・石英	淡褐色
2	I 区	P50	土師質土器純	13.2	8.4	4.0	口縁部外面ヨコナデ、外面ユビナデ、内面平滑ナデ	含長石・石英	淡褐色
3	I 区	P50	土師質土器純	8.9	1.2	6.2	内外面ヨコナデ、底部外側へラ切り	含長石・石英	淡褐色
4	I 区	廣1	備前焼灰				内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰褐色
5	I 区	廣1	白磁瓶	8.8			口縁部は外反し、無は透明白感のある白色		
6	I 区	廣2	備前焼攝体				内外面ヨコナデ、スリメの単位は6本削痕	含長石・石英	素褐色
7	I 区	廣2	備前焼攝体				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
8	I 区	廣2	備前焼攝鉢	26.2			内外面ヨコナデ、スリメの単位は11.9cm毎に7本	含長石・石英	素褐色
9	I 区	廣2	備前焼攝鉢	29.4			内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
10	I 区	廣2	備前焼攝体				内外面ヨコナデ、3本單位以上のスリメあり	含長石・石英	素褐色
11	I 区	廣2	瓦質鉢				内面ヨコハゲ後、口縁部近ヨコナデ、外面ナデ	含長心・石英	暗灰色
12	I 区	廣2	土師質土器皿	15.2	8.5	2.0	内面見込み付ナデ、底面外側ナデ、底辺ヨコナデ	含長石・石英	淡褐色
13	I 区	廣2	[土]質土器皿	29.4			外側指押さえ、内面ヨコハゲ後口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
14	I 区	廣6	縫前焼壺	11.6	12.8		内外面ヨコナデ、肩部附近に波状文	含長石・石英	素褐色
15	I 区	廣6	備前焼壺	14.6			内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
16	I 区	廣6	備前焼壺	10.6			内外面ヨコナデ後、外側部分的に指押さえ	含長石・石英	素褐色
17	I 区	廣6	備前焼壺				内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰褐色
18	I 区	廣6	備前焼壺				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
19	I 区	廣6	備前焼壺	11.6			内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
20	I 区	廣6	備前焼大鉢		30.0		内外面ヨコナデ、ドナナデ	含長石・石英	素褐色
21	I 区	廣6	備前焼攝体	44.6			内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
22	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
23	I 区	廣6	備前焼攝體				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
24	I 区	廣6	備前焼攝鉢	25.6	13.2	9.4	内外面ヨコナデ、スリメの単位は1.8cm毎に9本	含長石・石英	素褐色
25	I 区	廣6	備前焼攝鉢		27.6		内外面ヨコナデ、一間に指押さえ、スリメの単位は22.8cm毎に8本	含長石・石英	素褐色
26	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ後ナデ	含長石・石英	素褐色
27	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、スリメの単位は2.6cm毎に6本	含長石・石英	素褐色
28	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、ロ縁外端部に2条回転あり	含長心・石英	素褐色
29	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
30	I 区	廣6	備前焼攝鉢		11.6		内外面ヨコナデ、底部外側ナデ、スリメの単位は22.8cm毎に8本	含長石・石英	素褐色
31	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、スリメの単位は22.8cm毎に8本	含長石・石英	小素褐色
32	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、スリメの単位は22.8cm毎に8本	含長石・石英	素褐色
33	I 区	廣6	備前焼攝鉢	32.2			内外面ヨコナデ、スリメの単位は23.8cm毎に12本	含長石・石英	素褐色
34	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
35	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、外腹指押さえ	含長石・石英	素褐色
36	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、外腹指押さえ	含長石・石英	素褐色
37	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ	含長石・石英	素褐色
38	I 区	廣6	備前焼攝鉢	15.0			内外面ヨコナデ、外腹上ナデ、下ヨコナデ、スリメの単位は3.0cm毎に8本	含長石・石英	素褐色
39	I 区	廣6	備前焼攝鉢		36.4		内外面ヨコナデ、スリメの単位は12.8cm毎に8本	含長石・石英	素褐色
40	I 区	廣6	備前焼攝鉢		13.6		内外面ヨコナデ後、外側部分的に指押さえ、スリメの単位は12.8cm毎に8本	含長心・石英	素褐色
41	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ後、外側部分的に指押さえ、スリメの単位は1.7cm毎に7本以上	含長石・石英	素褐色
42	I 区	廣6	備前焼攝鉢		29.8		内外面ヨコナデ、スリメの単位は2.8cm毎に10本	含長石・石英	素褐色
43	I 区	廣6	備前焼攝鉢		12.0		内外面ヨコナデ、スリメの単位は3.8cm毎に9本	含長石・石英	素褐色
44	I 区	廣6	備前焼攝鉢				内外面ヨコナデ、底部外側ナデ	含長石・石英	素褐色
45	I 区	廣6	備前焼攝鉢		14.4		内外面ヨコナデ、外側部分的にナデ、スリメの単位は3.5cm毎に12本	含長石・石英	素褐色
46	I 区	廣6	備前焼攝鉢		33.4		内外面ヨコナデ、スリメの単位は3.2cm毎に10本	含長石・石英	素褐色

47	I 区	横6	儀の鏡柄	11.6		内外面ヨコナダ、底部外面ナダ、スリメの単位は5.6mm毎に8本	含長石・石英 茶褐色
48	I 区	横6	土師質土器	29.4		外表面ナダ、内面ヨコハケ後口縫部内外面ヨコナダ	含長石・石英 茶褐色
49	I 区	横6	+脚質土器	30.5		外表面ナダ、内面ヨコハケ後口縫部内外面ヨコナダ	含長石・石英 茶褐色
50	I 区	横6	菱形土器			内面ナダ、外周沿縁面にキザミをめぐらす	含長石・石英 茶褐色
51	I 区	横6	青磁瓶	15.0		濃緑色の彩色質の瓶	
52	I 区	横6	白磁	6.2		内面に透明質の白色釉薬	
53	I 区	横6	青磁	4.6		濃緑色の彩色質の瓶	
54	I 区	横6	白磁瓶	11.5		透明質の白色釉薬	
55	I 区	横6	白磁瓶	10.0		透明質の白色釉薬	
56	I 区	横6	染付			青花	
57	I 区	横6	土師質土器	10.2	7.1	1.7 内外面ヨコナダ、底部外面ナダ	含長石・石英・ 金雲母 褐色
58	I 区	横3	唐津焼鉢			見込みに目痕なし	
59	I 区	横3	唐津焼鉢			見込みに目痕なし	
60	I 区	横3	唐津	8.7		見込みに目痕なし	
61	I 区	横3	店津皿	4.6		灰釉で、見込みに筋目	
62	I 区	横3	青磁瓶	15.6		濃緑色の彩色質の瓶	
63	I 区	横3	備前焼瓶	10.8	6.8	2.4 内外面ヨコナダ、底面外面系切り	含長石・石英 茶褐色
64	I 区	横3	土加質土器		5.8	内外面ヨコナダ、底面外面系切り	含長石・石英・ 金雲母 茶褐色
65	I 区	横3	備前焼瓶			内外面ヨコナダ、スリメの単位は1.3mm毎に9本	含長石・石英 茶褐色
66	I 区	横3	備前焼瓶	31.0		内外面ヨコナダ、口縫外輪部に2条目痕あり	含長石・石英 茶褐色
67	I 区	近世水井	備前焼瓶	39.9		内外面ヨコナダ、口縫外輪部に2条目痕あり	含長石・石英 茶褐色
68	I 区	近世水井	備前焼瓶	14.6		内外面ヨコナダ、口縫外輪部に2条目痕あり	含長石・石英 茶褐色
69	I 区	近世水井	備前焼瓶			内外面ヨコナダ、口縫外輪部に2条目痕あり	含長石・石英 茶褐色
70	II 区	P385	菱形土器	13.0		内外面ヨコナダ、口縫部内面へラミガキ	含長石・石英・ 金雲母 褐色
71	II 区	P385	菱形土器	12.7		口縫部と瓶身の腹に段目が認められる	含長石・石英 褐色
72	II 区	P385	菱形土器			口縫部と瓶身の腹に段目が認められる	含長石・石英 褐色
73	II 区	P385	菱形土器	13.2		外面へラミガキ、内面ナダ、瓶部と瓶身の腹に低い筋が認められる	含長石・石英・ 金雲母 褐色
74	II 区	P385	菱形土器			不明	含長石・石英 金雲母 褐色
75	II 区	P385	菱形土器			口縫部瓶身のキザミをめぐらし、瓶部との腹には段目が認められる	含長石・石英 褐色
76	II 区	P385	泰用土器	15.0		内外面ナダ後へラミガキ	含長石・石英・ 金雲母 褐色
77	II 区	P385	菱形土器	13.6		口縫部と瓶身の腹に段目を意識した粒状の貼り付けがあり、内面はナダ	含長石・石英・ 金雲母 褐色
78	II 区	P385	菱形土器			口縫部と瓶身の腹に断面台形の割りだし突起があり、上部には押圧をめぐらす	含長石・石英・ 金雲母 褐色
79	II 区	P385	菱形土器	28.0		内外面ヨコナダ、口縫部のキザミ、瓶部下半にヘラ抹沈線をめぐらす	含長石・石英・ 金雲母 褐色
80	II 区	P385	菱形土器	33.8		内外面ヨコナダ、刻目をめぐらす	含長石・石英 褐色
81	II 区	P385	菱形土器			口縫部前面に刻目をめぐらす	含長石・石英 褐色
82	II 区	P385	菱形土器	17.0		内外面ナダ	含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
83	II 区	P385	底部		7.2 不明		含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
84	II 区	P385	底部		8.1 外面へラミガキ、内面ナダ		含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
85	II 区	P385	底部		9.2 内外面ナダ		含長石・石英・ 金雲母 褐色
86	II 区	P385	底部		7.8 内面ナダ		含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
87	II 区	P385	菱形土器	22.2		内外面ナダ、口縫部前面に刻目をめぐらす	含長石・石英・ 金雲母 褐色
88	II 区	P385	底部		8.5 不明		含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
89	II 区	P385	底部		7.2 不明		含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
90	II 区	横11	變形土器	22.4		内面ナダ、頭部下半にヘラ抹き模様を4条めぐらす	含長石・石英・ 金雲母 褐色
91	II 区	横11	變形土器	21.4		口縫部前面に刻目をめぐらし、頭部下半には3条のヘラ抹き模様とその間に網突文、下半はヘラミガキ	含長石・石英・ 赤色砂粒 褐色
92	II 区	横11	變形土器	18.2		外表面下へラミガキ、口縫部内外面ヨコナダ	含長石・石英・ 金雲母 褐色
93	II 区	横11	底部		5.5 外表面へラミガキ、内面ナダ		含長石・石英・金雲母 褐色

94	Ⅱ区	横11	畫形1器			輪郭と脚部の腹付近、腹にそって竹質文がめぐる	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	褐色
95	Ⅱ区	横11	畫形土箇			木質文が認められる	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	茶褐色
96	Ⅱ区	横11	畫形土器			腹の下に細いハラ趙き沈線が2条めぐる	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	褐色
97	Ⅱ区	横11	畫形土器			木質文と複斜される文様が認められる	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	茶褐色
98	Ⅱ区	豊1通量1	上部器體	12.0		口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面タキタキ、内面ヘラケズリ	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	茶褐色
99	Ⅱ区	豊1通量1	上部器體	10.7	12.5	外面部ナデ、胴部内面ヘラケズリ	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	茶褐色
100	Ⅱ区	豊1通量1	土師器蓋	14.4		1)輪郭部内外面ヨコナデ、内面ヨコハケ、内面ハケタキ	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	茶褐色
101	Ⅱ区	豊1通量1	土師器蓋	16.0	6.0	2)輪郭部内外面ヨコナデ、外面ヨコハケ、内面ハケタキ	含長石・石英・金 青田石・赤色砂粒	茶褐色
102	Ⅱ区	P 460	須恵器杯身	10.8	5.2	外面部2/3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ、内面底部近不整方向のナデ	含長石・石英	灰褐色
103	Ⅱ区	横9	須恵器杯底	13.0		外面部井戸ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
104	Ⅱ区	横9	須恵器杯身	11.2	11.2	外面部井戸2/3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ、内面底部近不整方向のナデ	含長石・石英 青田石	灰褐色
105	Ⅱ区	横9	須恵器杯蓋	13.5	6.4	外面部井戸1/2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ、内面中央付近不整方向のナデ	含長石・石英 青田石	褐色
106	Ⅱ区	横9	須恵器杯身	11.6		外面部井戸1/2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
107	Ⅱ区	横9	須恵器杯身	14.2		外面部井戸1/2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
108	Ⅱ区	横9	須恵器蓋	19.0		内面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	灰褐色
109	Ⅱ区	横9	須恵器蓋	9.8		内面ヨコナデ、胴部内面心凹タキタキ	含長石・石英 青田石	灰褐色
110	Ⅱ区	横9	土師器蓋	15.0		内面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ	含長石・石英・角 閃石・黑色砂粒	褐色
111	Ⅱ区	横9	上部器體	15.4		外面部ヘナグ、内面ヘナナデおよびヘミガキ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英・角 閃石・黑色砂粒	茶褐色
112	Ⅱ区	横9	土師器蓋		8.9	外面部ハケ、内面ヘラナデ	含長石・石英・角 閃石・黑色砂粒	茶褐色
113	Ⅱ区	横9	上部器體	29.4	9.1	28.8 外面部ヨコガキ、内面ナデ	含長石・石英 青田石	褐色
114	Ⅱ区	横9	てずくね	4.4	2.8	内外面ナデ	含長石・石英 青田石	褐色
115	Ⅱ区	横7	備前燒壺	27.8		内外面ヨコナデ	含長石・石英	褐色
116	Ⅱ区	横7	備前燒壺			内外面ヨコナデ	含長石・石英	褐色
117	Ⅱ区	横7	備前燒壺			内外面ヨコナデ	含長石・石英	褐色
118	Ⅱ区	横7	備前燒壺	31.1		内外面ヨコナデ	含長石・石英	褐色
119	Ⅱ区	横7	備前燒壺	31.4		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
120	Ⅱ区	横7	備前燒壺	22.8		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
121	Ⅱ区	横7	備前燒壺	16.0		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
122	Ⅱ区	横7	備前燒壺	16.5		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
123	Ⅱ区	横7	備前燒壺	22.4		内外面ヨコナデ	含長石・石英	褐色
124	Ⅱ区	横7	備前燒壺	14.7		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
125	Ⅱ区	横7	備前燒壺			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
126	Ⅱ区	横7	備前燒壺	15.2		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
127	Ⅱ区	横7	備前燒口縁部			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
128	Ⅱ区	横7	備前燒口縁部			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	灰褐色
129	Ⅱ区	横7	備前燒口縁部			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
130	Ⅱ区	横7	備前燒壺			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
131	Ⅱ区	横7	備前燒壺			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	灰白色
132	Ⅱ区	横7	備前燒壺	21.5		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
133	Ⅱ区	横7	備前燒壺	15.6		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
134	Ⅱ区	横7	備前燒口縁部			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
135	Ⅱ区	横7	備前燒口縁部	13.2		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
136	Ⅱ区	横7	備前燒壺			内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
137	Ⅱ区	横7	備前燒小壺		7.4	内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
138	Ⅱ区	横7	備前燒小壺		5.8	高脚外撇各切り、ほかはヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色
139	Ⅱ区	横7	備前燒捲棒	20.4	8.0	14.2 内外面ヨコナデ、内面ヨコ方向のスリメ	含長石・石英 青田石	褐色
140	Ⅱ区	横7	備前燒捲棒	28.4		内外面ヨコナデ、スリメは8本	含長石・石英 青田石	褐色
141	Ⅱ区	横7	備前燒捲棒	31.2		内外面ヨコナデ	含長石・石英 青田石	褐色

142	II 区	漁7	偏前船底	13.4	内外面ヨコナデ	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
143	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは4本以上	含長石・石英 茶褐色
144	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは4本以上	含長石・石英 茶褐色
145	II 区	漁7	偏前後船体	27.0	内外面ヨコナデ、スリメは6本	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
146	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは3本以上	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
147	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは5本	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
148	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは6本	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
149	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは8本以上	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
150	II 区	漁7	偏前後船体		内外面ヨコナデ、スリメは10本以上	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
151	II 区	漁7	偏前後船体	31.6	内外面ヨコナデ	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
152	II 区	漁7	偏前後船体		11.9 内外面ヨコナデ、スリメは5本以上	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
153	II 区	漁7	偏前後船体		17.0 内外面ヨコナデ、スリメは6本	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
154	II 区	漁7	偏前後船体		14.7 内外面ヨコナデ、スリメは5本	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
155	II 区	漁7	偏前後船体		15.5 内外面ヨコナデ、スリメは7本	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
156	II 区	漁7	青緑綱	4.8	淡緑色の鉛色質の触葉	
157	II 区	漁7	青緑綱	6.7	淡緑色の鉛色質の触葉	
158	II 区	漁7	青緑綱	7.9	淡緑色の鉛色質の触葉	
159	II 区	漁7	土師質土器類	17.8	外表面タマガキ、内面ヨコハケ後ヨコミカキ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英 浮雲
160	II 区	漁7	土師質土器類	22.2	内面ハケ、ほかはヨコナデ	含長石・石英 根灰色
161	II 区	漁7	土師質土器類	28.9	外表面ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
162	II 区	漁7	土師質土器類	11.3	3.1 口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外腹下平指押さえ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
163	II 区	漁7	土師質土器類	11.8	2.7 口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外腹下平指押さえ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
164	II 区	漁7	土師質土器類	12.0	2.8 口縁部内外面ヨコナデ、ほかはナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
165	II 区	漁7	土師質土器類	11.6	2.0 内外面ヨコナデ、底部外腹ナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
166	II 区	漁7	土師質土器類	6.5	1.3 4.2 内外面ヨコナデ、底部外腹ヘラ切り	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
167	II 区	漁7	土師質土器類	23.0	内外面ヨコナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
168	II 区	漁8	偏前後船体	22.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
169	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
170	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 赤褐色・根灰色 浮雲
171	II 区	漁8	偏前後船体	19.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英 含長石・石英 茶褐色
172	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
173	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
174	II 区	漁8	偏前後船体		偏前後船体	含長石・石英 茶褐色
175	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
176	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
177	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
178	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
179	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
180	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
181	II 区	漁8	偏前後船体		内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
182	II 区	漁8	偏前後船体	16.0	内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色
183	II 区	漁8	偏前後船体		偏前後口縁部	内外面ヨコナデ
184	II 区	漁8	偏前後船体		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
185	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	内外面ヨコナデ
186	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
187	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
188	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
189	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
190	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
191	II 区	漁8	偏前後口縁部		偏前後口縁部	含長石・石英 茶褐色
192	II 区	漁8	土師質土器類	31.0	外表面タマガキ後指ナデ、内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英 茶褐色

193	Ⅱ区	清8	土師質土器類	30.0		外面タテハケ後押ナデ、内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、黄色 内見石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
194	Ⅱ区	清8	土師質土器類	25.4		外面下ナデ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、黄色 内見石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
195	Ⅱ区	清8	土師質土器類	13.6		口縁部内外面ヨコナデ、ほかはナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
196	Ⅱ区	唐8	七郎費土器類		4.3	内面ナデ、山谷部ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
197	Ⅱ区	唐8	土師質土器類	8.4	1.0	内外面ヨコナデ、底部外面糸切り	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
198	Ⅱ区	唐8	土師質土器類	11.4	3.3	口縁部内外面ヨコナデ、ほかはナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
199	Ⅱ区	清8	土師質土器類	11.0		口縁部内外面ヨコナデ、ほかはナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
200	Ⅱ区	清8	縦輪陶器類	15.1					
201	Ⅱ区	清8	青磁瓶	13.2		青緑色の胎色質の釉面			
202	Ⅱ区	清8	灰釉陶器類		8.3	黒市90号式式か			
203	Ⅱ区	清8	青磁瓶		6.1	青緑色の胎色質の釉面			
204	Ⅱ区	中古青磁	青磁瓶	12.4		青緑色の胎色質の釉面、經年変化			
205	Ⅱ区	中古青磁	青磁瓶			青緑色の胎色質の釉面			
206	Ⅱ区	中古青磁	白磁皿		5.2	内面に胎色質の白色粉墨			
207	Ⅱ区	中古青磁	青磁瓶			青緑色の胎色質の釉面、經年変化			
208	Ⅱ区	中古青磁	青磁碗		4.6	青緑色の胎色質の釉面			
209	Ⅱ区	中古青磁	灰釉陶器類			灰釉陶器類			
210	Ⅱ区	唐2	備前焼灰釉		29.1	外面ナデ底部無地や上半まで盛土、内面ナデ、一部工具ナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
211	Ⅱ区	唐2	伊万里直大瓶	46.6	10.0	14.2	口縁部に唐草文をめぐらし山水画を描く。高台形目		
212	Ⅱ区	唐2	備前焼灰釉		13.8	内外面ヨコナデ、スリメは6本	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
213	Ⅱ区	唐2	備前焼灰釉		11.2	内外面ヨコナデ、スリメは12本	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
214	Ⅱ区	唐2	瓦質瓶	29.4	9.5	口縁部内外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面陶器ハケメ後ナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
215	Ⅱ区	唐2	伊万里直いひみ	9.7	6.2	透明釉で内面は無地、外様に片口原(葉瓣青)葵花	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
216	Ⅱ区	唐3	土師質土器類	14.8		外面上半ナデ、下部ハケ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコハケ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
217	Ⅱ区	P364	備前焼甕	25.6		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
218	Ⅱ区	P364	瓦質瓶	26.6		外面一部にラミガキ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
219	Ⅱ区	P364	備前焼瓶	9.4	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面糸切り	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
220	Ⅱ区	近世漆器類	楕円天日皿	12.1		刷毛で高台と柄には模なし			
221	Ⅱ区	近世漆器類	唐津焼皿	12.9	2.8	4.1	底種で高台と柄には模なし、見込みには模十目		
222	Ⅱ区	近世漆器類	伊万里焼碗		4.5	透明釉で高台は無地、文様は疾須(葉青)			
223	Ⅱ区	近世漆器類	伊万里直いひみ	6.5	4.8	3.0	透明釉で高台は無地、割り目による文様		
224	Ⅱ区	近世漆器類	土師質土器皿	14.8	2.7	8.8	外面ヨコナデ、瓦質外面ナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色
225	Ⅲ区	P459	直形土器			外面ハケタマガキ、貼り付け突帯の上部に棒状浮文、 内面ハケ後ヨコハケとガタ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
226	Ⅲ区	P459	瓶		9.0	外面ハラミガキ、内面ナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
227	Ⅲ区	井戸1	土師器類	18.4		外因タテケ後一箇ヨコナデ、部分ナデナデ、 内面ハラタケナリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
228	Ⅲ区	井戸1	上部器裏			外因ハケ、内面ハラケナリおよび指押さえ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
229	Ⅲ区	井戸2	上部器裏	13.9	19.0	外因ハケ、内面ハラケナリ、底部付沿指押さえ、 口縁部ヨカヨカ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
230	Ⅲ区	井戸2	十郎源魔	13.4	21.4	外因ハラナダ(諸か一小單位のハケ)、後頭部以下ナデ、 内面ハラタケナリ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
231	Ⅲ区	井戸2	十郎源魔	18.0	22.8	外因ハラナダ(諸か一小單位のハケ)、内面ハラタケナリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
232	Ⅲ区	井戸3	土師器類	12.3	10.5	外因ハラナダ、内面ハラタケナリ、内面ハラケナリ、 底部付沿指押さえ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
233	Ⅲ区	井戸3	上部器裏	14.7	22.6	外因ハラナダ(諸か一小單位のハケ)、内面ハラタケナリ、 内面ハラケナリ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
234	Ⅲ区	井戸3	土師器類	15.0	26.0	外因ハラナダ(諸か一小單位のハケ)、内面ハラタケナリ、底部付沿指押さえ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
235	Ⅲ区	井戸3	上部器裏	18.9		口縁部内外面ヨコナデ、頬部内因指押さえ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
236	Ⅲ区	井戸3	土師器類	14.0		口縁部内外面ヨコナデ、頬部内因ハラケナリ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
237	Ⅲ区	井戸3	土師器焼	15.1		口縁部内外面ヨコナデ、頬部内外面ナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
238	Ⅲ区	井戸3	土師器焼			外因ハケ、内面ハラケナリ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	
239	Ⅲ区	井戸3	土師器壺	10.9		胴岸外因タテハラミガキ、内面ナデ、口縁部内外ハケ後内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐灰色	

240	Ⅲ区	井戸3	土師器高杯	19.6	内外面ヨコナデ、鶴村付近ハケ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
241	Ⅲ区	井戸3	土師器高杯	12.3	内面沿部一部にハケ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
242	Ⅲ区	井戸3	土師器高杯	17.3	外面タテハケ後ヨコナデ、内面1半ヨコハケト半ナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
243	Ⅲ区	井戸3	土師器高杯	11.9	内面沿部一部にハケ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
244	Ⅲ区	井戸3	土師器高杯	11.8	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
245	Ⅲ区	康15	高柄埴土器	12.2	外蓋タテヘラミガキ、内面ナデ、底面内外面ヘラミガキ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
246	Ⅲ区	清16	土師器兜	15.6	内外面ヨコナデ、鶴村内面ヘラケズリ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
247	Ⅲ区	清17	土師器兜	14.6	内外面ヨコナデ、鶴村内面ヘラケズリ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
248	Ⅲ区	清17	上部器底	12.8	外蓋下ヘラケズリ、上半ハケ、内面ヘラミガキ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
249	Ⅲ区	清17	塑形土器		内外面ナデ、瓶底以下ヘラズズ文	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
250	Ⅲ区	清17	土師器兜		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
251	Ⅲ区	P443	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
252	Ⅳ区	P443	備前焼模		内外面ヨコナデ、スリメは2本	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
253	Ⅳ区	清20	備前焼模	12.5	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
254	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
255	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
256	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
257	Ⅳ区	清20	備前焼模	24.0	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
258	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
259	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
260	Ⅳ区	清20	備前焼模	20.4	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
261	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
262	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
263	Ⅳ区	清20	備前焼模	24.0	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
264	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
265	Ⅳ区	清20	備前焼模	27.0	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
266	Ⅳ区	清20	備前焼模	35.1	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
267	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ、スリメは5本以上	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
268	Ⅳ区	清20	備前焼模	23.0	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
269	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ、スリメは2本	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
270	Ⅳ区	清20	備前焼模	29.4	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
271	Ⅳ区	清20	備前焼模	35.0	内外面ヨコナデ、スリメは2本以上	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
272	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ、スリメは11本	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
273	Ⅳ区	清20	備前焼模		内外面ヨコナデ、スリメは12本	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
274	Ⅳ区	清20	備前焼模	31.4	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
275	Ⅳ区	清20	備前焼模	33.6	内外面ヨコナデ、スリメは12本	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
276	Ⅳ区	清20	備前焼模	15.3	内外面ヨコナデ、スリメは11本	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
277	Ⅳ区	清20	土師質工具	28.0	外面上半ナデ、下半ハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
278	Ⅳ区	清20	土師質工具	10.4	内外面ヨコナデ、底部外縫糸切り	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
279	Ⅳ区	清20	青鉢	5.1	濃緑色の動色質の跡	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
280	Ⅳ区	P445	備前焼サヤ形鉢	13.7	内外面ヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色	
281	Ⅳ区	P445	備前焼明里	7.7	1.6	底部外面ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色
282	Ⅳ区	P445	備前焼明里	7.0	0.9	底部外面ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色
283	Ⅳ区	P445	土師器	8.8		底部外面ヘラケズリ、内外面ヨコナデ、内面縞文	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色
284	Ⅳ区	P447	備前焼明里	8.0	0.8	底部外面ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英、 赤色砂粒、盤面 含長石・石英、 赤色砂粒	褐色

## 金属製品：M

掲載番号	出土地区	遺構	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M 1	I 区	溝 2	釘	49.0	5.0	5.0	2.93	鉄	
M 2	I 区	溝 6	鍔 先	259.0	上119.0 下112.0	4.6	520.23	鉄	
M 3	I 区	溝 6	鍔	169.5	156.0	2.0	56.37	鉄	
M 4	II 区	溝 9	？	34.0	34.0	7.0	10.41	鉄	
M 5	III 区	中世後期遺構面	銅 銭				2.55	銅	模鋳錢、皇宋通宝
M 6	III 区	中世後期遺構面	銅 銭				1.51	銅	ビタ銭

## 石製品：S

掲載番号	出土地区	遺構	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S 1	I 区	溝 2	石 磨	28.8	21.0	2.8	2.83	サヌカイト	
S 2	I 区	溝 6	砥 石	116.5	52.5	30.5	288.34	凝灰岩？	
S 3	II 区	溝 9	石 鍤	60.5	74.5	50.5	342.02	花崗岩	
S 4	II 区	溝 7	スクレイパー	62.5	55.0	10.5	49.79	サヌカイト	
S 5	II 区	溝 7	砥 石	116.0	35.0	14.0	117.56	？	
S 6	III 区	溝 20	石 鍤	口径 26.3	最大径 29.1	現存長 111.6		滑 石	

## 木製品：W

掲載番号	出土地区	遺構	器種	計測値 (mm)			樹種	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
W 1	I 区	溝 6	下 駄	179.0	66.0	44.0		板目
W 2	I 区	溝 6	部材？	161.0	上59.0 下34.5	12.0		板目
W 3	II 区	溝 7	下 駄	200.0	64.0	42.0		板目
W 4	II 区	溝 7	部材？	183.0	79.0	28.0		板目

## 土製品：C

掲載番号	出土地区	遺構	器種	計測値 (mm)			色調	胎 土
				最大長	最大幅	最大厚		
C 1	II 区	溝 9	獸形土製品	95.0	37.5	2.85	淡黃灰色	0.2~2mm位の長石・石英・角閃石多

## 骨角製品：B

掲載番号	出土地区	遺構	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	素材	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
B 1	III 区	井戸 3	不明	127.0	23.5	19.0	(24.52)	鹿 角	木製品

## 第Ⅳ章 結語

### I 東岡山遺跡の構成

#### 1. 周辺微地形

東岡山遺跡は、旭川東岸に広がる広大な沖積平野の中央に位置する微高地上に形成されている。まず、今回の調査区がその微高地のどの部分に相当するのかという点を確認したいと思う。

東岡山遺跡の調査成果からすると、調査区の微高地には2種類ある。第1はⅡ区やⅢ区で、弥生時代以来の遺構が認められる形成時期の古い強固な微高地である。この微高地は、現水田のレベル高の比高差や水路の形状から、北西方向から南東方向に紡錘形の平面形に広がる。長軸で600m、短軸100mほどの範囲が想定される（図109）。Ⅱ区やⅢ区は、その微高地の南東端部に位置するということになる。両調査区からは、弥生時代から古墳時代の時期の井戸や土壙なども検出されているが、微高地外縁部の形状に沿うような方向性をもった小溝が幾つも認められ、これは微高地周囲に広がる水田への給水や排水を目的とした水路と考えられる。このことは、今回の調査地点が微高地端部に位置することを示しているといえる。



図109 東岡山遺跡の周辺微地形（1/10,000）

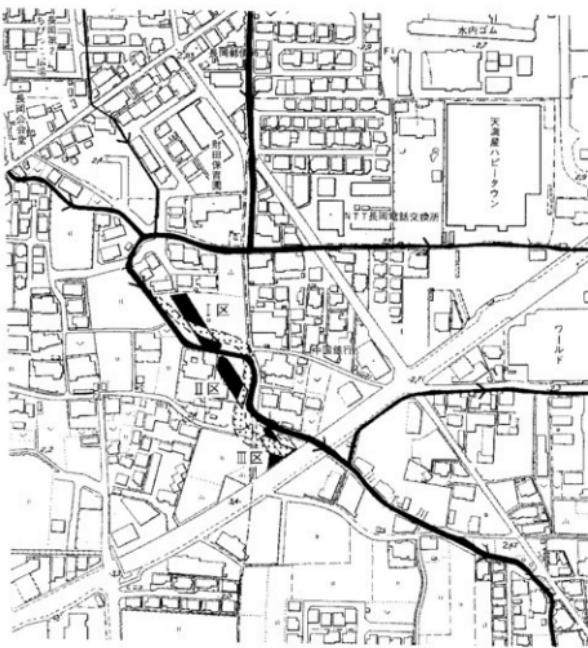


図110 山手川用水の変遷

第2は強固な微高地の縁辺で、洪水等の砂の堆積によって新たに形成された微高地である。I区が相当する。基盤層に遺物が含まれていなかったため直接的な根拠はないが、13世紀中葉以前の遺構が認められないことから、該期に近い時期に形成されたと推測される。II区やIII区で検出された微高地の周囲には、I区のような新しい微高地がI区のほかにも存在しているものと思われる。

次に水田地割についてみてみたい。旭川の東岸には一面的な沖積平野が広がっており、そこには正方位の条理地割が広汎に分布している。ただし、II区やIII区のような強固な微高地には、地形の方向に即した地割が分布する。また、河川の氾濫原に相当する低位部も同様である。ただし、後者については元来条理地割が施行されていなかった場合と、施行された後に消滅した場合がある。現況でみられるの水田地割の分布と水田開発の時期との関係については、後で触れてみたい。

東岡山遺跡は、基本的には条理地割のなかに位置する。ただし、今回の調査区以西には、強固な微高地が続いていることや、別の強固な微高地（乙多見遺跡）も隣接することから、かなりの部分が微高地の地形に即した地割となっている。また、II区とIII区の間の条理地割の一部でもある南北方向の

道路は、それ以西を旧長原村、以東を旧下村に分ける村境となっている。近世の集落はⅡ区だけですか検出されていないことから、今回の調査は近世だけに限定するならば、旧長原村の一部に相当することになる。

## 2. 遺構の変遷

ここでは、各調査区で検出された遺構を時期ごとに整理して、調査区全体の遺構の変遷を概観する。ただし、設定する各小期の時期幅にはばらつきがある。その前提で、一応Ⅰ～Ⅳ期の4小期に分ける。

### Ⅰ期（弥生時代前期～古墳時代後期）

Ⅱ区とⅢ区の微高地上に遺構が形成される。それらは弥生時代前期（Ⅰa期）、古墳時代前期（Ⅰb期）、古墳時代後期（Ⅰc期）である。いずれの時期も微高地縁辺であることを窺わせるように、南北方向に緩やかな円弧状を描いた方向性を有する溝が検出されている。溝以外には土壙、井戸、竪穴住居が検出されている。Ⅰa期Ⅱ区で検出されたP385は断面形が袋状になる貯蔵穴で、前期前半の時期まで遡る。Ⅰb期のⅢ区で検出された井戸は3基あり、いずれも完形、もしくは完形に近い形態の壺形土器が出土している。器表面には煤が顕著に付着しており、煮沸に用いた後に井戸の中へ投棄されたものである。その土器は井戸底付近からまとまって出土していることから、投棄以降に井戸が廃絶しているといえ、井戸廃絶の際の儀礼に伴うものと考えられる。ただし、その儀礼が井戸そのものに関するものであるのか、それとも井戸廃絶そのものも何らかの儀礼に伴うものであるのかは明確ではない。また、これらの井戸から出土した土器は、基本的には同じ土器型式に属するが、口縁端部や僅かなプロポーションの相違から若干時期差を認めることができる。そのことから井戸1→井戸2→井戸3の順の時期変遷が想定され、それらの井戸の位置をみると、徐々に東側の微高地外の方向へ移動している傾向がうかがわれる。それは集落域の拡大、もしくは主体となっている住居の移動に伴って井戸の位置も東に移動したことが推測される。これらの井戸や溝以外に遺構が検出されなかつたことや、該期の遺物が極めて少ないとからも、小規模な集落がある程度継続的に存在していた可能性が高い。このほかⅡ区からは、竪穴住居が検出されているが、これはⅢ区で検出された井戸の時期よりも古い。さらにⅡ区からは、Ⅰc期の遺構や遺物が多い。ただし調査区が微高地縁辺であるため、検出された遺構は溝やピットだけであるが、調査区の西側に広がる微高地中心部には該期の比較的大きな集落が存在していると推測される。このほかⅡ区からは縄文陶器や灰陶陶器の破片も出土しており、今回は明確な遺構が存在しなかったために時期を設定しなかったが、奈良時代から平安時代の遺構面も微高地上には存在している可能性があるといえる。

### Ⅱ期（中世前期：13世紀中葉）

Ⅱ区やⅢ区では、遺構や遺物が引き続き認められるが、微高地の縁辺に形成された新たな微高地上に位置するⅠ区にも遺構が形成される。しかし、Ⅰ区からは柱穴などは検出されていないことから、集落域になったとは言い難い。Ⅰ～Ⅲ区の調査区全体が集落域になるのは、次のⅢ期になってからである。Ⅱ期からⅢ期にかけての集落の変化は、そのまま中世から近世の集落の変遷過程を示しており、この点については重要な問題を含んでいることから、後でもう少し詳細にふれることにする。

### Ⅲ期（中世後期から近世初頭：14世紀後半～17世紀前半）

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区全体に遺構が形成される。その発期となる契機は、調査区に沿うような方向で南北に蛇行して流れる幅4～5mの溝の掘削である。この溝は、その方向性から現在も調査区の縁辺や一部

横切って流れている用水路（山手川用水）の旧流路と考えられる。この用水路の開発時期である14世紀後半以降、調査区内だけで、I区、II区、III区のそれぞれ1単位づつ3単位の集落が認められる。ただし、I区とIII区の集落は14世紀後半以降に形成されたが、II区の集落はより古い段階から存在していた集落が継続しているものである。それぞれの集落は溝で区画されており、各集落の自立的な性格もうかがわれる。17世紀前葉になると、3つの集落のうち、14世紀後半以降に形成されたII区とIII区の2つの集落は廃絶し、II区の集落のみ存続する。しかも極めて多くの柱穴が認められるようになる。これは近世初頭における集落の再編を示していると評価でき、この点については後でもう少し詳細に整理することにする。

#### IV期（18・19世紀）

I区は水田化されており、集落に関する遺構は全く検出されない。II区とIII区からは柱穴等は検出されていないが、ゴミ穴が検出されている。この時期になると、掘立柱建物が一般集落の住居からも認められなくなり、その一方で屋敷地内の住居以外の部分はゴミ穴に利用される場合が多い。したがって、II区とIII区は該期の屋敷地の一部であったといえる。II区とIII区は、旧長原村の集落域に含まれており、旧長原村の景観がこの期まで遡るものといえる。また、この期の集落はIII期におけるII区の集落の延長であり、III区はその範囲が拡大した部分に相当する。つまり近世から近代における長原村の村落景観は、17世紀前半に成立したものといえる。

## II 中世から近世初頭にかけての集落変遷の画期点

### 1. 時間軸の基本となる備前焼の分類

東岡山遺跡の発掘調査では、中世から近世にかけての集落の変遷を連続的にとらえることができた。ここでは、より詳細な変遷過程を整理し、当地における中世後期から近世にかけての集落変遷の1つのパターンを明らかにしたい。その前提として、時間軸の基準となる土器の変遷、とりわけ備前焼の変遷を中心に概観したいと思う。

中世前期は高台付の土師質土器碗が普遍的に出土し、しかもその時期変化が法量の変化をメルクマールとすると、時期が下るにしたがい段階的に縮小することから、その変化が小刻みであるため遺構の変遷を整理するための極めて良好な手がかりとなる。しかし14世紀後半以降は、この碗は皿の1器種となってしまう。そのため、該期以降は出土する頻度が飛躍的に増していき、かつその編年体系が完成している備前焼が遺構の変遷を整理するための手がかりとなる。東岡山遺跡で最も多く出土した土器類も備前焼である。

さて備前焼に関する編年研究は、間壁忠彦・間壁農子（間壁1966・1966・1968・1984）によって確立された。その後、伊藤見（伊藤1987）、平井泰男（平井1984）、乗岡実（乗岡2000・2000）重根弘和（重根2002）の各氏によって新たな資料を含めた追記、および細分編年がおこなわれている。各氏の作業手法や論点を整理して、相対的な時期設定をおこなった後に実年代への比定をするべきではあるが、集落変遷の過程をよりシンプルに示したいことから、かなり強引ではあるが備前焼の変遷を直に実年代に沿って説明したい。したがって想定する1つの時期幅については、現在の編年研究の到達点に比べるとかなり幅広いものといえる。また、同時期の資料として扱う場合は、発掘調査による窯跡出土資料が理想であるのは言うまでもない。しかし、そのような資料は現況では極めて限定期であることから、集落や城跡などの消費地において比較的短期間に廃棄されたと推測される資料からも同時に

期の備前焼の器種構成や特徴をうかがうことにする。ただ、14世紀後半までは備前焼の出土頻度は少なく、内容についても不明な点が多い。したがってその時期までの備前焼については若干触れる程度で、実際の時期決定についてはまだ器種として存在している土師質土器碗を用いることにする。以下、東岡山遺跡に関する時期の備前焼の変遷を概観する。

### 13世紀後半

この時期は、土師質土器碗が存在している。備前焼は間壁編年のⅡ期に相当する。広島県の草戸千軒遺跡のS G2741（草戸千軒遺跡調査研究所編1994）から壺・甕・擂鉢がセットになって出土している。いずれも須恵器の焼成で、擂鉢の口縁部はほとんど肥厚せず、端部も断面方形におさめる（擂鉢A）。壺は口縁端部を僅かに外方に拡張させた形状である。甕は口縁端部を若干巻き込み気味におさめる。

### 14世紀前半・後半

この時期は、土師質土器碗の消失期に相当する。土師質土器碗の変遷は、高台付碗と高台の消失した碗（草戸千軒遺跡における碗A）が共伴する段階（a）、高台付碗と高台付碗と高台の消失した碗と無高台で底部中心部を内側に押した碗（草戸千軒遺跡における碗C）が共伴する段階（b）、高台付碗が消失する段階（c）の3段階が想定される。ただし、備前・備中地域については、この時期変遷は草戸千軒遺跡よりも短い可能性がある。さて、この時期の備前焼は間壁編年のⅢ期に相当する。それまでの須恵器一辺倒の焼成から焼き締めがすんだ茶褐色の色調を呈する、いわゆる備前焼独特のものが認められるようになる。この期の窯であるグイビ窯の資料には、灰色の須恵器のものと茶褐色のものとがあり、前者の形態が13世紀後半に近く、後者が15世紀のもと共通する部分が多いことから、それらの特徴を時期差とする見方がある（鎌木1978）。ここでも基本的にはそれにしたがっている。ただ将来的に資料が増加すると、両者の比率差が時期差に対応する可能性も推測される。

14世紀中葉前後の資料であるが、草戸千軒遺跡S K 4010（草戸千軒遺跡調査研究所編1995）は、口縁端部が若干巻き込み気味ながらも玉縁にならない壺と口縁端部が拡張しない断面方形の擂鉢がセットになっており、想定される14世紀前半の様相といえる。同じく14世紀中葉前後の微妙な時期であるが、草戸千軒遺跡S G 3060（草戸千軒遺跡調査研究所編1995）では、口縁端部内側が強くナデされることによりや内側に尖り気味の断面形となった擂鉢（擂鉢B）と玉縁の口縁部をもった壺や甕がセットになっており、想定される14世紀後半の様相といえる。岡山市伊福国定前遺跡溝2（杉山ほか1998）も14世紀中葉前後と考えられる時期であるが、備前焼は草戸千軒遺跡S G 3060と同じ様相である。いずれの資料も14世紀中葉前後の時期で、共伴する土師器についてはほとんど同じであることから、14世紀前半と後半の様相を明確に分離して示しているとはいえない。しかし、遺構ごとに古相と新相とが分けられることは、14世紀中葉前後を境に備前焼の変化点があることを示しているとも解釈され、一応古相の内容を14世紀前半、新相の内容を14世紀後半とする。

### 15世紀前半

まず擂鉢は口縁部外端部下半にヨコナデを強く施すことにより、断面形が若干両側に拡張したように入れる擂鉢Cと、口縁端部内側を上方に拡張することを意識した擂鉢Dが伴うようになる。備前市山崎古窯跡の窯体第3床面からは擂鉢A・B・Cが出土し、擂鉢Dが伴っていない（重根2002）。一方、この期の典型と考えられる香川県水ノ子岩海揚がりの土器群のなかには、擂鉢Aが含まれていない。この点を時期差とすると、山崎古窯跡の方が水ノ子岩海揚がり土器群よりもやや先行する時期が

考えられ、前者を14世紀末から15世紀初頭、後者を15世紀前半に位置づけられる。壺や壺については、口縁端部を巻き込んで玉縁をつくっている。壺は頸部が直立するものと、やや外開き気味に立ち上がるものがある。この傾向は14世紀後半から認められる。肩部の施文は直線文と波状文で、両者の組み合わせもしくは直線文だけのパターンである。この期は間壁編年のⅣ期Aに相当する。文安元年（1444）銘の四耳壺が実年代の一端を示している（葛原1998）。

15世紀に入ると、備前焼を出土する遺跡が大幅に増加する。とくに倉敷市曾原天王山遺跡（伊藤ほか1980）、岡山市すぐり山遺跡（草原1999）などで明らかとなっているように、骨蔵器として用いられた例が多い。これは一般民衆クラスにまで火葬の風習が拡散したことによる。それらが集團墓地を形成していることから、結果として多くの備前焼が集積されたことによる。さらに集落や城館、寺院などからも量的にまとまって出土するようになる。それは貯蔵性に優れた機能性を評価されたということもあるが、おそらく本格的な広域流通物として扱われる商品になったことが大きな要因であったと思われる。

#### 15世紀後半

擂鉢は、擂鉢B・Cはなくなり、擂鉢Dも口縁端部がより上方へ拡張するようになる。壺は、口縁部の玉縁には縮小傾向が認められ、肩部の施文も波状文が主体となる。また、胴部最大径は上方に移動する傾向がある。壺は、口縁部の玉縁が縱方向に間延びした形態となり、さらに頸部から直線的に内傾するものが認められる。この期は間壁編年のⅣ期Bに相当する。文明十二年（1480）銘の四耳壺が実年代の一端を示している（葛原ほか1998）。この期の様相を示す典型は、備前市不老山東口窯跡出土資料（河本ほか1972）である。

#### 16世紀前半

擂鉢の口縁端部の拡張は顕著になり、15世紀前半からはじまるこの傾向はこの期で極致に達したといえる。上方への拡張は直立するもの（a）と内傾するもの（b）の2種があり、さらに口縁端部が丸みを帯びておさめるものと内傾する平坦面を形成し、内側に鋭い稜を有するものがある。また、見込みにスリメを施すものも認められるようになる。内面のスリメについてもナナメ方向のスリメが付加されるものも認められるようになる。壺は器形的にもかなり多様であり、口縁端部をみても玉縁を意識しているものと単にやや強いヨコナダを施しているものなどがある。大型の壺は、とくに口縁部の形態が異なってくる。頸部から外方へ直線的に開き、折り曲げによって整形された口縁端部の外面には、浅い凹線文をめぐらす。15世紀の特徴的な器種でもあった雀口とよばれる注口付小壺は、この時期にはなくなる。その一方で便利がでてくる。外面には直線文の施文が認められる。

この期は間壁編年のⅤ期に相当する。実年代を示す資料も増加するが、この期の様相を典型的に示しているのは吉井町備前周匝茶臼山城大形竪穴構造出土の遺物群である（松本1990）。備前市片口団地窯の遺物は、壺の肩部の施文や壺の口縁部形態に15世紀後半の特徴に近いものが認められることから、より先行する時期が推測される（石井ほか1998）。このほか百間川当麻遺跡（現米田遺跡）1の井戸2出土の土器群（松本ほか1981）もこの時期の様相を示している。

#### 16世紀後半

擂鉢の口縁端部の拡張は相変わらず大きく、上方への拡張方向も直立するもの（a）・内傾するもの（b）の2種があるが、端部は基本的に内傾する平坦面と内側に鋭い稜を有するものになる。壺は、口頸部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。胴部最大径が上方にくるため肩が張った形態が

顯著となる。

この期は間壁編年のV期で、中世から近世の備前焼の細分編年を詳細におこなっている乗岡編年の近世I期bに相当する。壺を中心とした実年代資料にも恵まれている。備前市東3号窯で、質・量共に良好な資料が発掘調査で出土しており（石井ほか2003）、16世紀後半の備前焼の様相を示す定点といえる。

### 17世紀前半

擂鉢は、上方に口縁部を拡張したもの（擂鉢D）があるものの、量的にはかなり少なくなる。主流は口縁端部内側の屈曲部の中央付近が内側に張り出し、口縁端部の断面形も丸くなる、いわば、口縁部全体の断面形が三角形に近くなったもの（擂鉢E）が主流となる。スリメの密度がかなり密なものもあり、口縁外端部も2条凹線が中心となる。甕の口縁端部は、16世紀後半とくらべると肥厚する傾向がある。

この期は、乗岡編年の近世1期c～近世2期aに相当する。備前市西2号窯で良好な資料（石井2003）が発掘調査で出土している。

### 引用文献

- 石井啓ほか「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書」I『備前市埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
2003  
 伊藤晃ほか「曾原天王山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」36 1980  
 伊藤晃「窯業」「岡山県の考古学」吉川弘文館 1987  
 鎌木義昌「備前焼の誕生」「海底の古備前 水ノ子岩学術調査記録」山陽新聞社 1978  
 草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』II 1994  
 草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』III 1996  
 草原孝典「すくも山遺跡」岡山市教育委員会 2000  
 葛原克人ほか「備前焼紀年銘土型調査報告書」備前焼紀年銘土型調査会 1998  
 河本清ほか「不老山古備前窯址」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」1972  
 重根弘和ほか「山崎古窯跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」167 2002  
 杉山和雄ほか「伊福定国前遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」125 1998  
 平井泰男「中世の遺構・遺物について」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」56 1984  
 間壁忠彦・間壁蘿子「備前焼研究ノート（1）～（4）」「倉敷考古館研究集報」1・2・5・18  
 1966・1966・1968・1984  
 松本和男「備前周匝茶臼山城発掘調査報告書」吉井町教育委員会 1990  
 松本和男ほか「百間川当麻遺跡」I『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 1981  
 乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」「第3回中近世備前焼研究会資料」 2000  
 乗岡実「備前焼壺（壺）の編年案・紀年銘資料にみる大壺（壺）の変遷」「第2回中近世備前焼研究会資料」 2000  
 乗岡実「近世備前焼擂鉢の編年案」「岡山城三之曲輪跡」岡山市教育委員会 2002

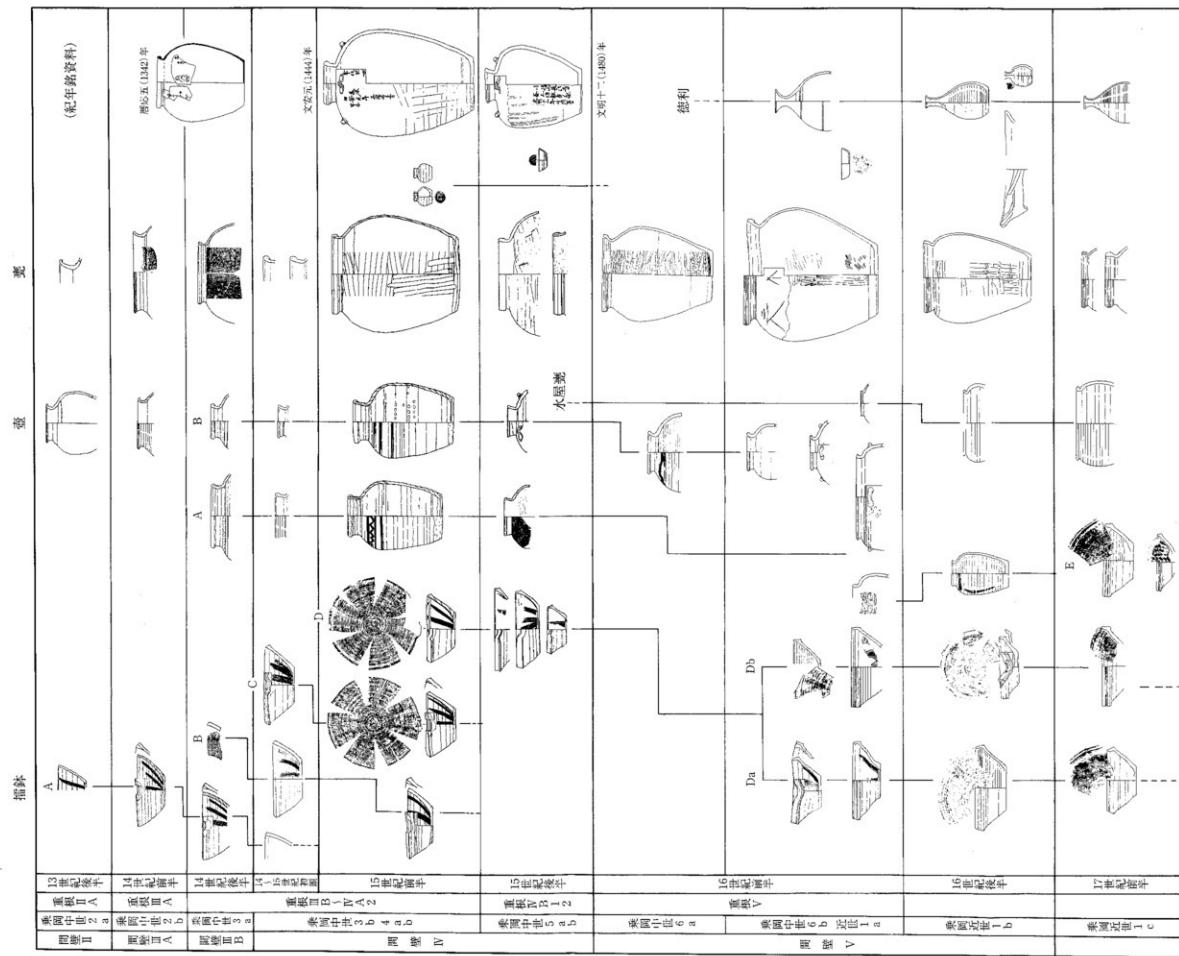


图111 備前燒變遷概略圖

## 2. 東岡山遺跡の中・近世の集落変遷

それでは出土した遺物から、東岡山遺跡の集落の変遷を13世紀中葉、14・15・16世紀、17世紀の3期に分けて整理したい。

### 13世紀中葉

この時期は遺構や遺物の量は極めて少ない。I区では調査区とほぼ平行する方向性を有する長方形の長大な土壙が検出されただけで、この期に属する遺物の量も極めて少ない。ちなみに調査区の方向はN-32°-Wで、正方位である周辺の条里方向とは異なっている。II区は強固な微高地の東端に位置する。明確な遺構は検出していないが、基本的には次の時期に属すると考えている溝8からは該期の遺物が比較的多く出土している。溝8はI区の長方形土壙の方向とほぼ平行であることからも、この時期にまで遡る可能性が高いと考えられる。おそらく、溝8の西側の微高地中央には該期の集落が形成されていると予想される。III区からは13世紀代の遺構は検出されておらず、遺物も少ない。

I～III区の様相から、この時期の集落は次の時期の集落と比べると極めて限定的な広がりしかしていなかったといえる。しかも、I区とII区に共通する方向性、それも周辺部に広汎に広がる正方位の条里地割とは異なる方向性に規定されていたようである。この方向性がどの程度の範囲まで広がっていたのかは不明であるが、溝8の存在から次の時期にも部分的には存在していたことがうかがわれる。ちなみに、旧長原村の天鵠神社の方向や、この方向とはほぼ共通の方向性を有した用水路も周辺で散見されることから、条里地割ほどではないが、ある程度広がっていたことを推測せられる。さらによ付け加えると、この方向性は微地形の影響により、南北方向の水路がその方向へ流れるようになる地点でもあることから、地形に即した方向に開発をおこなった結果生じた方向性ともいえる。そうすると、東岡山遺跡周辺に広がる条里地割は、地形に即した中世の開発を経た後に施行された、あるいは既存の条里地割が延長された結果である可能性が考えられよう。

### 14世紀後半・15・16世紀

このような長い時期幅で設定する根拠は、各調査区を南北に貫いている溝6・溝7・溝20からの出土遺物の時期幅から、付近で該期の集落が営まれていたと考えられる。出土した備前焼の傾向をみると、最も古いのは13世紀後半の壺であるが、同時期の擂鉢は出土しておらず、該期の土師質土器もほとんど含まれていない。出土した備前焼壺は器表面はローリングによる摩滅が認められ、溝に伴うというよりも二次的な堆積の結果と考える方が妥当である。次は14世紀後半の擂鉢と壺である。この時期の備前焼は、溝全体から出土した備前焼の量からすると1割ほどであるが、器表面の残存状態も良好であり、併行する時期の土師質土器である無高台の碗も出土している。また、擂鉢口縁部の形態をメルクマールとしてみると、15世紀段階、16世紀段階のものも確実にあり、それぞれに壺や甕が伴っている。備前焼が14世紀後半以降連続的に認められるといえる。以上のことから、I～III区を貫流する溝は14世紀後半に掘削され、16世紀までは同じ位置に維持されたといえる。さらに、この溝は若干蛇行する位置なども現山手川用水と一致することから、現在も周辺の多くの水田を潤している山手川用水の初源を示していると考えられる。

山手川用水路は、斜方向に流れしており、しかも若干蛇行気味であることから、自然地形の影響をかなり受けていることがうかがわれる。したがって、一見、自然流路を用水路に利用した用水路であるとの見方もできた。しかし今回の調査の結果、人為的な掘削によってつくられた用水路であることが明らかとなつた。東岡山遺跡の位置する旭川東岸平野は、広い沖積平野が形成され、そこには正方位

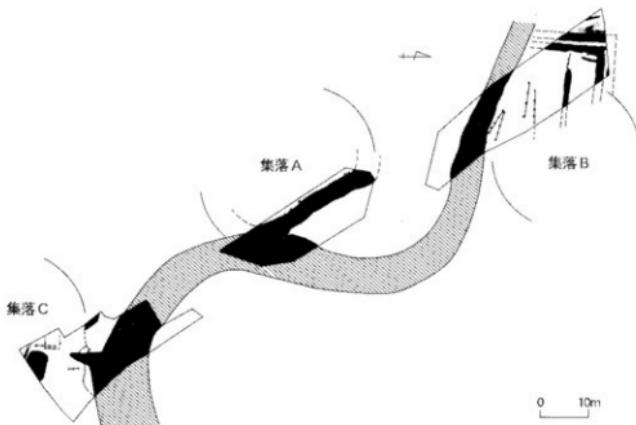


図112 14世紀後半・15・16世紀の造構変遷図（1/1,000）

の条里地割が認められる。一方、所々に条里地割の認められない部分もある。その部分は、微高地であった部分と、おそらく自然流路やその氾濫原であったために条里地割が施行されなかったか、もしくは施行した後に消滅したと思われる部分である。用水路についても、条里地割の方向に即したものと、自然地形に規定されたものがある。現在の地割は、水田の開発や再開発が重層的に集約されたものである。また、ある程度広範囲を対象としておこなった面的な開発や部分的な開発、面的な再開発や部分的な再開発といった異なる性質の開発も一元的に含んだものであり、地割や水路の方向だけを手掛かりとしていてはその地域の開発・再開発のメカニズムを解明することはかなり限定的となる。ここではそういった限界を意識しながら、14世紀後半のおこなわれたであろう大規模な水田開発的具体的内容について追求してみたい。

まず、14世紀後半以前の集落が存在していることからも、東岡山遺跡周辺もある程度水田開発が及んでいたことがわかる。そのため、14世紀後半の開発とは荒野に対して初めておこなった開発というわけではなく、再開発の性格が強いといえる。旭川東岸平野の条里地割については、百間川兼基遺跡（高畠ほか1982）の調査で検出されている11世紀中葉の例が今のところ初源を示すものである。ほかにも時期の遅る例とされるものもあるが、それらはいずれも周辺での調査成果の結果と整合しなかつたり、より追認作業が必要と考えられるものである。各地に残る条里地割の施行時期については、発掘調査のデータの蓄積から7・8世紀まで遡らないという意見が多いが、最近、別の視点から7世紀まで遡ることを主張する意見（井上2004）もできている。また、条里地割の施行範囲についても、現況の一面向的な地割が当初から存在したのではなく、部分的な施行が増殖して現況の一面向的な地割が完成したという考えもできる。東岡山遺跡と同じ旭川東岸域で、同遺跡の西側2kmの位置にある中井・

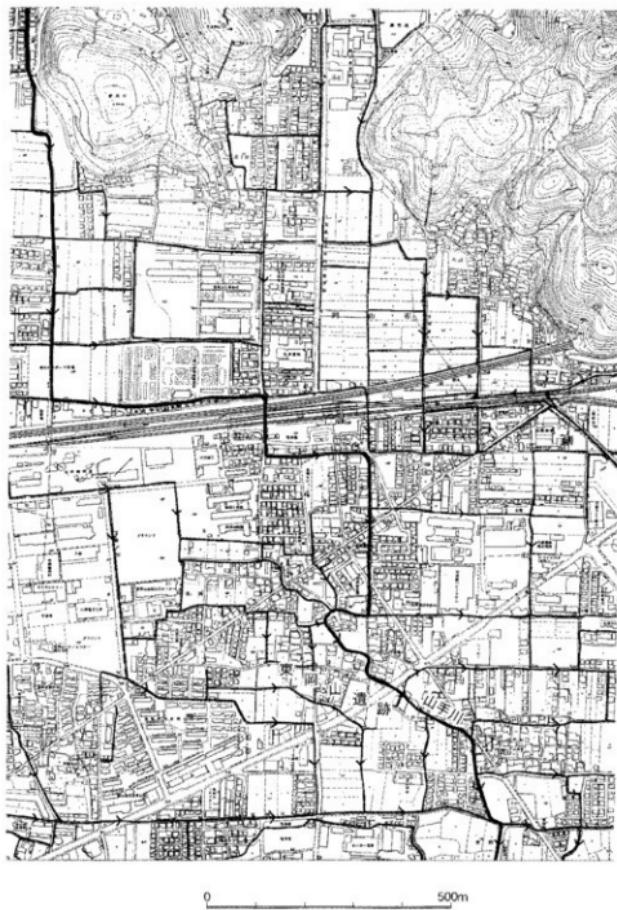


図113 東岡山遺跡周辺の水利系統図（1/10,000）

三反田遺跡は、現況では条里地割の中にあるが、中世段階までは地形に即した地割であったという報告例（桑田1994）はそのことを支持させる。旭川東岸平野の水田地割と水路の組み合わせは、〔1〕自然地形に即した水田地割と同様の水路、〔2〕条里方向の水田地割と自然地形に即した水路、〔3〕条里方向の水田地割と水路ということになる。近世における干拓地が〔3〕であり、この開発が最も新しくおこなわれた水田開発であったことを考慮すると、巨視的には〔1〕→〔2〕→〔3〕の順に

開発時期が下ると考えられる。東岡山遺跡の西半は〔1〕の部分もあるが、基本的には〔2〕に相当する。また、発掘調査の結果でも、旧来からの集落であったⅡ区（集落A）は、以前の地割方向に即しているが、この開発以降に成立したⅠ区（集落B）やⅢ区（集落C）の集落は、建物、柱穴列、集落を画する溝の方向性が正方位であることから、条里地割に規定されているといえる。14世紀後半から16世紀にかけての集落景観は〔2〕であったといえよう。条里地割の方向に即した水路の開発時期については、池田家文庫の万治四年（1661）作成の「上道郡図」をみると、東西方向の条里地割に即した水路が描かれていることや、東岡山遺跡でも水田の再開発がおこなわれたことをうかがわせるよう17世紀初頭に山手川用水の位置が現況の位置に変更されていることから、17世紀初頭前後におこなわれた可能性が高いと推測される。

14世紀後半におこなわれた水田開発は、掘削された溝の規模やその開発によって新たな集落が出現していることからも、かなり大規模であったといえる。このような開発の主体については、一見かなりの権力を有しているものが想像される。しかし、14世紀後半以降は南北朝の争乱を経て、それまでの支配体系が大きく揺らいでいる時期であり、勧農策をおこなわない莊園領主や守護大名に対して農民が自立化する時期（永原1974）である。9・10世紀における条里地割の施行を伴った水田開発は、中世における開発よりも面積的には少なかったと考えられるが、支水路まで条里地割の方向に即させている（草原1994）。この時期の開発は、国司が主導し、実質は国府の在庁官人によっておこなわれたと考えられる。したがって、支水路の方向までも条里方向に即させたことは、いわば当時の支配者の理念を実体化することをかなり優先させたことを示している。しかしながら、14世紀後半の開発については、少し異なる側面がみられる。それは水路の掘削を自然地形に合わせているということで、より在地の実状に即した効率的な開発をおこなっているということである。旧来からの集落であった集落Aが、開発以降も存続していることは、その開発の担い手の1つにそのような旧来からの集落があり、しかも大きな役割を果たしていたことがうかがえる。さらに開発以降に出現する集落が条里地割の方向に規定されていることは、より上位層の関与も大きかったことを示している。とはいえ、15・16世紀には国人といわれる在地領主が成長を遂げ、その社会的な比重が増してくるのは、中央における政治的な混乱にも大きな要因があろうが、14世紀における在地に主体性を置いた大規模な水田開発がその底に存在したからではなかろうか。該期の大規模な水田開発が文献上で明確でないのは、その開発の主体や視点が在地社会にあったからではないかと思われるのである。

次にこの時期の集落形態について整理しておきたい。Ⅰ区からⅢ区にかけて掘立柱建物や柱穴列が検出されている。Ⅰ区とⅡ区の間には溝6があるため、別々の単位の集落といえる。Ⅱ区とⅢ区については、同じ微高地上に存在している可能性が高いが、Ⅲ区の微高地が北にいくにしたがって低くなっていることや、Ⅱ区の集落を画する溝がⅢ区に延びて西へ屈曲することから、Ⅱ区とⅢ区の集落は別々の単位の集落と考えられる。Ⅱ区を集落A、Ⅰ区を集落B、Ⅲ区を集落Cとする。集落Aは弥生時代以来の遺構が形成される微高地基盤の上に形成されている。ただし、調査区が微高地の東端部に位置することから、集落Aの東側を画する溝と柱穴が若干検出されただけである。調査区の両端でこの溝が西側へ屈曲していることから、区画されるのは南北幅で30mほどの範囲といえる。溝の南側コーナー付近は、溝6の延長である溝7へ接続している。区画内部の建物の方向性は不明であるが、区画溝はN-32°-Wの方向で、少なくとも周囲の条里地割とは異なる方向性を有している。

集落Bは、最も広範囲に調査をおこなうことができた。溝によって周囲を区画しており、区画内部

についても溝によってさらに区画している。溝で区画された集落の内部をさらに溝で区画することは、中世前期の津寺遺跡（正岡ほか1994）などでも認められる。今回の調査では、区画内部にあった建物は検出されなかったが、区画溝に即した柱穴列が検出されている。したがって集落を画する溝の方向性は、集落そのものの方向性を反映させていると考えてよい。集落Bは、集落Aとは異なり条里地割の方向に規定されているといえる。また、集落Bは集落Aとは異なり、山手川用水の開発を契機として出現した新興の集落である。

集落Cは、調査区がかつておこなわれた山手川用水の改修工事の影響により、かなり攢乱をうけているため、遺構相互の関係にやや不明瞭な点が認められる。しかし、個々の遺構をみてみると、山手川用水から派生する支水路の先端が池状遺構（P443）に接続していた可能性があり、しかも両者の方向性は正方位に近い。また、検出された建物や柱穴列の方向性も正方位に合わせている。この点は集落Bと共通する。集落Cの位置には弥生時代から古墳時代の遺構が形成されているが、それ以降の遺構や遺物は認められない。これは集落Cも集落Bと同様に、集落Cが山手川用水の掘削を契機として出現したことを見ている。また、断片的ではあるが集落を画する可能性のある溝が検出されていることから、集落Cも集落A・Bと同様に周囲を溝で区画されていた可能性が高い。

以上のこと整理すると、14世紀後半から16世紀の集落は条里地割に規定されない集落と規定される集落とがある。前者は旧来からの集落が継続しており、方向性も旧来の方向を踏襲している。後者の集落は、大規模な水田開発が契機となって出現している。この大規模な水田開発は、集落Aのような旧来からの集落が母体の1つとなったと考えられる。ただし、開発以降に出現している集落Bや集落Cが集落Aに対して從属的な関係であったかというと、そうではなさそうである。集落A・B・Cは共に集落の周囲を溝で区画しており、ある程度相互に自立化した関係の存在していたことをうかがうことができる。おそらく、かなり広範囲の在地農民の協業的な結合を核としてこの期の大規模水田開発がおこなわれたと推測される。しかしながら、新興の集落が条里地割の方向に規定されていることは、この開発が在地のみの成果ではなく、より外的権力も介在していたことを暗示させる。しかし、いずれにせよ14世紀後半における大規模な水田開発は、自立的な集落の数を増加させており、中世後期になって在地農民層が成長する起点になったことと考えることは可能であろう。

### 17世紀前半

17世紀前半には大きな変化が認められる。まず、山手川用水が現在の位置に変更される。山手川用水は旭川東岸平野に緻密に張り巡らされた用水路網の一部である。そのため、この部分の用水路の変更は、そういった用水路網全体の変更、もしくは開発を反映させている可能性がある。17世紀後半の用水路網を描いた『上道郡図』には、条里地割の方向に即した水路がいくつか描かれている。それは円蔵寺川用水などの山手川用水クラスの用水路も含まれている。条里地割の方向に即した水路の開発を14世紀後半以降の開発であったと考えると、円蔵寺川用水などの条里地割の方向に即した用水路の開発は17世紀前後の時期であったことが推測される。

用水路の変更以外に集落の様相にも大きな変化がある。14世紀後半に新たに出現した集落であった集落B・集落Cは廃絶し、集落Aのみが認められる。しかも集落は柱穴が密集して検出されており、かなり集住していたことが推測される。ただし、それは集落B・集落Cが集落Aによって吸収されたという単純な図式にはならない。それは集落Aの景観にもそれまでとは異なる変化が認められるからである。まず、集落を画していた溝がなくなる。さらに主屋と考えられる建物やそれに付随する柱穴

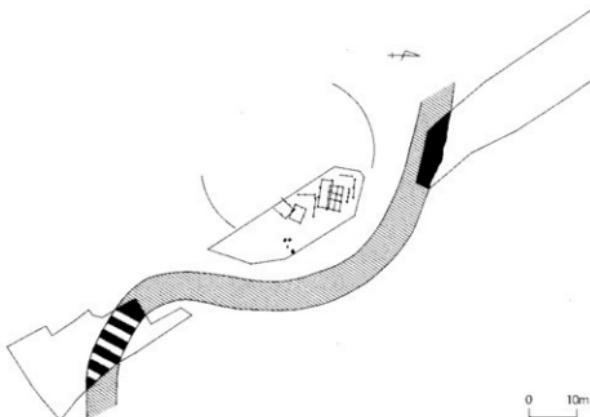


図114 17世紀前半の遺構配置図（1 / 1,000）

列が正方位、すなわち条里地割の方向に合わせている。建物は少なくとも一度建て替えられていることから、この方向性は集落をかなり普遍的に規定していた可能性が高い。また、集落の一角には屋敷墓と考えられる墓地が形成される。集落が条里地割の方向に規定されたのは、より上位の外的権力からの強力な介入があったことを示しているととらえることができる。それは、いわゆる郷・庄といった中世以来の支配単位から近世の村へ再編した村切り（佐々木1974）の具体的な状況を示しているようと思われる。旭川東岸域の条里地割の中に存在する旧集落は、条里地割の方向に即している。おそらく、近世初頭におこなわれた村切りによってこの景観は確定したのであろう。実際、集落Aの位置は、旧長原村の位置と重なっている。

それでは集落Aの再編について、具体的な史料と照合しながら検討してみたい。まず、集落Aの屋敷墓の1つである堀植墓からは、初期伊万里焼大皿が出土している。このような大皿は、饗応に用いられるもので、そういう行為が認められている武士階級の居住する城下町では出土するものの、農村からはあまり出土するものではない。さらに、屋敷墓については、土地所有権の脆弱な段階にその土地の所有権を主張するために設置された（橋田1991）という意見がある。この2点を積極的に評価すると、集落Aには武士的階級、あるいはそれに関係するものが新たに加わって周辺集落を含めて長原村として再編したことになる。

天正十八年（1590）に宇喜多秀家から浮田主馬の与力組に属した知行200石の長原管作（加原1994）にあてて、上道郡財郷内大和坊に屋敷戸と共に21石余を加増することを示した知行状がある（岡山市役所1936）。古代以来の財郷は広く、『慶長十年備前国高物成帳』でも旧長原村はその一部に含まれていることが記されている。この史料は旧長原村の医師であった永原元古氏が所蔵しているもので、この知行状をもらった長原氏が長原村に帰農して永原氏に系譜としてつながるとという見方が自然であろう。しかも、同氏所蔵の知行状には同じく長原管作が慶長五年（1600）に備中国都宇郡八尾に加増

## 東岡山遺跡関係史料

## (1) 知行状

財郷内大和坊分之事、屋敷相加貳拾壹石餘之事、為加給相計者也仍狀如件

天正十八、二月二十八日

秀家 (家押)

長原管作どのへ

(長者村、医師永原元古所藏)

## (2) 知行状

虫明左右衛門へ知行百貫遣候奉公專用也

天正二十一年二月二十三日

秀家 (家押)

長原管作どのへ

(長者村、医師永原元古所藏)

## (3) 知行状

於備中國都宇郡八尾同百之事、為加增令扶助訖、全令領地、彌可抽奉公忠者也。

慶長五年八月四日

秀家 (家押)

(長者村、医師永原元古所藏)

100石を宇喜多秀家から受けていることを示すものがある。したがって財郷の知行所もいくつかあった知行地の1つであった可能性が高い。つまり、宇喜多氏が慶長五年（1600）の関ヶ原の合戦に敗れて没落した後、宇喜多氏の旧家臣団のたどったいくつかの選択肢のうち（谷口1964）の1つである帰農土着、すなわち宇喜多氏の旧家臣であった長原氏が、同氏の知行地の1つであった財郷（後の長原村）に帰農したと考えるのである。そして、長原氏は宇喜多氏以降の近世の大名である池田氏がおこなった村落の再編である村切りの際に、長原氏がスムーズに土着するために、村切りの核となる役割を果たしたと推測するのである。つまり、17世紀前半における集落の変化は、没落した大名の旧家臣の知行所への帰農と、新領主である大名の支配機構の末端への編入が同時に起こる、それが近世村落の成立運動といっていることを示していると推測するのである。そして、この再編は、承応三年（1654）に岡山城下町を襲った大洪水を契機として岡山藩主池田光政によっておこなわれた藩主による直接支配への変革である地方知行制、いわゆる「平し免」の施行（谷口1964）よりも時期的に遅るものである。

#### 引用文献

- 岡山市役所『岡山市史 第二巻』 1936  
 井上和人『古代都城制条里制の実証的研究』 学生社 2004  
 加原耕作『長原管作』『岡山県歴史人物事典』 山陽新聞社 1994  
 桑田俊明『中井・三反田遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 1994  
 佐々木潤之介『日本の歴史15 大名と百姓』 中央公論社 1974  
 高畠知功ほか『百間川兼基遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1982  
 橋田正徳『屏風墓試論』『中世土器の基礎研究』Ⅲ 1991  
 谷口澄夫『岡山藩』 吉川弘文館 1964  
 永原慶二『日本の歴史10 下克上の時代』 中央公論社 1974  
 正岡睦夫ほか『津寺遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994

#### 3. 県南部における中世後期から近世初頭の集落動向

県下において、中世後期から近世初頭にかけての集落遺跡の調査例はそれ程多くはない。それは東岡山遺跡の調査でもそうであるが、近世以来の集落の多くが現在の近世から続く集落と重なっているからと推測される。しかしながら、調査例もいくつかあり、その様相を概観したいと思う。ただし、城館などに相当すると思われるものは除外する。

##### （1）西祖橋本遺跡（扇崎1994）

岡山市西祖にある。多くの柱穴とそれらを円繞すると推測されている溝が検出された。溝は幅が3.6mと幅が2.7mの2本が平行して検出されている。深さは0.7m未満で、それ程深いものではない。時期は15世紀から16世紀にかけてで、17世紀に入ると廃絶する。柱穴はかなり壮大な建物に復原されているが、それ程大きな建物を想定しなくてもよいと思われ、一般的な集落であったと考えられる。また、圓繞しているとされる溝についても、その方向性が周囲の水田地割や用水路の方向に踏襲されていることから、むしろ水田開発に伴った用水路であった可能性が高い。そうすると西祖橋本遺跡は、東岡山遺跡の集落Bや集落Cと同様に中世後期における水田開発によって成立し、近世になると集落

の再編と共に廃絶したということも考えられよう。

(2) 百間川米田遺跡（岡本ほか1989）

岡山市米田にある。『大安寺伽藍縁起流記資財帳』(天平19年(747))に記載された石門江に相当し、瀬戸内海に通じる内海に面した港湾関係の集落と考えられている。中世前期からの集落が16世紀まで続き、16世紀末ないし17世紀初頭には廃絶する。集落の性格は異なるが、中世後期以前から存続しており、周辺の集落の中心的な存在であることから、東岡山遺跡の集落Aの性格と重なる点が多いが、近世に入ると集落B・Cのように廃絶している。これは、それまでの中心的集落が近世村落成立の核にならなかった例といえる。

(3) 北方藪内遺跡（高田ほか2000）

岡山市中井町にある。中世前期から遺構が認められるが、集落の活発な形成は幅4.5~5.0mの大溝の掘削がおこなわれた14世紀前後である。この溝には18世紀代の遺物も認められ、集落が近世まで存続したことを見ている。東岡山遺跡の集落Aと似ている。

(4) 高塚遺跡（弘田ほか2000）

岡山市高塚にある。中世前期からの集落が後期まで続く。溝によって区画された屋敷地が集合して1つの集落を形成している。同じような景観は南約1kmの位置にある津寺遺跡（正岡ほか1994）でも認められており、地域的な特徴である。中世後期にも基本的な景観は踏襲されるが、集落は17世紀初頭には廃絶する。

(5) 津寺遺跡（清水ほか1998）

岡山市津寺にある。中世前期からの集落が後期まで続き、一部は18世紀頃までの遺構が認められる。しかしながら、17世紀前後を境に集落の交代があり、この間に廃絶された集落は、陣屋町の形成の結果であると推定されている。中世後期の集落の形態は、屋敷地を溝で区画しており、それらが集合して1つの集落を形成している場合もある。

以上のように県南部における中世後期の集落をみると、東岡山遺跡で検出された集落の様相と整合させて整理することが可能である。すなわち、中世前期から形成されており、近世になんでも存続する集落Aのタイプ（タイプ1）、中世後期に形成され近世になると廃絶する集落B・Cのようなタイプ（タイプ2）、そして東岡山遺跡では検出されなかつたが、中世前期から形成されているが近世には廃絶する百間川米田遺跡のようなタイプ（タイプ3）である。タイプ3の集落は、中世の中心的な集落が近世の村落へ昇華されなかつた場合もあったことを示している。

いずれにせよ、県南部の集落は、17世紀初頭を境に画期的ともいえるような変化があったことがうかがわれる。

#### 引用文献

- 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989
- 扇崎由「西祖橋本（御休幼稚園）遺跡」岡山市教育委員会 1994
- 清水竜太ほか「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998
- 高田恭一郎ほか「北方藪ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』149 2000
- 弘田和司ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000

正岡睦夫ほか「津寺遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」90 1994

### III. 弥生時代前期：P385・溝11出土土器の時期

Ⅲ区で検出されたP385と溝11は、弥生時代前期前半の時期である。P385は溝11に一部を削平されており、時期的な前後関係があるといえる。しかし、溝11から出土した遺物は、P385を掘削している部分からだけで、しかもそれらはP385から流入したような状態で出土したことから、溝11出土土器は基本的にP385からの再堆積であると判断された。したがって、両遺構から出土した土器は同じ時期に属するものとして扱うことができる。ここでは、これらの土器についてもう少し詳細な時期を検討してみたい。

弥生時代前期における当該域の土器編年は、精緻かつ体系的な編年および編年試案が提示（高橋1983、藤田1982、平井1995、正岡1992、高畠1992、平井1996、久保2000）されている。それらの成果を参考にしつつ、ここでは土壇などの二次的な混入の可能性が少ない遺構や、溝でも存続時期幅の限られていると判断される遺構から出土した土器群を同時期を決める基本的な根拠とし、前期における極めて大雑把な土器の変遷を概観して、その中のP385・溝11の土器群の位置づけを確認したい。

#### 前Ⅰ期

岡山市津島遺跡出土の土器群が指標となる。これらの土器群は、当地における最古の弥生土器とされ、さらに2時期に分けられること（高橋1983、平井1995）が指摘されてきた。最近、同遺跡の発掘調査報告書が刊行され（正岡ほか2000）、そこで提示された該期の土器群をみてみると、いくつかの段階に分けることができる。まず、壺形土器では器高と最大径がそれ程変わらない器形（A）ばかりで、施文のあり方から4種に分けられる。口縁部、頸部、胴部の境の接合部の粘土紐を強調したり、その部分に別の粘土紐を貼り付けた段による区画文が施されたもの（A<sub>1</sub>）、口縁部と頸部の境がなく胴部との境にだけ段が認められるもの（A<sub>2</sub>）、頸部もしくは胴部の段が段の上端と下端を示す2条の沈線になったもの（A<sub>3</sub>）、段が沈線になり、しかも沈線の間に刻みを施したもの（A<sub>4</sub>）に分けられる。一方、甕形土器は口縁部が「く」の字形に外反するが、頸部下半に段があるもの（A<sub>1</sub>）、頸部下半の段に刻みを施したもの（A<sub>2</sub>）、頸部以下無文のもの（A<sub>3</sub>）、頸部以下に段を意識した沈線が1条もしくは2条施されたもの（A<sub>4</sub>）、頸部以下に2条の沈線がめぐり、その間に刻みを施したもの（A<sub>5</sub>）がある。壺形土器、甕形土器とともに、段→沈線化→沈線間の施文といった各施文手法出現の段階が想定される。津島遺跡でまとまった土器が出土している舟形土壙1～5における各器種の共伴状況をみてみると（正岡2000）、想定される段階に明確に分かれるのではなく、むしろ混在している状況である。甕形土器A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>と甕形土器A<sub>4</sub>との間に前後を分ける一線を引く意見が提示されている（久保1997）。魅力のある見解であるが、両者を時期差とする根拠となる資料のさらなる増加を期待しつつ、ここでは少量の突帶文土器が伴う津島遺跡の様相の解釈も含めて、異型式の土器や模倣・退化型式の土器が同時期に存在した可能性も考慮し、津島遺跡の土器群を1つの時期としてとらえておきたい。

#### 前Ⅱ期

高尾式といわれていたものに相当する。東岡山遺跡-P385・溝11出土土器群、岡山市の百間川沢田遺跡2・堅穴住居1出土土器群（内藤ほか1985）が指標となる。壺形土器は前Ⅰ期と同様にA<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>は存在するが、A<sub>1</sub>には段下端部にだけ粘土紐を貼付する退化形態のものも認められ、さらに沈線に

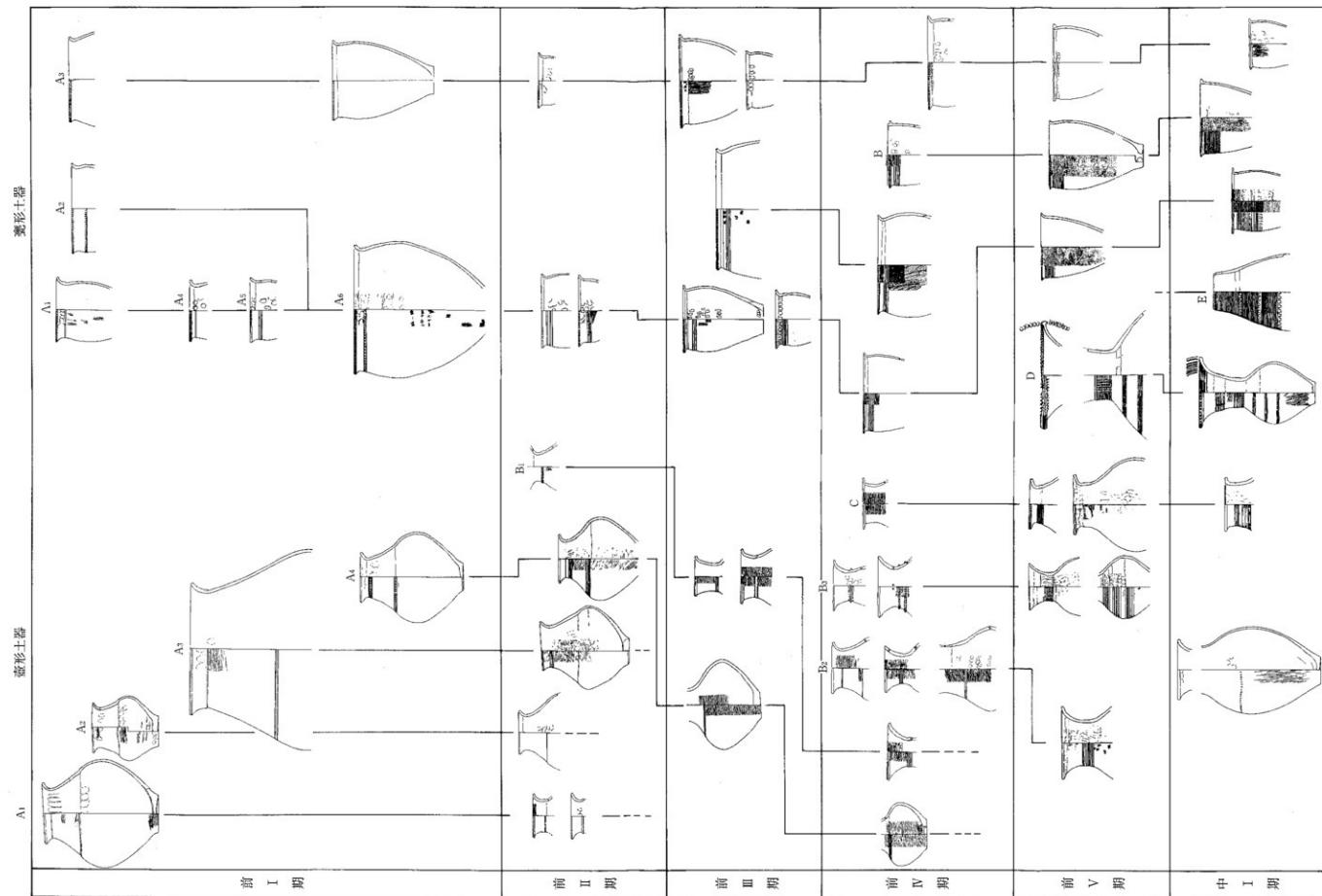


図115 弗生時代前期の土器の変遷

より施文のものが増加する傾向が認められる。また、明確に全形を知ることのできる資料はないが、器高が高くなり口縁部と頸部や、頸部と胴部の変換点が緩やかにカーブを描くもの（B）も認められるようになり、さらに2条の沈線間の上下を削り出した幅の狭い削り出し突帯も出現する。壺形土器は頸部以下の沈線が3～4条のものが主体である。施文位置は、前Ⅰ期の頸部と段、もしくは段の退化した沈線の系譜を残し、頸部からやや下がった位置に施文をおこなっている。

#### 前Ⅲ期

久町畠中遺跡（平井1982）、百間川原尾島遺跡1-P30（江見ほか1980）、百間川沢田遺跡環濠（江見ほか1984）などが指標となる。壺形土器A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>はなくなり、壺形土器Aは段部分が沈線化もしくは削り出し突帯化したものだけとなる。壺形土器Bは明瞭となり、前Ⅱ期よりも幅広の削り出し突帯が認められるようになる。壺形土器は、頸部以下の施文が3条前後の沈線によるものが主体をしめる。前Ⅱ期と同様に、頸部より若干下がった位置から沈線をめぐらす。また、沈線間に刺突文などの施文をおこなうものはあるが、沈線の下端に刺突文などの施文をおこなうものはない。

#### 前Ⅳ期

矢掛町清水谷遺跡環濠下層出土の土器群（藤江ほか2001）が指標となる。壺形土器は大半がBで、Aはこの時期でなくなる。また、口頸部を直立気味にし、口縁部を水平に近い角度で大きく外反させるCが認められるようになる。施文については、削り出し突帯も認められるが、基本的には沈線文と貼り付け突帯である。削り出し突帯はかなり幅広となり、上面に沈線などの施文をおこなう。この期以降には削り出し突帯は認められなくなる。沈線については、段の施されていた位置を意識した位置におこなうものと、形骸化したことをうかがわせるものがある。貼り付け突帯については、頸部中央付近におこなうなど形骸化がより顕著といえる。

壺形土器は頸部以下の沈線の数が若干増加して4条前後が主体となる。また、頸部から沈線をめぐらすものも一定量認められるようになる。さらに、直口の口縁部付近に別粘土を水平に貼付するもの認められる。端部には刻みを施していることから、直口の口縁部からは下がった位置ではあるが、この部分を口縁部として意識していたといえる。この壺形土器（壺形土器B）は、逆L字形の口縁部をもつ「瀬戸内型壺」（秋山1992）と呼称される当地の前期後半の壺形土器の祖形になると考えられる。沈線を施す以外は北部九州の下条式などとの類似がうかがわれるが、口縁部の貼付以外にその根拠はなく、また数も少ない。ただし、この形態の壺は次の前V期にも残存しており、なかには直口口縁部分を波状にしたものも認められる。

#### 前V期

岡山市南方遺跡-土壤24（柳瀬ほか1981）、百間川原尾島遺跡5-土壤89（柳瀬ほか1996）、百間川沢田（市道）遺跡-P161・177（草原ほか1992）が指標となる。壺形土器Aはなくなる。沈線を施文するB<sub>1</sub>は、8条前後のかなり多条化した沈線をめぐらすが、施文位置は頸部中央付近が大半であり、口縁部と頸部を画すといった区画文の意識は完全に消失したといえる。また貼り付け突帯を施すもの認められるようになる。貼り付け突帯で施文するB<sub>2</sub>は、B<sub>1</sub>よりもより装飾的なものがあらわれ、胴部全体に施文するものもある。棒状浮文などの立体的な施文も認められる。頸部がやや外開き気味に立ち上がり、口縁部が朝顔形に大きく開く形態で、口縁部内面に押圧した貼り付け突帯をめぐらすような極めて装飾性の高い壺形土器Dが認められるようになる。

壺形土器は、施文が頸部からはじまるものが主体となり、かつての段を意識していた頸部と沈線文

の間に無文帯をもつものは極めて少なくなる。壺形土器同様に、区画文としての意識はほとんど消失したといえる。それと関係あるのか、沈線の下部に刺突文や竹管文などをめぐらすものがでてくる。沈線文が装飾を目的とした施文に完全に変容したことを意味しているのであろう。沈線の数も7条を超え、10条前後が主体となる。口縁端部に粘土紐を水平に貼り付ける逆L字形の口縁部もかなり認められ、それらには側面に貼り付けたものと上端に被せるように貼り付けたものがある。

この期は、壺形土器の沈線文の数によってより細分が可能である（草原1992）。例えば、百間川原尾島遺跡5-土壤74（柳瀬ほか1996）では、沈線文の条数が20条を越えるかなり多条化した沈線文の施された壺形土器が認められる。この点をメルクマールとして前Ⅵ期を設定しても、前Ⅵ期の構成は、壺形土器の施文の多条化ということ以外には大きな変化はない。

#### 中Ⅰ期

前期から中期の過渡的様相をもつということから、中Ⅰ期の内容についても触れておきたい。百間川米田遺跡-土壤114（岡本ほか1989）、総社市井手見延遺跡-土壤2（物部ほか2001）、総社市高松田中遺跡（伊藤ほか1997）、百間川沢田（市道）遺跡-P174が指標となる。高田式とされていたものである。前期の土器の胎土については、比較的大粒で多様な砂粒が含まれているものが多い。中期になるとかなり精選された胎土となり、含まれる砂粒は石英と長石に限定される。中Ⅰ期の土器胎土はまだ前期の胎土に近く、多くの砂粒が目立つ。しかしながら施文にクシ描文があらわれる。クシ描文には、ヘラ描文に似た稚拙なものからハケ調整とほとんど変わらない流麗なものまであり、かなり多様である。前者から後者への時期的な変遷も考えられるが、器種構成などをみてもこの期にそれほど長い時期幅は想定されないことから、同時期のなかのバリエーションと考えられる。壺形土器の多くは前Ⅴ期の器種を踏襲しているが、壺形土器Eのような新たなものも加わる。ただし、壺形土器Eの祖形となるものは前Ⅴ期には認められる。百間川原尾島遺跡5-土壤89（柳瀬ほか1996）から出土している砲弾型の土器で、おそらく瓢箪を利用した容器や木製の容器を寫したものと考えられる。それが中Ⅰ期になって壺形土器の一器種となり、以降当地の壺形土器の代表的な器種になると考えられる。ただし、ここで図示している壺形土器は、多条化したヘラ描沈線と半截竹管によって施文されたもので、施文は前期的な様相といえる。

壺形土器についても、基本的には壺形土器の様相と共通しており、器形的には前Ⅴ期を踏襲している。その中で施文にクシ描文を用いるものがでてくる。ただし、百間川沢田遺跡2-土壤68（正岡ほか1984）などのようにヘラ描文とクシ描文が共存する例や、百間川米田遺跡-土壤115・116（岡本寛久ほか1989）のように中Ⅱ期の土器群と共存する可能性があるものがある。それらを細かな時期差とするか、この期の前期から中期の過渡的性格の一端とするかは、より資料が増加した段階で検討したいが、基本的には後者の可能性を考えている。したがって、中Ⅰ期の実年代的な時期幅は、前後の時期と比べると短かった可能性を推測している。

以上のように前期の土器の変遷をみてみると、東岡山遺跡P385・溝11の土器群は前Ⅱ期に相当する。この時期は高尾式に相当するが、今回出土した土器群はその内容をより明確にするための一資料になるものといえる。

### 引用文献

- 秋山浩三「弥生前期土器」「吉備の考古学的研究」山陽新聞社 1992
- 伊藤晃ほか「高松田中遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」121 1997
- 江見正己ほか「百間川原尾島遺跡」1 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」39 1980
- 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡」3 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」74 1989
- 草原孝典ほか「百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会 1992
- 久保惠理子「弥生時代前期の土器について」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」120 1997
- 久保惠理子「岡山県南部地域における遠賀川系土器の様相」「突帯文と遠賀川」土器持寄会論文集刊行会 2000
- 高橋謙「山陽」「弥生土器」1 ニューサイエンス社 1983
- 高畠知功「備中地域」「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社 1992
- 内藤善史ほか「百間川沢田遺跡」2 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」59 1985
- 平井勝「岡山平野における遠賀川系土器の出現」「古代吉備」17 1995
- 平井典子「備前・備中」「YAY!弥生土器を語る会20回到達記念論文集」弥生土器を語る会 1996
- 平井泰男「畠中遺跡確認調査」「岡山県埋蔵文化財報告」12 1982
- 藤江望ほか「清水谷遺跡」「矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告」1 2001
- 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」「倉敷考古館研究集報」第17集 1982
- 正岡陸夫「備前地域」「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社 1992
- 正岡陸夫ほか「津島遺跡」2 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」151 2000
- 正岡陸夫ほか「百間川沢田遺跡」2 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」59 1984
- 物部茂樹ほか「井手見延遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」156 2001
- 柳瀬昭彦ほか「南方遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」40 1981
- 柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡」5 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」106 1996

### IV 古墳時代前期：井戸1～3出土土器の時期

III区で検出された井戸からは、完形の甕を含む比較的多くの土器が出土しており、それらは古墳時代前期から中期にかけての特徴を有している。ここではそれらの年代をより細かく位置づけてみたいと思う。

該期の土器編年は、かなり詳細な成果が提示されている（高橋1991、高畠ほか1992）。また、近年の発掘調査により良好な資料もかなり増えてきている。それらの資料を羅列的に概観するだけでもある程度土師器の変遷を追跡できることから、ここでは、その変遷の中に井戸1～3出土土器の時期を位置づけることにする。

古墳時代前期の土器については、平底が消失して受け口状の口縁部の外端部にクシ彫沈線をめぐらす、いわゆるボーフラ、あるいは吉備型甕と呼ばれる甕の成立を指標に古墳時代Ⅰ期（以降古Ⅰ期と略す）とし、それに小型精製土器の3種類が擴うことを指標として古墳時代Ⅱ期（以降古Ⅱ期と略す）とする（草原2006）。古Ⅱ期は畿内の布留0式に併行すると考えられる。ここで対象とするのはこの期以降である。そのため古Ⅰ・Ⅱ期については省略する。また実年代については、年輪年代法などの成果もあるが、指標となる土器群と共にした須恵器の年代から割り出し、それ以前については須恵器

共伴の土器群から単純に延長させた年代を当てはめる。

#### 古Ⅲ期（4世紀中葉）

百間川沢田遺跡3-井戸4・井戸12（岡本ほか1993）、井手天原遺跡-堅穴住居7（物部ほか2001）、津島遺跡4-井戸3（高畠ほか2003）などが指標となる。いわゆる吉備型壺（壺C）が残存する最後の時期である。二重口縁を有する壺（壺A）は、胴部の形態が壺Aに近い。直口壺（壺B）は形態的には長頸壺で、やや外反気味に開く口縁部を有する。高杯は長脚傾向が続き、受部が小さめで、口縁部が外湾気味に大きく開く形態である。脚端部は「く」字形に屈曲しているが、低い位置（a）と高い位置（b）の2種がある。小型丸底壺、小型器台、小型鉢の小型精製3種の器種は揃っているが、小型器台については口縁部が受口から直口形態へ退化する傾向が顕著である。小型丸底壺については、壺系と鉢系の2種があり、その差は明確である。

壺は、古Ⅱ期と比べるとかなりバリエーションが認められるようになる。布留式壺の系譜を引く壺B、「く」字状に外反する口縁部で、口縁部が直線的に短く外反する壺C、「く」字状に外反する口縁部で、口縁部が外湾しながら外反する壺D、口縁部が直立気味に外湾する壺Eがある。この期以降の壺は、整形がかなり粗雑になっているため、細部については個体差と時期差の判別が難しい。

#### 古Ⅳ期（4世紀後葉）

津島遺跡4-土器溜まり1（高畠ほか2003）出土の土器群が指標となる。この時期には壺Aは伴わない。しかしながら、胴部の形状は球形であることから、壺Aとは系譜的に異なると思われるが、受口状の口縁部を有する壺Fが認められる。また全体的には、器壁の薄い傾向は引き続いて認められる。小型器種からは鉢と器台が欠落する。小型丸底壺は、壺系と鉢系の2種が存在する。ただし、指頭圧痕の残るかなり粗雑な調整のものも一定量含まれるようになる。高杯については、古Ⅲ期と同様の形態のはかに受部がやや大きくなり、口縁部が若干内湾気味に開く高杯Bが認められるようになる。また短脚化するものもある程度含まれるようになる。壺Bは口縫部の長さがやや短くなり、しかも直線的に開くものも認められるようになる。ただし、それが主流ではなく、僅かに屈曲するものなどいくつかのバリエーションがある。壺Bの胴部の形状は下ぶくれから球形に近くなる。

#### 古Ⅴ期（4世紀末～5世紀初頭）

高塚遺跡-堅穴住居46（弘田ほか2000）、津島遺跡4-井戸7・8・9（高畠ほか2003）が指標となる。壺Aが認められる最後の時期であり、口縁部の屈曲が顕著でなくなる。類例としては岡山市金蔵山古墳出土の壺（西谷ほか1959）がある。壺Bは口縁部が直線的に開くものへと集約されていく傾向が強くなる。胴部形態は、球形のものとやや肩の張った形態のものがあり、後者については古Ⅳ期にはより顕著なものが認められるようになる。高杯は短脚化した脚部となり、脚端部の形状は（b）が主体となる。また脚部に円孔をもつものがでてくる。壺は古Ⅳ期と比べると器壁がやや厚くなる傾向がある。さらに、「く」字形に外反する口縁部で、上端を強くヨコナデして上端部の断面形がやや四んだ壺Gが認められる。この壺は、口縁部が僅かに内湾したものや、頭部から肩部にかけてをヨコナデしてタテハケを消しているものもあることから、同じ特徴をもつ壺Bから派生した可能性が考えられる。小型丸底壺は、全体的に粗雑化の傾向がより顕著となり、しかも基本的には壺系のものだけとなる。

#### 古Ⅵ期（5世紀前葉）

岡山市百間川兼基遺跡2-堅穴住居8（平井ほか1996）、同遺跡3-井戸2（柳瀬ほか1997）、百間川

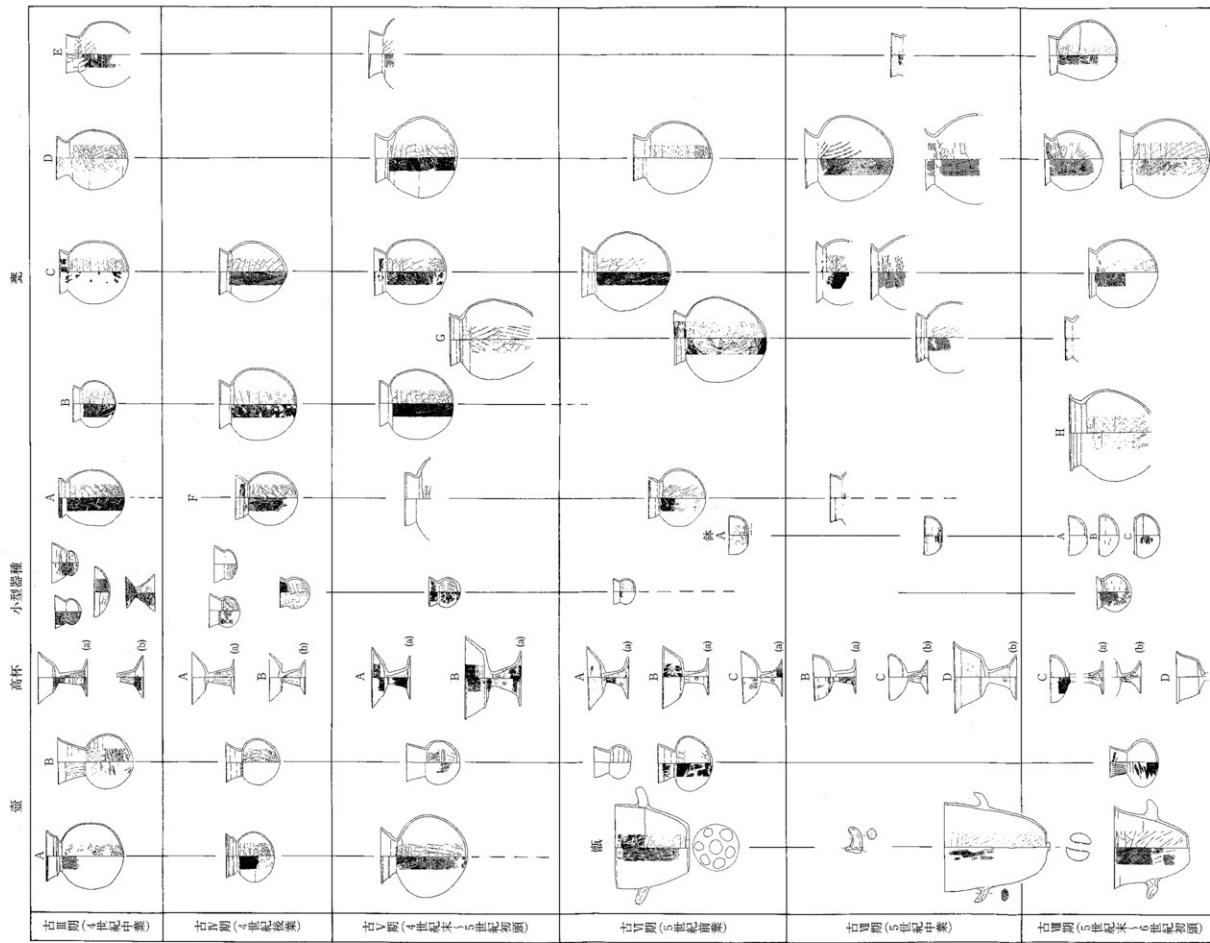


図116 古墳時代前期の土器の変遷

原尾島遺跡3-堅穴住居19（宇垣ほか1994）出土の土器群が指標となる。壺Aはなくなる。壺Bは胴部が球形のものと肩の張ったものとがあり、前者は口縁部が直線的に開くものが主体であるが、後者はやや内湾気味や受口状の口縁部を意識したものまでバリエーションが認められる。高杯はA・Bのほかに椀状の杯部をもつ高杯Cが認められるようになる。ただし、高杯の杯部のカーブは高杯A・Bの影響が認められる。この期の脚端部の形状は基本的に（b）となる。小型丸底壺はある程度認められるが、この期が最後となる。その一方で粗製の鉢が認められるようになる。壺は、布留式の影響を受けた壺Bは認められなくなる。若干内湾気味の口縁部を有するものがあるが、それは胴部の形状や調整手法からも壺Bの範疇とはいはず、壺Cとして分類される。この期の壺胴部の形態は、最大径が上半にあるものよりも中位にあるものの方が多くなる。また壺も認められるようになり、底部には円孔が多数あけられ、把手の断面形は丸い特徴を有する。

#### 古V期（5世紀中葉）

岡山市三手遺跡-土器溜まり（正岡ほか1994）、百間川兼基遺跡2-堅穴住居7（平井ほか1996）、三手向原遺跡-堅穴住居9（草原2001）出土の土器群が指標となる。高杯と壺、特に高杯に顕著な特徴が認められる。古Ⅲ期から存在していた高杯Aはなくなり、高杯Bも口縁部が内湾し口縁端部で外反する形態がより明確となる。高杯Cは精製された胎土のものが主流を占める。さらに高杯Bの杯部が大型化したものである高杯Dが認められるようになる。壺は胴部最大径が下半に下がり極端に下ぶくれに近い形態のものが一定量認められるようになる。壺は全形を示す良好な資料がないが、把手の断面形は円形である。

共伴する須恵器の時期から、5世紀中葉の時期といえる。

#### 古Ⅵ期（5世紀末～6世紀初頭）

三手遺跡-堅穴住居1（正岡ほか1994）、百間川原尾島遺跡2-堅穴住居24（正岡ほか1984）、岡山市津寺遺跡5-堅穴住居325（高畠ほか1998）、岡山市（旧御津町）伊田冲遺跡-堅穴住居（平井1986）、三手向原遺跡-堅穴住居1（草原2001）出土の土器群が指標となる。壺Aの主流は偏球形の胴部で、口縁端部がやや外反するものが主流で、これはヘラミガキ調整をおこない、やや胎土が緻密で器壁も薄い特徴を有する。高杯は高杯Cが大半となり、僅かに高杯Dが伴う場合もあるが、それはむしろ稀であるようである。壺Bはほとんど変わらない形態で認められる。鉢は、外開きの口縁部を有する鉢Aのほかに、内湾する口縁部を有する鉢B、口縁端部を僅かに外反させる鉢Cがある。壺は、壺Dが主流となり、下ぶくれの胴部をもつものがやや比率を増す。口縁端部を僅かに屈曲させた壺Eも認められるようになる。壺は底部にブリッジ状の仕切があるものと仕切のないものとがあり、いずれも把手の断面形は扁平となる。

共伴する須恵器から、5世紀末から6世紀初頭の時期といえる。

以上の変遷に東岡山遺跡の井戸1～3の土器群を当てはめてみると、器壁の薄い特徴をもつ井戸1の壺が最も古く、古Ⅵ期に位置づけられる。器種が豊富である井戸3についてみると、高杯A、壺B、壺Gが存在していることから古V期といえる。井戸2については、完形の壺が3個体もあるが、他器種が含まれていないことから、細かい位置づけをすることは若干困難である。壺Gが伴わないことや、壺Bがより井戸1出土の壺に近い特徴を有することを時期を示す特徴と解釈すると、古V期の範疇であるが井戸3よりも古相と考えられる。

つまり、井戸1～3は、4世紀後葉から5世紀初頭の時期幅の中で順次掘られ、廃棄された可能性が高いといえる。したがって、このような井戸の有り様は、この地点における該期の集落が小規模ながらも継続的な集落であったことをうかがわせているといえよう。

## 引用文献

- 岡本寛久ほか「百間川沢田遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 1993  
宇垣国雅ほか「百間川原尾島遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994  
草原孝典『三手向原遺跡』岡山市教育委員会 2001  
草原孝典『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会 2006  
高橋謙「土師器の編年 中国・四国」「古墳時代の研究」6 雄山閣出版 1991  
高畠知功ほか「津島遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 2003  
高畠知功ほか「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998  
高畠知功ほか「集成II 土師器」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社 1992  
西谷真治ほか『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959  
平井泰男「新庄尾上遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」62 1986  
平井勝ほか「百間川兼基遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114 1996  
弘田和司ほか「高塚遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」150 2000  
正岡睦夫ほか「津寺遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」90 1994  
正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994  
物部茂樹ほか「井手天原遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」156 2001

# 図 版

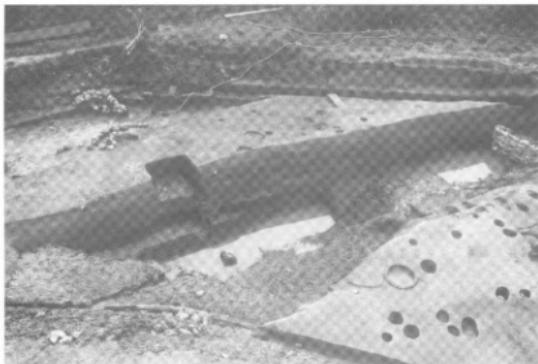
---

---

---

---

---



I 区 近世 溝 6 (東から)



I 区 近世 溝 6 (南から)



I 区 近世 溝 3 (集石部分)

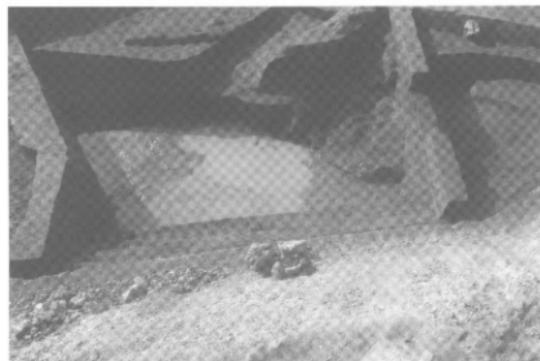
図版 2



I 区 中世遺構面(東から)



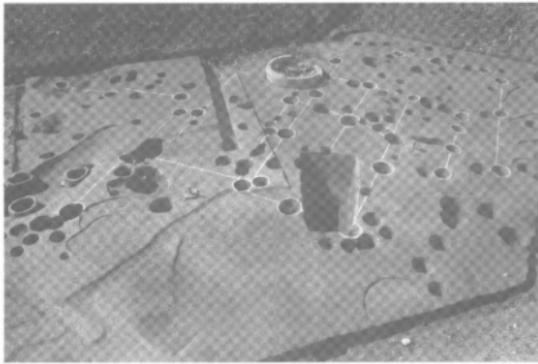
I 区 中世遺構面(南から)



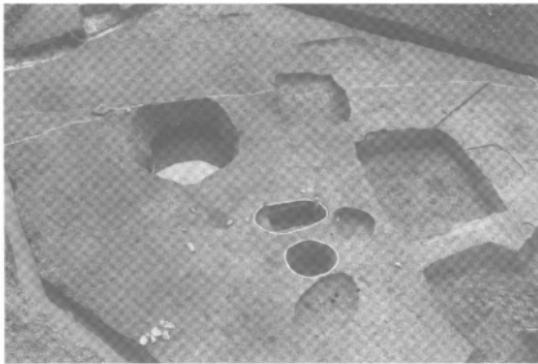
II 区 中世 溝7(東から)



II区 中世 溝7 断面



II区 近世 挖立柱建物

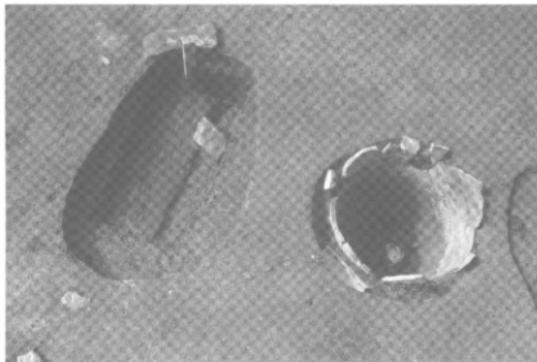


II区 近世 墓群 出土状况

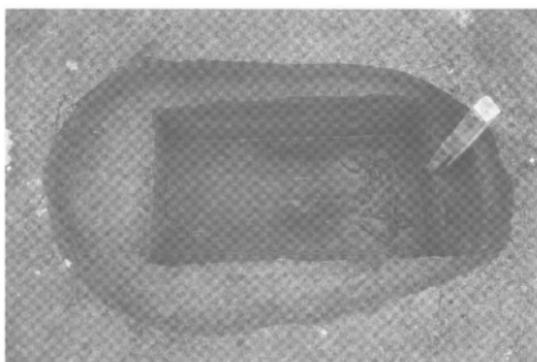
図版 4



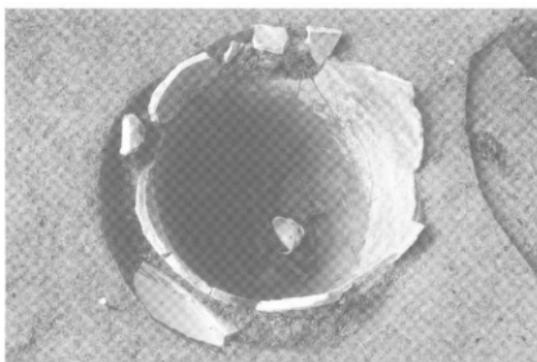
II区 近世  
墓1・墓2 出土状况



II区 近世  
墓1 出土状况

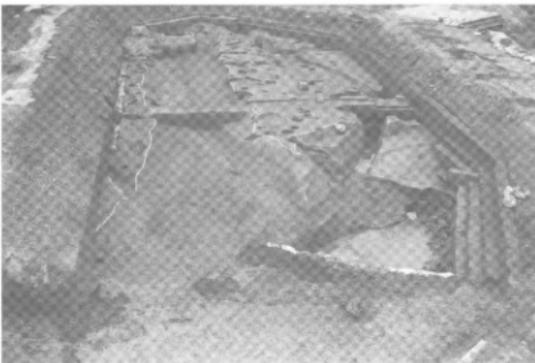


II区 近世  
墓2 出土状况





II 区 中世遺構面(東から)



II 区 中世遺構面(南から)



II 区 古墳時代遺構面  
(東から)

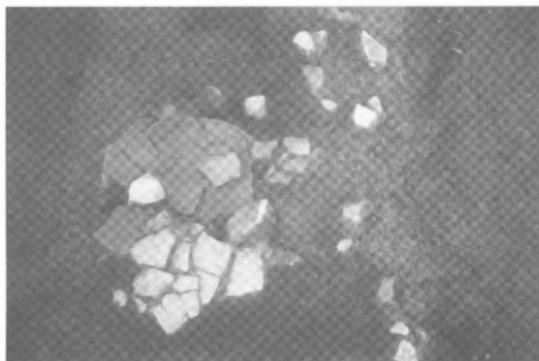
図版 6



II区 古墳時代遺構面  
(南から)

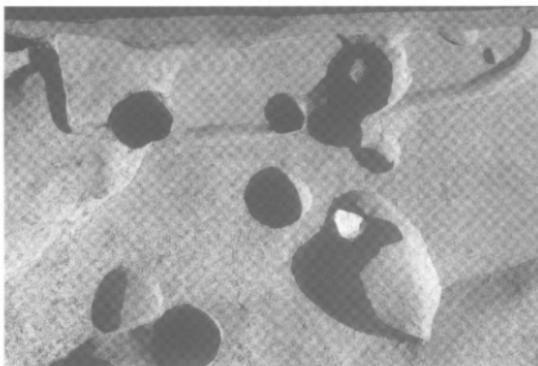


II区 古墳時代後期  
溝9 遺物出土状況

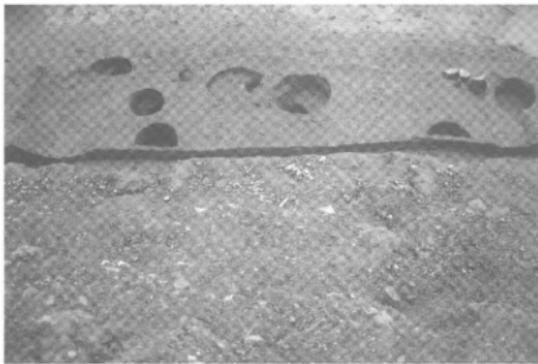


II区 弥生時代遺構面  
(東から)

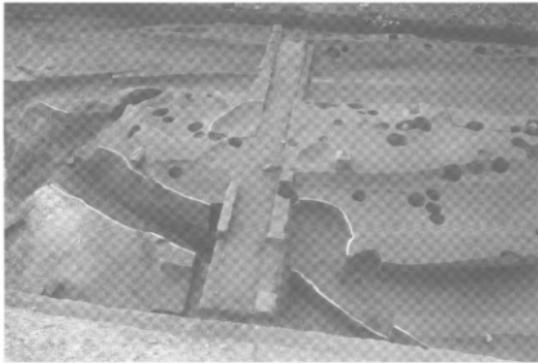




II区 古墳時代  
竪穴住居 2 完掘状況

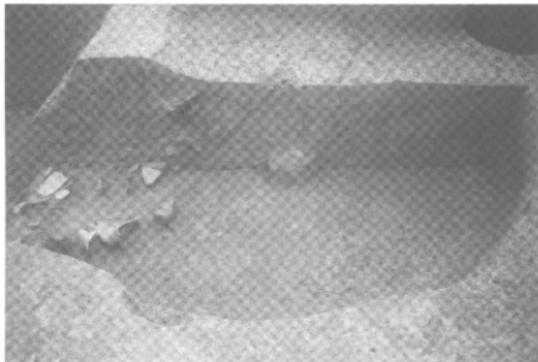


II区 古墳時代  
竪穴住居 1 完掘状況



II区 弥生時代前期遺構面  
(東から)

図版 8



II区 弥生時代前期  
P 385 断面



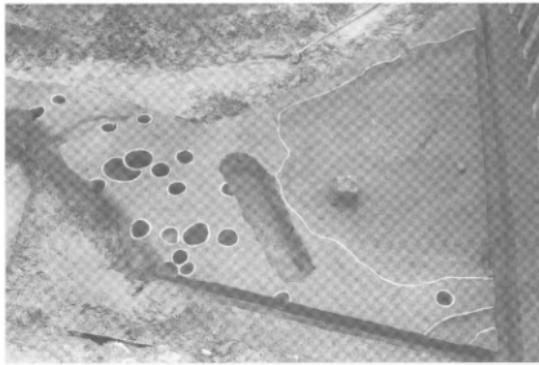
II区 弥生時代前期  
溝11 断面



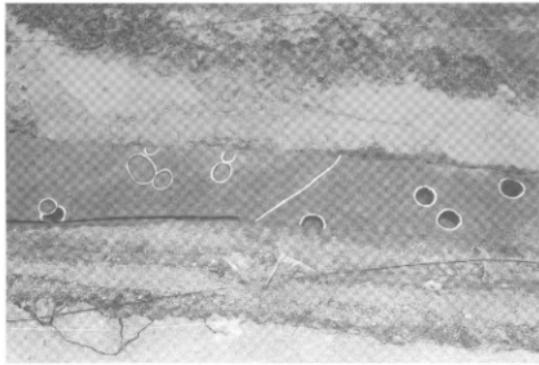
III区 近世遺構面(西から)



III区 近世溝18護岸



III区 中世遺構面  
(南西コーナー付近)

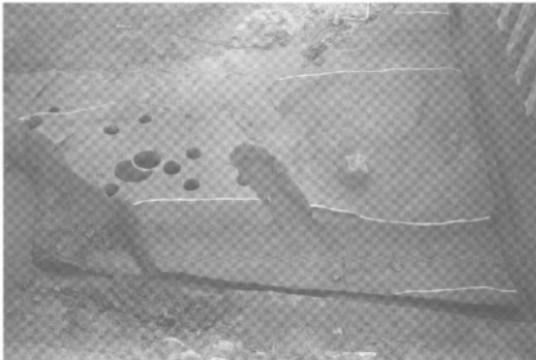


III区 中世遺構面(西半)

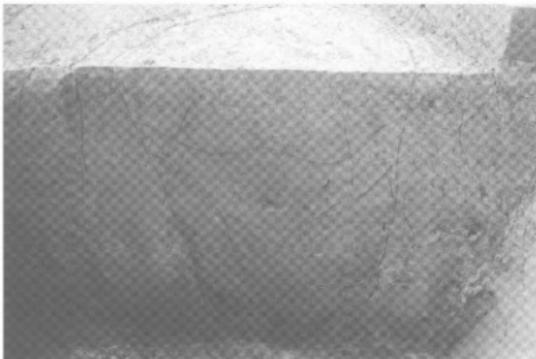
図版10



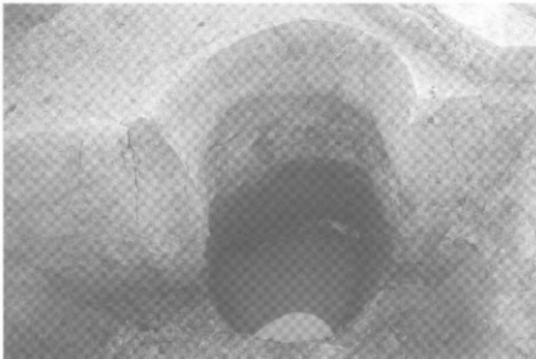
III区 古墳時代遺構面  
(南西コーナー付近)



III区 古墳時代  
井戸 1 断面

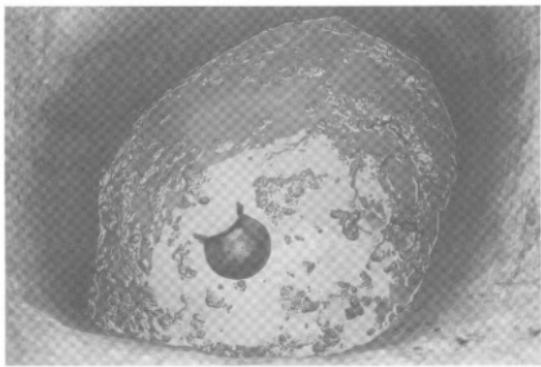


III区 古墳時代  
井戸 1 完掘状況

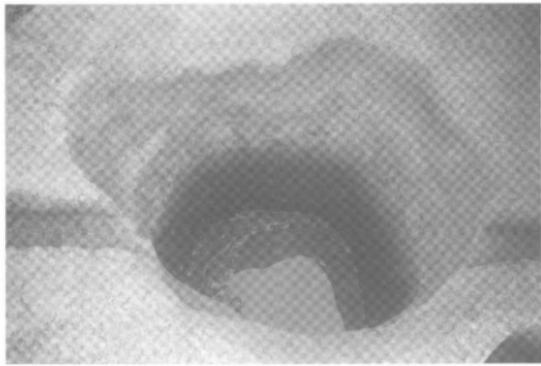




III区 古墳時代  
井戸 3 上層遺物出土状況



III区 古墳時代  
井戸 3 下層遺物出土状況



III区 古墳時代  
井戸 3 完掘状況

图版12



M2, M3



73



98



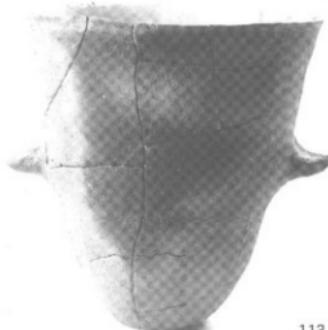
99



101



102



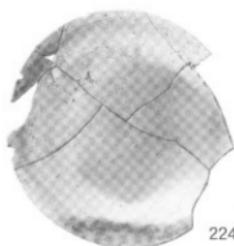
113



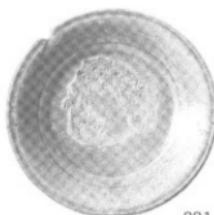
104 · 105



C 1



224



221



223



220



222



229



230



231



216



234

# 報告書抄録

ふりがな	ひがしおかやまいせき
書名	東岡山遺跡
副書名	中世後半から近世に連続する集落遺跡の発掘調査報告
編著者名	草原孝典
編集発行機関	岡山市教育委員会文化財課
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 Tel 086-803-1000
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしおかやまいせき 東岡山遺跡	おかやまけん 岡山県	33201		34	133	2004.9.21	1,500	市道建築工 事事業に伴 う事前調査
	おかやまし 岡山市			40	59	~		
	しも 下248-1			40	30	2005.1.31		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東岡山遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居	弥生土器	中世から近世へ			
		古墳時代	建物	土師器	の集落の変遷を			
		室町時代	井戸	須恵器	段階的にとらえ			
		江戸時代	墓	陶磁器	ることができた			

---

---

## 東岡山遺跡

-中世後半から近世に連続する集落遺跡の発掘調査報告-

発行日 平成19年3月31日

制作・編集 岡山市教育委員会文化財課

発行 岡山市教育委員会

岡山市大供1-1-1

印刷 株式会社三協印刷

「本印刷物の著作権は岡山市に帰属する。」

---

---

# HIGASHIOKAYAMA SITE

Excavation report on the village ruins from the latter term  
of the Medieval Period through the early Edo Period, in Okayama, Japan

March, 2007

The Okayama Municipal Board of Education